

根吹

一根吹遺跡発掘調査報告書一

平成7年3月

長野県下伊那郡阿南町教育委員会

国道151号線改良工事に伴う発掘調査報告書

根吹遺跡

1995. 3

長野県 飯田建設事務所
長野県下伊那郡阿南町教育委員会



国道151号線の改良工事



根吹道路の遠望



縄文時代早期土器片



93.5.15



縄文時代晩期合わせ甕棺

序 文

阿南町和合帶川根吹地籍で、国道151号線改良工事に伴う新設工事が計画されました。この地籍は以前から縄文時代・平安時代・中世の遺物出土地として知られ、独鉛石という特殊な石器が出土し、濃厚な遺跡地帯として注目されていたところでありますので、県教育委員会文化課のご指導により、記録保存の発掘調査を計画しました。

阿南町教育委員会には発掘調査組織がありませんので、その対応に苦慮しましたが幸い、調査担当者を今村善興先生にお願いし、現地調査主任に松村全二先生をお願いすることができまして、平成5年4月に発掘調査を開始、同10月に終了することができました。しかし、膨大な遺物整理のため、整理作業は平成5年後半と6年度にまで及びました。

発掘調査の結果は報告書本文にありますように、遺構、遺物の出土が断然多く、早稲田遺跡と並ぶ阿南町内屈指の大遺跡となりました。縄文時代の住居址、集石炉、集石造構、焼土塊等特筆されるもの多数の他、とりわけ阿南地方でも初めての発見であった土器棺墓及び条痕文の壺形土器と水式の壺形土器が組み合わされた「合わせ壺棺」が発見されたことは、飯田・下伊那地方でもまだ出土例が少なく極めて大きな意義のある調査であったと自負しています。

報告書刊行にあたりまして、土日曜日の休日まで使い献身的にこの調査にご苦労いただいた今村団長、松村調査主任、調査員、協力作業員の皆様に深く感謝申し上げるとともに、細かいご指導をいただいた県教委文化課、飯田建設事務所、阿南町建設課、何かとご協力いただいた地権者や近隣の方々に厚く御礼申し上げます。

平成7年3月

阿南町教育委員会

教育長 佐々木 昭典

例　　言

1. 本報告書は、平成5年阿南町教育委員会が実施した、国道151号線帯川地籍改良工事に伴う「根吹遺跡」の緊急発掘調査報告書である。
2. 根吹遺跡の発掘調査は、飯田建設事務所長と阿南町長の委託契約に基づき、阿南町教育委員会の委嘱による特設の調査団が当たっている。
3. 根吹遺跡の調査対象は広く、遺構・遺物の出土が多かったので、遺物出土地点・遺構測量はKKジャスティックに委託した。とくに、C地区では焼土群と集石遺構群が重複していたので、2回にわたって空中写真測量を実施している。
4. 担当者今村は、高森町調査を兼務しているので、土・日曜日を主体にして調査を進め、平日2～3日の作業は、調査主任松村の指導のもとに発掘作業を進めている。そのために、詳細の記録が取れなかったこともある。
5. 整理作業は、出土遺物量が多いことと、担当者の都合により、平成5年度後半と平成6年度に実施している。
6. 本報告書の資料作成に当たっては、現場での遺構測量はKKジャスティックに委託し、遺構補助測量は今村・林・小林が当たり、現場の写真撮影は今村が担当している。遺物整理、土器・石器の実測は今村・林が、土器拓本撮りは福田・三石・今村が当たり、遺構図整図・報告書編集執筆は今村が担当している。
7. 遺物写真撮影、帯川周辺の景観写真撮影は、唐木孝治氏に委託している。国道工事による地形変貌が多いが、報告書に載らない景観写真が多く残されている。表紙の写真は唐木氏が撮影したものである。
8. 遺物・測量原図・調査記録カード類・写真・調査日誌等関係書類は、一括して阿南町教育委員会が保管している。

目 次

口 絵 <国道151号線の改良工事>
<根吹遺跡の遠望>
<縄文時代早期土器片>
<縄文時代晚期合わせ甕棺>

序 文 阿南町教育委員会教育長
例 言

I. 発掘調査の経過	1
1. 調査の経過	1
2. 調査団組織	3
II. 帯川地籍周辺の環境	4
1. 帯川地籍の位置と調査区	4
2. 歴史的な環境	5
III. 発掘調査の結果	9
1. 根吹遺跡の位置と調査区	9
2. 調査結果の概要	9
3. 縄文時代前期の住居址	10
(1) 7号住居址	10
(2) 9号住居址	10
(3) 10号住居址	15
(4) 11号住居址	15
(5) 14号住居址	16
4. 縄文時代前期の集石炉・集石遺構	16
(1) H地区の集石炉	16
(2) G・H地区の集石遺構	17
5. 縄文時代前期の土壤	17
6. 縄文時代前期土器の文様形態	17
7. 縄文時代中期の住居址	34
(1) 1号住居址	34
(2) 3号住居址	34
(3) 4号住居址	35
(4) 5号住居址	35

(5) 6号住居址	36
(6) 8号住居址	36
(7) 12号住居址	37
(8) 13・15号住居址	37
(9) 16・17号住居址	37
8. 縄文時代中期・後期の土壤	57
(1) A地区の土壤	57
(2) B地区の土壤	57
(3) C地区の土壤	57
① 西土壤 1～14	57
② 東土壤 1～17	58
(4) D地区の土壤	58
(5) G地区の土壤	58
(6) H地区の土壤	59
9. 縄文時代後期の焼土をともなう遺構	59
10. C地区的集石遺構	59
(1) 石列遺構 1・2	59
(2) 集石遺構 4と周辺の遺構	60
(3) その他の集石遺構	60
① 集石遺構17・18・45	60
② 集石遺構27・40	61
③ 集石遺構11・12・13・14・15・44	61
④ 1号住居址周辺の集石遺構	61
⑤ 石列1以西の集石遺構 1・2・42	64
11. A・B地区的集石遺構	64
12. G地区的集石遺構	64
13. H地区的集石遺構	64
14. 縄文時代晩期の住居址・土器棺墓	83
(1) 2号住居址	83
(2) 土器棺墓	83
15. G・H地区的その他の遺構	84
(1) G地区的ピット群	84
(2) H地区的ロームマウンド 1・2	84
(3) H地区的竪穴状遺構	84
(4) G地区的石垣遺構	84
16. 各地区的遺構出土遺物	85
(1) G・H地区的遺物	85
(2) A・B地区的遺物	85

(3) C 地区出土の遺物	85
(4) D 地区出土の遺物	85
IV. 調査のまとめ	88
1. 阿南町内屈指の遺跡	88
2. 縄文時代前期の集落確認	89
3. 燃土群と集石遺構群	89
4. 縄文時代晚期の土器棺墓と土器片出土	91
5. 平安時代・中世の遺物	91

挿 図 目 次

第1図 根吹遺跡周辺の埋蔵文化財包蔵地図	7
第2図 根吹地籍の国道151号線改良計画	8
第3図 A～D地区遺構全体図	11・12
第4図 G・H地区遺構全体図	13・14
第5図 7・8・9号住居址	18
第6図 7号住居址出土土器	19
第7図 9号住居址出土土器	20
第8図 7・9・10号住居址出土石器	21
第9図 10・11・12・17号住居址	22
第10図 8・10号住居址出土土器	23
第11図 11号住居址出土土器(1)	24
第12図 11号住居址出土土器(2)	25
第13図 11号住居址出土土器(3)	26
第14図 11・14号住居址出土石器	27
第15図 H地区遺構全体図	28
第16図 G・H地区土壤・集石出土土器	29
第17図 G・H地区グリット出土土器	30
第18図 G・H地区出土の縄文時代前期土器(1)	31
第19図 G・H地区出土の縄文時代前期土器(2)	32
第20図 G・H地区土壤・集石・グリット出土石器	33
第21図 1号住居址	38
第22図 1号住居址出土土器(1)	39
第23図 1号住居址出土土器(2)	40
第24図 1号住居址出土土器(3)	41
第25図 1・3・4・5・6号住居址出土石器(1)	42

第26図	1・4・5・6号住居址出土石器(2)	43
第27図	2・4号住居址	44
第28図	5・6号住居址	45
第29図	4・5号住居址出土土器	46
第30図	6号住居址出土土器(1)	47
第31図	6号住居址出土土器(2)	48
第32図	12・13・14号住居址出土土器	49
第33図	17号住居址出土土器(1)	50
第34図	17号住居址出土土器(2)・石器	51
第35図	C地区土壤・焼土・集石群(下層)	62
第36図	C地区土壤・焼土・集石群(上層)	63
第37図	C・D地区土壤出土土器	65
第38図	G地区土壤・焼土出土石器	66
第39図	C地区焼土4・6・17と集石群	67
第40図	C地区焼土7・25と周辺の土壤・集石	68
第41図	C地区焼土1～25出土土器・丸石	69
第42図	石列1・2と周辺の焼土・集石群(下層)	70
第43図	石列1・2と周辺の焼土・集石群(上層)	71
第44図	C地区石列・集石2～41出土土器・鍾石	72
第45図	C地区石列・集石出土石器	73
第46図	8・12・13号住居址出土石器	74
第47図	C地区土壤・焼土・集石、D地区出土土器	75
第48図	A・B・D地区遺構外出土土器	76
第49図	C地区遺構外出土土器	77
第50図	A～D地区グリット出土石器(1)	78
第51図	A～D地区グリット出土石器(2)	79
第52図	各地区出土鍾石	80
第53図	住居址・焼土出土丸石(凹石)(1)	81
第54図	焼土・集石・グリット出土丸石(凹石)(2)	82
第55図	土器棺墓出土土器	86
第56図	A～D地区出土繩文時代後・晚期土器	87

写真図版目次

写図1	根吹遺跡の遠望	93
写図2	A・B・C地区の遺構	94
写図3	A・B地区の遺構	95

写図4	C地区の遺構	96
写図5	G・H地区的遺構	97
写図6	C地区上層の焼土と集石遺構	98
写図7	C地区下層の石列と集石遺構	99
写図8	石列1と石棒	100
写図9	1号住居址(上層)	101
写図10	1号住居址(下層)	102
写図11	1号住居址ミニチュア土器の出土状況	103
写図12	2号住居址	104
写図13	5号住居址	105
写図14	3・5号住居址の石廻い炉	106
写図15	6号住居址	107
写図16	14・7・8号住居址の重複	108
写図17	土壤1、14・7号住居址	109
写図18	8号住居址	110
写図19	9号住居址	111
写図20	10・12号住居址	112
写図21	11・17号住居址	113
写図22	縄文時代前期の土器片	114
写図23	1号住居址のミニチュア土器、17号住居址の香炉形土器	115
写図24	縄文時代後期壺形土器	116
写図25	縄文時代晩期の合わせ甕棺の出土状況	117
写図26	合わせ甕棺の出土状況	118
写図27	縄文時代晩期甕棺の土器	119
写図28	縄文時代前期の石器	120
写図29	縄文時代中期以降の錐石	121
写図30	剝離石器のいろいろ	122
写図31	H地区集石炉1・2	123
写図32	H地区集石炉3・4	124
写図33	H地区集石炉8・9・12	125
写図34	C地区石列と焼土群	126
写図35	C地区焼土3と下層の集石遺構	127
写図36	C地区焼土4と集石遺構18	128
写図37	C地区焼土6と集石遺構45	129
写図38	C地区焼土7と下層の土器、土壤2	130
写図39	C地区焼土10と下層の集石遺構	131
写図40	C地区焼土17と下層の集石遺構	132
写図41	C地区焼土8・9・14・23	133

写図42 C地区石列1の石棒出土状況	134
写図43 C地区集石遺構17・18・45	135
写図44 C地区集石遺構1・4・6	136
写図45 C地区集石遺構7・12・16	137
写図46 C地区丸石出土の集石遺構	138
写図47 C地区集石遺構19・20・21・22	139
写図48 C地区集石遺構28・31・32	140
写図49 C地区集石遺構33・34・40	141
写図50 C地区西土壤1・2・3・4	142
写図51 C地区東土壤2・3・4・6・7	143
写図52 D地区土壤群	144
写図53 D地区土壤Iと窓穴	145
写図54 帯川神社上出土の独鉛石	146
写図55 C地区的調査開始	147
写図56 G・H地区の調査風景	148

表 目 次

表1 和合地籍の埋蔵文化財包蔵地一覧	6
表2 阿南町発掘調査で検出された主な遺構	9
表3 根吹遺跡土壤・集石・焼土等出土遺物一覧	52、53、54、55、56

I. 発掘調査の経過

1. 調査の経過

平成5年1月、国道151号線改良工事予定地の帶川地区根吹地籍は、周知の埋蔵文化財包蔵地であるために、長野県教育委員会文化課・長野県建設事務所・阿南町教育委員会による保護協議が行われた。以前から広い範囲に遺物出土が伝えられ、上段地域（調査区C地区）では土器片が多く採集されたので、比較的長期にわたる記録保存の発掘調査の実施が決められた。

平成5年3月、阿南町教育委員会から今村に担当者委嘱の依頼があった。今村は、高森町発掘調査担当のこともあるので、① 土・日曜日を主体とした調査日を選定すること、② 測量業務を専門業者に委託すること、③ 平日の現地作業指導に松村全二を依頼することを条件にして受託することにした。3月15日に、建設事務所・阿南町教育委員会・調査担当者・調査主任等により、根吹地籍を現地踏査して、4月3日から調査開始と決めた。この日は積雪が5cmほどあって表面分布調査はできなかつた。

4月2日に資材準備をして、4月3日に現地へ資材を運び入れ、上段地籍熊谷四郎氏の烟を借用して、テントを設営する。上下4枚の階段状の田・畠ごとを調査区として、南側上段からA～Dの調査区を設定し、ほぼ南北に基準線を決めた。C地区の東側とD地区にグリットを設定して、グリット掘りを開始する。C地区の西側は段差の大きな水田があるので、重機による排土作業を始める。

C地区東側のA・B列では土器片の出土が多く、炭混入の土層もみられ、住居址またはその他の遺構の存在が予想される。C地区の上方では、重機の排土直下から夥しい焼土塊（後の焼土1）が検出されたり、その下方から埋甕らしい土器集中がみられた。この土器片が調査員によって取り上げられてしまつたので、上部の土器配置状況が不詳であることが惜しまれるが、縄文時代晚期の合わせ甕棺であった。

下段のD地区では、4個のグリット掘りをする。竪穴・土壤・焼土塊等が検出され、東側には黒色土の堆積の厚いところがあつて、平安時代灰釉陶器片や中世天目茶碗片も出土している。

4月5日からは平日3日、土・日曜日の作業を進め、D地区の竪穴址・土壤の検出を終了し、C地区東・南側の表土はね・整地作業を進める。C地区の上方には土壤の落ち込みが並び、焼土塊がある間隔を置いて直線的に並び、それらと平行するように石列や集石状の石群が発見された。

B地区に近い辺りは水田造成の削平が進んでいたが、縄文時代と思われる土器片や石匙も発見され、古い時期と思われる土壙も発見された。東側上方では、黒色土の覆土を持つ竪穴状の遺構（2号住居址）が検出され、無文の土器片が多く発見される。初めは平安時代の遺構かと思われたが、検出の結果、縄文時代晚期の土器片が集中して検出されている。水田の北側は埋め土が厚かつたがC地区全域の重機による排土が終わり、整地作業に入る。全域からの土器片出土が多く、ところによっては集中的に発見されたが、遺構を確認するには至らないので、KKジャスティックに委託して土器片出土地点の記録を取ることにした。

4月11日からは、上方A・B地区の排土作業にかかる。B地区の畠は耕作土が浅く遺物出土は比較的少なかったが、上段のA地区では、縄文時代中期の土器集中箇所もあり、住居址や土壤の所在が確かめられた。さらにその上方の山林地帯を重機により表土をはがしたが、2~3片の土器片出土に留まっている。

C地区の西側一帯を2度目の削り作業を進める。焼土塊や炭の面が各所にあり、縄文時代後期の土器片が多く、その下層に中期の遺構の重複がありそうなので、KKジャスティックに2回目の土器片の分布記録を依頼する。東側では、掘り下げるほど土器片の出土が多くなり、赤褐色土に焼土や炭の混入する土層中から縄文時代後期の土器片が集中するので、1号住居址とした。(後の焼土7・土壤2・3である)

4月19日からは平日の作業日を2日程度にして、土・日曜日に集中する。A地区では4・5号住居址の検出作業、C地区東側の炭の面の検出をする。焼土7の東側から縄文時代後期の壺形土器が1個体横倒しで出土した。

5月3日からは連休を利用して広い範囲の検出作業をする。A地区4・5号住居址の検出、C地区土器棺墓の検出、焼土2・3・8・9とその周辺の検出を進める。焼土群に平行するように石群の並びが検出され、焼土の下層やその周辺に集石遺構が検出された。石列の検出に入ると土器片の出土は少ないが鍤石が多く見つかり、石間に石棒状の長石が2個検出された。C地区西側下方にとくに土器片が集中するところがあり6号住居址とする。土器片の出土は多く竪穴式住居の形態であるが、炉の発見はなく、はっきりしたピットも検出されていない。

5月末は今村・松村の都合により現地作業を中断し、5月31日から再開する。土器棺の取り上げ・石列の検出・C地区の竪穴状遺構(後の1号住居址)の集石群の検出をする。6月10日頃には石列の上面の石群をはずし、石棒を中心に二列の石列を検出し、東側の焼土7・土壤1・2・3・4を検出する。とくに土壤2は、西側上層に焼土7が広がり、その東縁下側に縄文時代後期の壺形土器がある。その周辺や下層には炭を多く含む土層が各所にあって、集石遺構も重なり縄文時代中期の土器片集中部もあって、複雑な様相がみられた。石列1の東側にはさらに石列が並び、その東南一帯に焼土塊が多く、土器片が出土している。焼土10・16が検出されている。

6月下旬は雨天の日が多く、作業がはかどらない。焼土10の周辺・C地区東側の土壤群の検出を進めることなく、中央部には黒色土の落ち込みが各所でみられ、炭の混入も多く焼土群・集石群・土壤などが直線的に並んだり、取り巻くようにあることが分る。7月にはA・B地区とC地区上層の空中測量をすませ、焼土2・3・5・6等の切断調査により、焼土2・3・6の下層には集石遺構があるので、切断・写真撮影・集石の有無の確認作業を進める。

7月12日には県教委文化課小平指導主事・建設事務所竹村係長が現地を訪れ、調査期間延長の話が決まる。C地区では焼土塊と集石遺構の関連調査、1号住居址の土器群・石群の関連調査に作業が限定されるので、下段G・H地区の調査を平行させるために7月14日から帶川神社下の檜林伐採作業を進め、重機による抜根・排土作業をする。7月25日から鳥居前後の道路両側の削りの作業を始める。G地区の上方や北側H地区でも黒色土の落ち込み・住居址らしい落ち込みが確認される。

7月26日からG地区的掘り下げを始め、上方に3軒ほどの住居址が重複し(7・8・14号)、中央付近には9号住居址、南西側にかけて10・12号住居址、西側に11号住居址が確認され、縄文時代前期の土器片が多く出土している。7月31日からは7・8号住居址・9号住居址の検出作業にかかり、C地区

では焼土4・6・17の焼土部分を取り除くと、それぞれ下層に集石遺構があるので、順次検出作業を進めることとした。

8月3日からG地区の7・8号住居址・9号住居址の検出作業をする。8号住居址には石窯い炉がみつかり、7号・9号住居址は縄文時代前期、8号住居址は縄文時代中期と判明した。一方C地区では、焼土8・9・4・17の下層調査、1号住居址の検出が進み、円形状の竪穴となり、多くの土器片の中にミニチュア土器2個が発見された。

休みの後、8月20日からC地区では1号住居址、焼土・集石遺構・土壙の検出をし、G地区では9・10・12号住居址や土壤の検出をする。さらに西側の11号住居址の検出に入る。この住居址は深く各種の石匙形石器が多く出土している。12号住居址は南側用地外にかかる住居址であったが、幸い用地内に石窯い炉が検出された。

8月30日頃からは、G地区では11号住居址の下層調査・12号住居址の石窯い炉の検出・H地区では16・17号住居址の検出を進めている。C地区では焼土10の下層掘り上げ、石遺構26・27・33・40・44等の多くの集石遺構の検出作業をしている。

9月15日にはG地区7・8・13・14号住居址の清掃整備、9・10・11・12号住居址の整備・8・12号住居址の石窯い炉の掘り下げ・H地区の集石炉1~8の検出をすませ、G・H地区の空中写真測量をすませる。C地区では焼土10の下層を掘り下げると、土器片の出土が多く、石の重なりも多く集石遺構が検出される。

9月18日には、C地区1号住居址の土器群を取り上げ写真撮影をする。円形の竪穴であるが、炉は検出されずピットも発見されないことは6号住居址とよく似ている。H地区では土壤や配石遺構・ロームマウンドの検出調査をする。土壤の中には深いところに集石が検出される等複雑なところが多い。17号住居址では、土器片集中地の中に香炉形土器が検出され貴重な土器が確認された。まだ調査不足のことが多かったが、10月2日現地調査を終している。

平成6年1月から3月、平成6年8月から平成7年3月にかけて整理作業を進め、平成7年3月調査報告書を刊行している。

2. 調査団組織

(1) 調査事務局

阿南町教育委員会 教育長 佐々木昭典
同 社会教育係長 金田 修

(2) 調査団

調査団長 今村 善興(飯田市文化財審議委員)

調査主任 松村 全二(壳木村文化財調査委員)

調査員 林 貢 福田 千八 小林 薫 三石 久雄

協力作業員 熊谷今朝吉 池田 貞雄 金田 虎男 金田 恒延 北原 孝夫

金田 芳子 原沢淳一郎 関内 博邦 村松福太郎 長谷 秀男

岩田 市夫 宮下五三男 松下 梅治 古林 幸男 今村 俱栄

II. 帯川地籍周辺の環境

1. 帯川地籍の位置と調査区

帯川地籍は阿南町の南東部に位置し、壳木川の下流右岸の小台地に発達した集落で、井戸入沢・平沢に挟まれた西北面の傾斜地に20戸ほどの人家がある。

阿南町は下伊那郡の南部地域に属し、東側は天龍川を挟んで秦阜村に接し、北は妻沢山（1358）・干馬山（1255）・庄田山（965）の山稜を境にして下條村、西は蛇峠山（1663）・千本立（1465）を境にして浪合村・壳木村に接し、南は見違やその南側の山稜を境にして天竜村、新野峠を境にして愛知県豊根村に接している。南北14km・東西13kmに及ぶ広大な地域である。集落の中心は天龍川に面する東側一帯で、旧来の富草村・大下条村の一帯である。中央部の弁当山（980）・八尺山（1218）から南一帯は山地帶で、和知野川上流（和合川）の谷間に発達する和合本村、下流の巾川、壳木川下流一帯に発達した日吉・帯川の集落、南側一帯に広がる新野高原に発達した新野の集落が散在する。これらの集落の四隅は急峻で広大な山地帯が広がっている。

和合地域の地形を概観すると、阿南町の西部の山間地を占める一帯で、大きくは和知野川流域に属している。中央部の尾根状地形に形成された田代地籍を除いては、川沿いに発達する谷底集落が大部分で、和合本村・巾川・日吉・帯川の集落である。

和知野川は、和合地域の入口辺りの巾川地籍と和合川と壳木川とが合流している。別の言い方をすれば和合川地域と壳木川地域に二分されている。それぞれの上流には浪合村（和合川上流）壳木村（壳木川上流）とが隣接している。これらの上流地域は、それぞれの川の源流域にあるために谷底が広がり、高原性の地形を呈しているが、和合地域に入ると山頂部と谷底部の比高が増し、谷巾もせばまって急峻な山々に囲まれた谷底集落になっている。

帯川地籍は壳木川の下流右岸に位置し、和合川・壳木川の合流する巾川地籍からやく1kmほど上流にある。西南上方にある新野高原（標高800mほど）の北側を源流とする沓掛沢・平沢が一気に流れ落ち、壳木川へ合流する辺りで、平沢と井戸入沢によって形成された小扇状地上に発達するのが帯川部落である。南東側の傾斜面に集落が形成され、山際の傾斜面は畑、壳木川に近い低地に水田が形成されている。

今回の発掘調査地根吹地籍は、帯川集落の南上方に蛇行して造成されている国道151号線の南東上方に位置する。西側の宮沢川・東側の井戸入沢に挟まれた尾根状の台地で、幅150m・長さ300mほどの広さがある。下方と上方では中間に大きな段差で区切られてはいるが、ここらの地域としては他に例をみないほどの広い耕地がある。東側の井戸入沢からの用水路、南側の宮沢からの引水路、さらに上流の唐沢からのパイプ利用の通水管による引水により、下段はもちろん上段にも多くの水田が造成され、帯川集落の主要な水田地帯で、集落の鎮守社帯川神社が祀られている。

この井戸入沢と宮沢に挟まれた細長い台地は、傾斜を強めながら南東の天竜村境の見違の山地まで続いている。西北に眼を向けると、壳木川近くまで伸びていて、国道151号線を大きく西北へ湾曲させ

ていて、国道下の傾斜面が耕作地と集落地に利用されている。このような地形であるから、周知の埋蔵文化財包蔵地として知られてはいたが、今回の発掘調査により予想以上の濃厚な包蔵地であることが実証された。

2. 歴史的な環境

帯川地籍は江戸時代は帯川村と呼ばれ、幕府または知久氏の領地で、村高10石の小村である。明治時代になって和合・日吉・売木村とともに伊那県第22区・筑摩県第161区に編入され、明治8年に和合・日吉・売木・新野村と共に旦開村に合併し、その後、和合村・豊村・和合村の変遷を経て、昭和34年に旧富草・大下条・和合・旦開村の4か村が合併して現在の阿南町が形成されている。

帯川といえば江戸時代には帯川・心川・小野川・浪合の関所の名が知られ、ここ帯川に帯川関所が設けられ、交通の要衝のひとつであった。中世の頃、新野に在住した閑氏が、阿南地方南部地域に大きな勢力を張っていた。その頃、帯川がどのように領治されていたかは定かでないが、向方の枝郷であったという説もある。武田時代の弘治2年(1556)に波合口留番所とともに帯川の関所が設けられた。江戸時代には村高10石の小村で、領主関係は慶長6年は朝日氏、正保2年は知久氏、元禄15年は再び幕府領、天保15年はまた知久領というように変遷して明治に至っている。

和合地籍の埋蔵文化財包蔵地は、表1でみられるように16の包蔵地と3の城館跡が登録されている。昭和22年に宮坂英式先生により、心川西峯遺跡で縄文時代の竪穴式住居址、新野境の巣山遺跡で縄文時代竪穴式住居址、境の沢遺跡で敷石住居址等が検出されている。下伊那史にかかる詳細分布調査によって、いくつかの新資料の開拓が行われているが、縄文時代早期・晚期の遺物が多く発見されているのも特徴のひとつである。

今回の根吹遺跡の発掘調査により、縄文時代前期の住居址5~6軒、同時代の集石炉・土壙群が検出され、多くの土器・石器が出土している。縄文時代中期の住居址は7軒のほか、土壙群・集石群が検出されている。このほかに縄文時代後期と思われる石棒を伴う石列・焼土群・集石遺構群・土壙群も検出され、縄文時代晚期の竪穴状遺構・土器棺墓も発見されている。遺構の検出はなかったが、弥生時代後期・平安時代灰釉陶器片・中世の陶器片も発見されて、濃厚な遺跡であるだけでなく、幾時代にわたる主要な複合遺跡であることが実証されて、和合地区では最大の遺跡となっている。

縄文時代前期の遺跡は、飯田・下伊那地方で現在までに発見された遺跡は、他の時期に比べると余り多くないが、阿南町では新野地方に多いことが知られている。網張遺跡で検出された住居址はとくに有名で、出土した鉢形土器の完形品は特筆されるものである。この他にも、新野地域では10遺跡で縄文時代前期の土器・石器が発見されて、限られた地域の中でこれだけの遺跡が集中するところは少ない。和合地籍でもホドノ・巣山A・巣山B・帯川・根吹遺跡の5遺跡に上り、新野地方とともに縄文時代前期の遺跡の多いことが分る。とくに注意が必要なことは帯川地籍2遺跡の中で、帯川・根吹遺跡ともに縄文時代前期の遺跡であることである。

縄文時代晚期の竪穴状遺構・土器棺墓が検出されたことも特筆される成果のひとつである。和合地区では縄文時代晚期の遺物出土地は、押の田・境の沢遺跡だけであったが、根吹遺跡が加わって3遺跡に増加している。新野地域では10遺跡が登録されていて、縄文時代晚期の遺跡の多い地域のひとつとされている。南側の他村になるが、天竜村向方上の平遺跡・平岡満島南遺跡ではこの時期の土器が

大量に発見されている。この時代の文化の伝播経路が三河方面と考えられるので、その意味からもこれらの遺跡は重要な遺跡といわれている。今回の根吹遺跡で発見された縄文時代晩期の合わせ壺棺の土器は、極めて貴重な発見で、この地方の文化伝播の先駆けとなる大きな発見であった。

さらに眼を和合地籍の西・北側に転じてみると、壳木川上流の壳木村では、縄文時代晩期の遺跡は7遺跡が登録され、和知野川下流の和知野遺跡でもこの時期の遺物が出土し、大下条早稻田遺跡では宮下地籍・ハネ地籍・久保畠地籍から大量の土器片・石器が出土している。これらのことから類推すると、中間に位置する和合地籍では、今後さらに縄文時代晩期の遺跡が多く発見される可能性が高いと思われる。

城館跡も、押田尾館・田代城・蛇鉾が登録されている。大下条地籍に4か所、新野地籍に5か所が想定される地域であるから、関氏にかかる城館跡の多いところでもある。

表1 和合地籍の埋蔵文化財包蔵地一覧

町 番 号	県番 登 録 号	遺跡名	所在地	旧 石 器	縄文時代					弥生時代			古墳時代			平安時代			中 世	近 世	備考
					草 劍	甲	前	中	後	晚	前	中	後	土 師	須 恵	青 銅	灰 釉				
97	2948	宮の平	和合 宮沢					○	○			○							(宮沢)		
98		豆のそれ	〃					○													
48	2950	鈴ヶ沢	〃 鈴ヶ沢					○													
49	2949	城山	〃 本村 城山					○	○									○			
99		寺村	〃 〃 寺村					○											石劍		
100		岩の平	〃 〃 〃					○													
50		西峯	〃 心川 西峯					○				○									
101		押の田	〃 〃 押の田						○												
102		金谷	〃 日吉 金谷					○	○												
51		前畑	〃 日吉			○															
52		ホドノ	〃 〃 ホドノ				○	○	○						○	○					
53	2955	巣山A	〃 巣山				○	○					○	○	○	○					
103	2985	巣山B	〃 〃				○	○	○			○	○								
54		境の沢	〃 〃			○		○		○	○							敷石炉			
104		帶川	〃 番川				○	○													
105		ねぶき	〃 〃				○	○	○	○		○			○	○		独鉢石			
106	7385	上和合	〃					○													

1. 宮の原遺跡

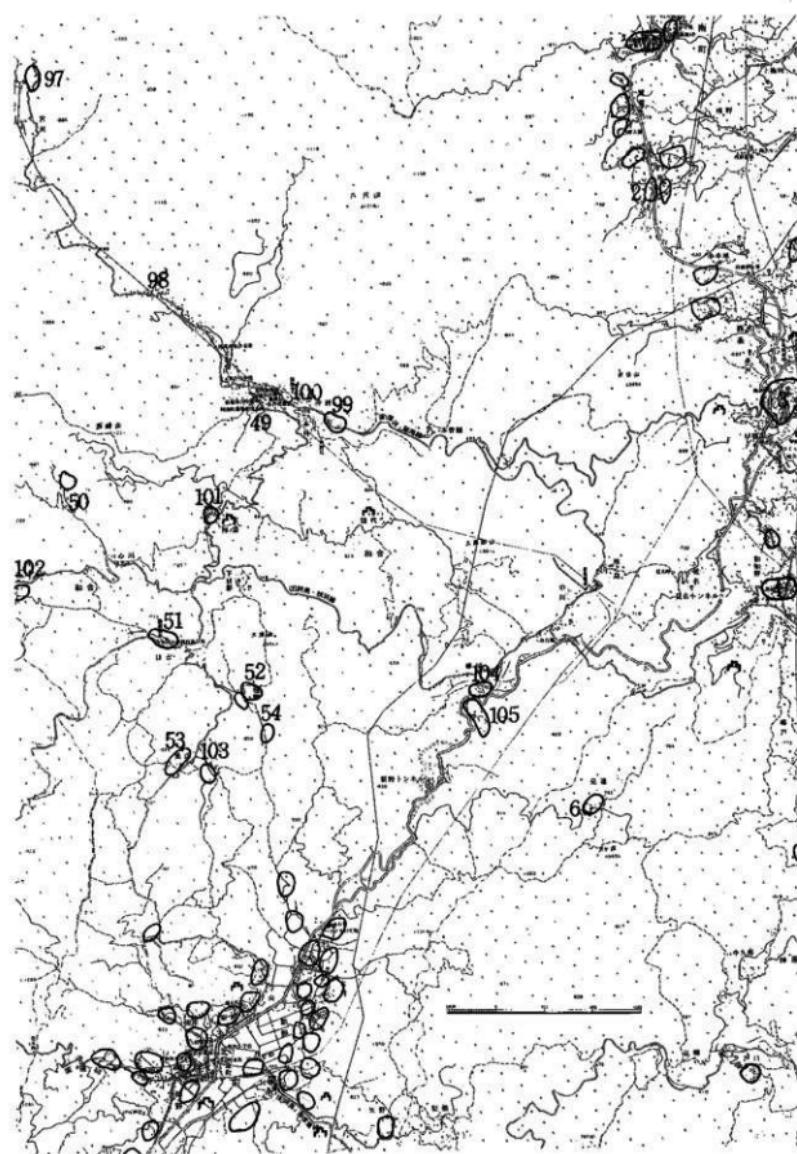
2. 門原白須

3. 早稲田(宮下・ハネ・久保田)

4. 和知野

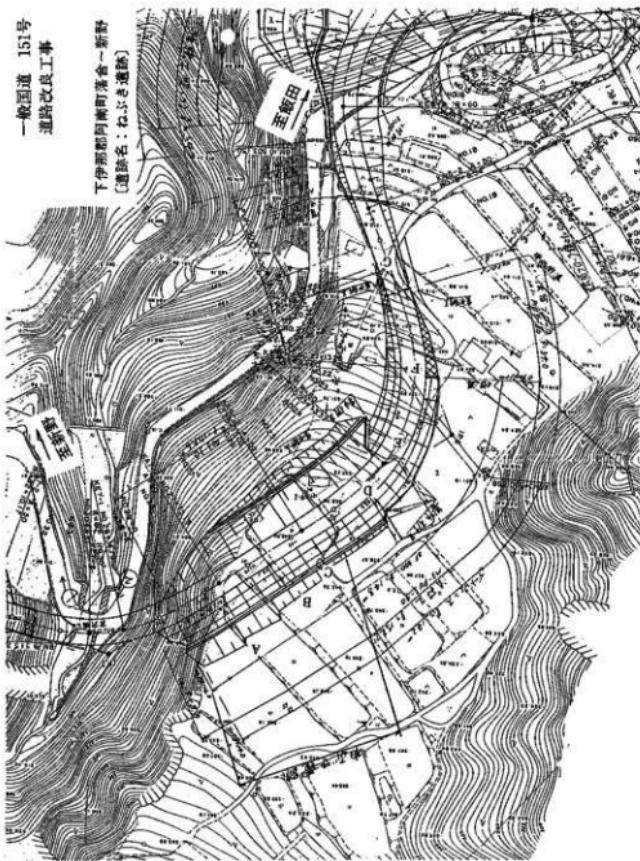
5. 綱張

6. 見達



第1図 根吹跡周辺の埋蔵文化財分布図

第2図 稲吹地新の国道151号線改良計画



III. 発掘調査の結果

1. 根吹遺跡の位置と調査区

根吹遺跡は、環境の項で触れたように和合地区帶川地籍にある。帶川部落の東南上方を蛇行しながら上下する国道151号線に取り巻かれる尾根状台地の先端部に当たる。東北の井戸入沢と西南の宮沢に挟まれて、東南から西北へ続く細長い台地で、この地方としては珍しいほどの広い耕作地が続き、水田も多く造成されている。耕地の広がる部分は上下二段に分かれている。中間の段差地形の先端に帶川神社が祀られている。国道151号線の改良工事により上方新野地籍に建設されるループ線につながる道路がこの台地を縦貫する計画で、それに先立つ発掘調査であった。この台地を深く割り取り湾曲しながら建設されるので、第2図にあるようにこの台地の中だけでも200mほどの長い距離になる。調査地を便宜的に耕地単位で区分して、上段地域を南側上方からA・B・C・D地区とし、中間斜面(帶川神社周辺)をE・F地区、神社下の平坦面をG・H地区とした。標高はD地区上方で548m、C地区下方で540m、G地区下方で514mである。

2. 調査結果の概要

阿南町で検出された遺構を遺跡別に上げると次のようである。

表2 阿南町発掘調査で検出された主な遺構

no	遺跡名	縄文	弥生	古墳	平安	中世	土壙	集石	土棺墓	周溝墓	火葬墓	工房址	その他
1	宮の原遺跡	1										2	
2	中釣根ノリ		2				3			1			
3	白須ノリ	6					6						
4	早稻田宮下	1		1	1	2	10	4			8	4	
	ハネ						2						
	久保畠	1					100	3					縄文早期土器
5	和知野遺跡	3											
6	西峯ノリ	1											
7	巣山ノリ	1	1										
8	境の沢ノリ	1											
9	根吹ノリ	17					114	65					
10	千治林ノリ				2								
11	網張ノリ	1											

調査地区全体を合わせると、縄文時代前期住居址5軒、同中期住居址11軒、同晚期住居址1軒で、合わせると17軒確認されている。縄文時代前期の集石炉と判断できるものはH地区で5基あり、集石遺構は59基でその内C地区に47基が集中している。とくに焼土と結びつくものが多い。焼土塊はC地区に最も多く28か所が確認されている。石列1・2と重複したり直線的に配列されるグループ、北側斜面に固まるグループがあって、焼土塊の下に集石遺構を伴うものが9基以上確認され、ごく近くにあるものを含めると11基以上にある。時期の判定は困難ではあるが、石列・焼土・集石遺構は関連するものと思われ、縄文時代後期とする条件が多いと判断している。土壙の数は各地区とも多く、総計114基の多くに及ぶが、地区ごとに時代差がある。C地区では縄文時代晚期の竪穴状遺構と土器棺墓が検出されている。

「主な遺物」

縄文時代前期から同中期・後期・晚期にわたる土器・石器の出土は多いが、土器の完形品は総体的に少ない。縄文時代中期の香炉形土器1・ミニチュア形土器2・器台形土器半完形品5、縄文時代後期壺形土器1、縄文時代晚期壺形土器2である。土器片は、縄文時代前期・中期・後期・晚期のものが多い。量は少ないが、弥生時代後期・平安時代・中世の土器片・陶器片も出土している。

3. 縄文時代前期の住居址

(1) 7号住居址(第4・6・8図、写図16)

G地区上方で発見された竪穴式住居址であるが、縄文時代中期の8・15号住居址に切られ、傾斜地のため耕地造成で削られ3分の1ほどしか残されていない。残された部分で推量すると、径4.8mほどの円形竪穴住居で、14号住居址との高低差はやく20cmほどある。ピットはP1～P4の4個ほど検出され、深さはそれぞれ35・38・36・66cmほどあり柱穴の条件は揃っている。西側に3この石を配した窪みがあるが、焼土は発見されていない。

出土遺物は土器片・石器で、第6図の土器片は1～5は粘土紐貼り付けを押引で調整した文様、6～14は半割竹管による爪形文、15は凸帯文、16は浮線文、21～は集合条線文、46～は斜縄文・羽状縄文の土器で、縄文時代前期後葉のタイプのものである。

第8図1～12は小形石器で、1は珪岩製スクレーパー、2は蛋白石製の石錐状の石器、3は平基形のチャートの石鎌、4は珪岩製の石匙、5～12はスクレーパー等の剥片石器で、7・11・12は黒曜石で、後は珪岩または貝岩製のもので、大形な石器は発見されていない。

(2) 9号住居址(第4・5・7・8図、写図19)

G地区のほぼ中央で検出された変形梢円形の竪穴式住居址で、長径4.0m・短径3.6mの大きさである。炉がはっきりしないので、主軸方向は不詳である。やや東に偏ってピットが8個検出され、40・30・28・26・33・11・25・23cmを測る。位置・深さ等からP1・P3・P4・P5・P7が主柱穴かもしだれない。西寄りに数個の石を配する窪み(P6)があり炉のように思えるが、焼土は検出されていない。



第3図 A～D地区遺構全体図



第4図 G・H地区造構全体図

い。耕作等による削平もあって、壁高は15~20cm程度で、床面も軟弱で小石混じりの黄土で境している。出土した遺物は土器片・石器だけで、完形・半完形の土器は発見されていない。第9図1~8は半割竹管による連続爪形文のもの、9~11は弧線による区画文の土器で、9は鉢形土器の口縁で縫孔が取り巻いている。13は貼り付け文、14~20は浮線文系、21~32は平行沈線等の組み合わせのものである。38~48は縄文施文のもので、斜縄文・羽状縄文がみられる。

石器は小形石器だけで、第8図13~18である。13はチャート製横形の石匙、14は貝岩製のスクレーパー状石器、後は硅岩・蛋白石・はんれい岩製の剝離石器で、黒曜石製の石器はないが黒曜石の破片は出土している。

(3) 10号住居址(第8・9・10図、写図20)

G地区中央の南側にあり、12号住居址に切られた椭円形状の竪穴住居址で、東西4.1m・南北(推定で)3.5mほどである。竪穴の掘り形は浅く15~20cm程度である。床面もはっきりしないので、集石・土色から判断するほど軟弱である。ピットの位置もはっきりしない所もあったが、P1~P7が10号住居址のものと思われ、深さは19・21・20・21・20・17cmと浅いものばかりである。位置的にみれば竪穴内を取り巻く配列で、北側に並ぶP1・P7辺りが入口部のようにも思えるが、炉の位置ははっきりしない。P5の回りには人頭大以上の石の集合があったが、炉と断定するほどの焼土は検出されていない。

出土した遺物も余り多くないが、第9図30~52が土器片で、連続爪形文・条線文・斜縄文・羽状縄文・円形竹管文・無文の土器が出土している。石器は、第8図19~23のもので、19は蛋白石製の横形石匙、21は貝岩製の縦形の石匙状石器で、20・22は硅岩製のスクレーパー、23は硬砂岩製の横刃型石器である。この住居址からも黒曜石は出土しているが、黒曜石製の石器は出土していない。

(4) 11号住居址(第9・11・12・13・14図、写図21)

G地区の西側にあり、西半分が用水路で切られた方形状の竪穴式住居址で、プランは東西4.3m・東西やく3.8m(推定)ほどの不整形な長方形である。この地域では掘り形が最も深い住居址で、東側で96cmを測る。壁の傾斜は緩やかで、床面での南北の長さは3.5mほどに縮まる。覆土は黒色土の堆積が厚く、中層から土器片・石器の出土が多かった。床面近くまで黒色土があり、炭の混入があったので床面の識別はできたが、床面は軟弱であった。ピットの検出は困難であったが、P1・P2・P3・P4が検出され、深さは15・19・8・27cmでさほど深くない。西側水路際に9個の人頭大石による集石が検出され、炭や焼土も検出されたので、炉かとも思われる。炉であるとするならば竪穴の中央や西側に位置し、住居の主軸方向はW9°Sとなる。西側にはまだ用地が続くが、水路があり耕地の段差があるので、拡張調査は不能であった。

出土した遺物は完形土器は発見されていないが、第11・12・13図にあるように土器片の出土が多い。11図1~13は連続爪形文のもので、中には垂下隆線文・沈線による区画文で構成されるものもある。14~39は集合条線文を地文にして貼付文やボタン状貼付文のもので、この地域ではこの住居址から最も多く出土している。40~69は集合条線文系のもので、貼付文の下方に続くものと単独上方のものがある。第12図1~26は、垂下隆線文・押引文・印刻文・平行沈線文等の口縁部であり、27~29は浮

線文系の口縁部、30～40はいろいろなタイプの口縁である。41～86は上記のいろいろな文様の胸部片である。第13図1～15は縄文系のもので、斜縄文・羽状縄文がみられる。4は山形状の印刻文が施されている。26～32は無文系のものであるが、26の裏面は筆状工具により削られた幅の広い調整痕が残されている。34は土製円板であり、35～39は底部であるが、平底形のいろいろなタイプがある。

第14図の1～25は出土石器で、20・22・23は硬砂岩製の鍤石・打石斧・横刃型石器で、7は黒曜石製のエンドスクレーパーである。これら4この石器を除くと、後は珪岩製・蛋白石製・貝岩製の石器である。(黒曜石の剝片は数個出土している)1・2は蛋白石製・貝岩製の横形石匙、3は凝灰岩状の縦形石匙、4は赤色硅岩製の斜形石匙、5は貝岩製のスクレーパー形石器、6は蛋白石製の平基の石鏃である。8～19・25は蛋白石・硅岩・貝岩または類似の石材によるエンドスクレーパー・スクレーパー状の剝離石器で、中には風化の進んだものも含まれている。21は貝岩製の石核状のもので、剝離面が多く残されている。

(5) 14号住居址(第5・14・32図、写図17)

G地区東側の7号住居址の東側上方にあって、7号住居址に切られ、北側は15号住居址に切られ、5分の1ほど残された円形状の竪穴住居址である。7号住居址との高低差は20～25cmほどある。東側の壁の高さは30cmで、東南上方に土壙1がある。壁沿いと壁上に4個のピットが検出され、それぞれ54・13・38・40cmと1個を除いてはこの地域の住居址の中では深いピットである。

出土した土器・石器は少ないが、第32図15～29は出土土器で、縄文系・平行沈線文・浮線文土器が含まれている。第14図は石器で、26は珪岩製の小形横形の石匙、27は黒曜石製・29は硅岩製のスクレーパーで、28は硬砂岩製のスクレーパーである。この住居址は時期判定が難しいが、中期の遺物がほとんど出土していないので、縄文時代前期と扱っている。

4. 縄文時代前期の集石炉・集石遺構

(1) H地区の集石炉(第15・16図)

G・H地区では集石遺構は14基検出されている。この中で集石炉と思われるものは、H地区の5～6基である。H地区の東側傾斜面に4～5基並ぶもの(集石炉1・2・3・4・5)と道路沿いに検出された集石7と思われる。上面でみた所で炭混じりの黒色土がみられたものは集石炉1・2・3である。その中で顕著なものは集石炉1である。この集石炉は遺構検出部の最上段に位置し、径75cmほどの浅い掘り込みの中に炭混じりの黒色土が10cmほど詰り、上面に拳大から人頭大以下の石が重ねられている。窪みの深さは10cmほどなので、二重・三重に重なる石はない。焼土は穴底で検出され、石は焼けている。出土した遺物は少なく、前期と思われる土器片が3点ほど出土している。(第16図14)この集石炉の西北側に集石炉2・3・4が直線的に並び、西側1.5mほど離れた位置に集石5・10がある。集石10からは第16図22～30の土器片が出土している。

集石炉7は中央の道路沿いで検出されている。長径1.2m・短径90cm、深さ35cmの窪みの中に12個ほどの焼石が置かれ、焼土や炭の混入もみられた。この東側上方には焼土塊が広がる所があった。

(2) G・H 地区の集石遺構 (第15・16図)

集石遺構はG地区で2基、H地区で6基検出されているが、これが全部縄文時代前期とは思えない。縄文時代前期の土器片が8基とも全部出土し、中期の土器片が出土したものはない。G地区的集石遺構1・2は土器片出土が55・42と非常に多い。H地区的集石遺構6・8・9・10・11・12の内出土土器の多かったのは8・10・11・12で、それぞれ15・55・42・30片で集石炉として扱ったものより土器片の出土が多い。このことは、落ち込みの深さの違いによるのか、機能的な違いによるものかも知れない。どの集石遺構からも炭の出土は多いから、これらの中にも集石炉として好いものも含まれている。何れにしてもH地区では集石炉・集石遺構が集中的に検出されている。

5. 縄文時代前期の土壤

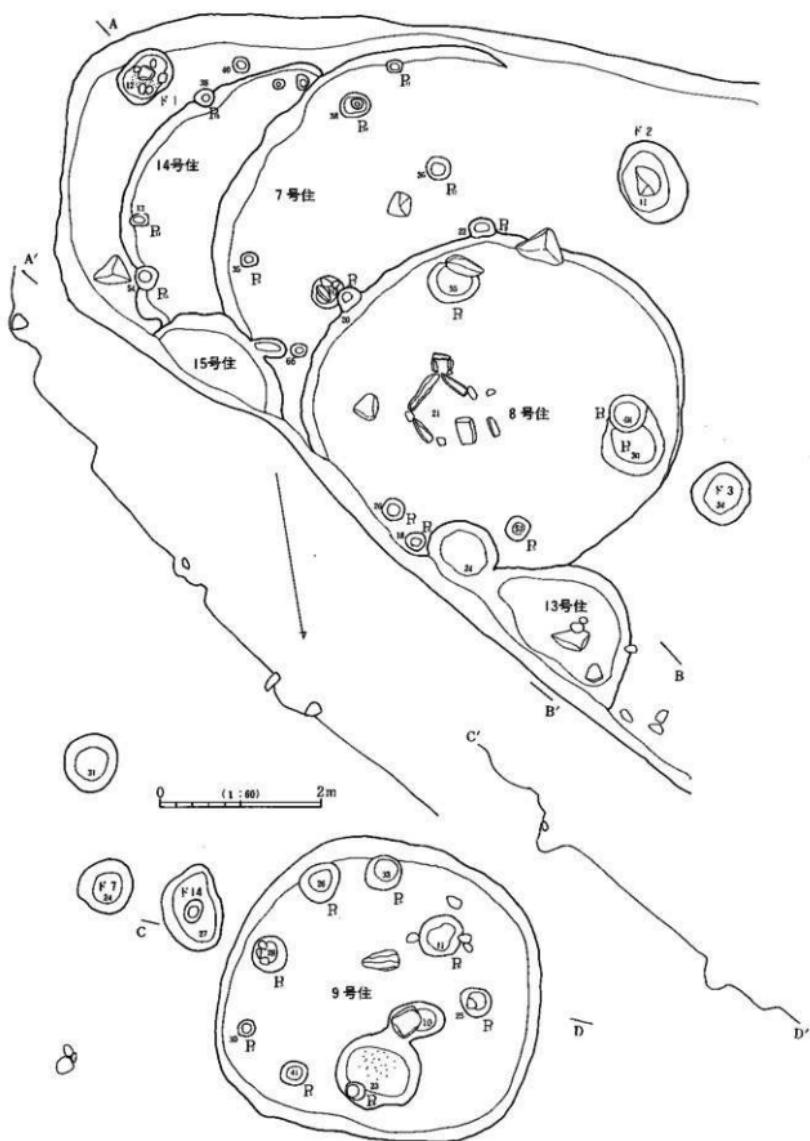
G・H地区では、登録した土壤はG地区では16基、H地区では20基であるが、表2の一覧で分るよう縄文時代中期の土器片と前期の土器片が出土しているものが多い。前期の土器片だけ出土したものは、G地区では土壤2・3・8・11・12である。これだけでは決め手にならないが、20点ほどの土器片の出た土壤11は前期の条件が揃っている。H地区でも同様で、前期の土器片出土の多いものは土壤4・5である。前期か中期かはっきりしないが、東側上方に位置するものは前期のものが多いかと思われる。

6. 縄文時代前期土器の文様形態

G・H地区出土の縄文時代前期土器の文様には各種あるが、第18図1～8は連続爪形文・連続爪形文と竹管円文が組み合わされたものである。9は尖った工具による区画文・弧文・平行と斜沈線で構成され、連続縁孔のついた鉢形土器の口縁部である。10～17は集合条線を地文にして、粘土紐貼付け文を施したタイプで、ボタン状突起の付くもの(11・14)、条線を地文にしたもの等がある。15は貼付け帯の剥れた跡がある。18～24は集合条線の部分の多い土器であるが、部分的に貼付け押引の凸帯が付くものが多い。21は口縁に刻みがつき、羽状の条線で構成されるもので、18は底部、23・24は底部に近い部分である。貼付け押引による凸帯の付く条線で構成される土器片(10～24)は、10・15は7号住、13は17号住で、ほかは全部11号住出土である。25は平行・斜沈線によって構成され、口縁に押引文が付く。26は竹管による平行集合沈線が付けられる。

第19図1は口縁部で、平行沈線・斜沈線を細かく刻み付けたもの、2は竹管による交差する条線で構成される波状口縁、3は連続爪形文と結節浮線文・竹管円文を組み合わせたもの、4は半剖竹管により縦横交差するように構成され、ボタン貼付け文を付けたもの、5は口唇部に刻み目・口辺に三条刺突文を付け、三条の沈線弧文の上に円文を配した口縁である。6～9は浮線文系のもので平行帯・円または弧文帯の付くもので、10は口唇部に竹管円文を付け、口縁部に浮線文が付くもの等で、集石遺構・土壤から出土したものが多い。

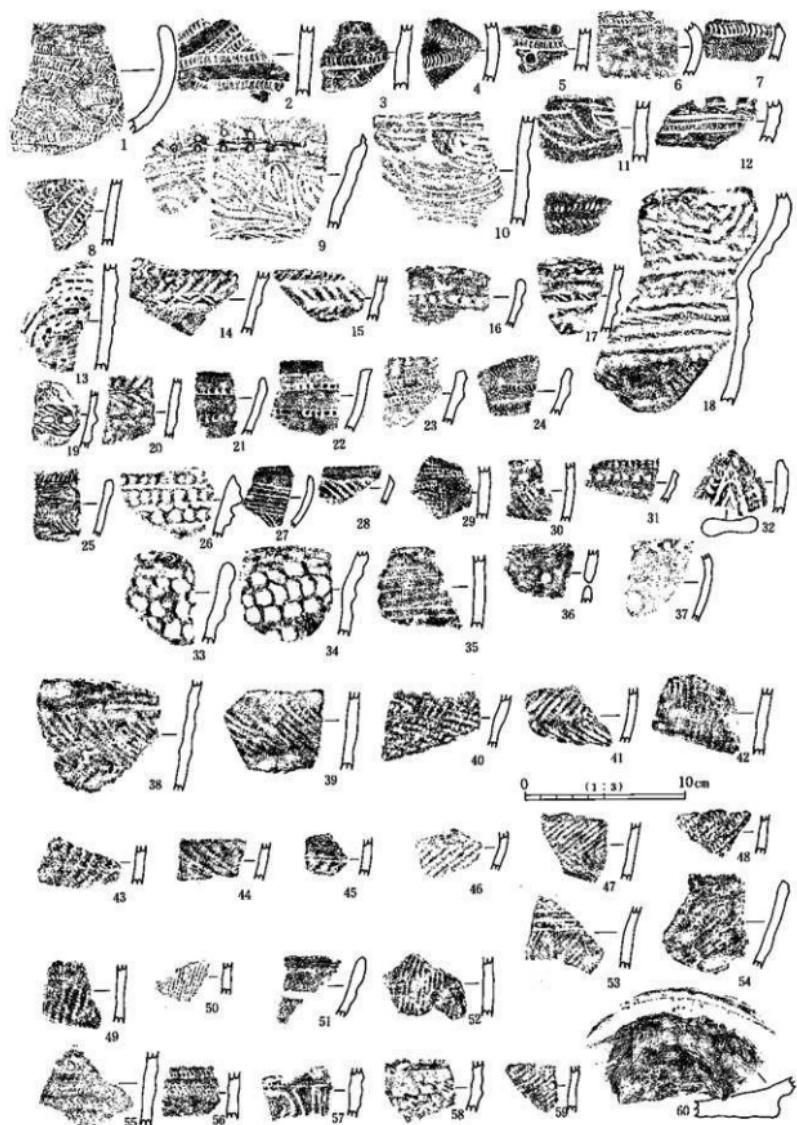
11・12・15は羽状縄文を地文にして隆帯に山形の刻みの付く薄手のタイプである。19～22は朱彩土器で、縄文のもの・連続爪形文と斜縄文のもの・連続爪形文だけのものと等がある。23は平行沈線を



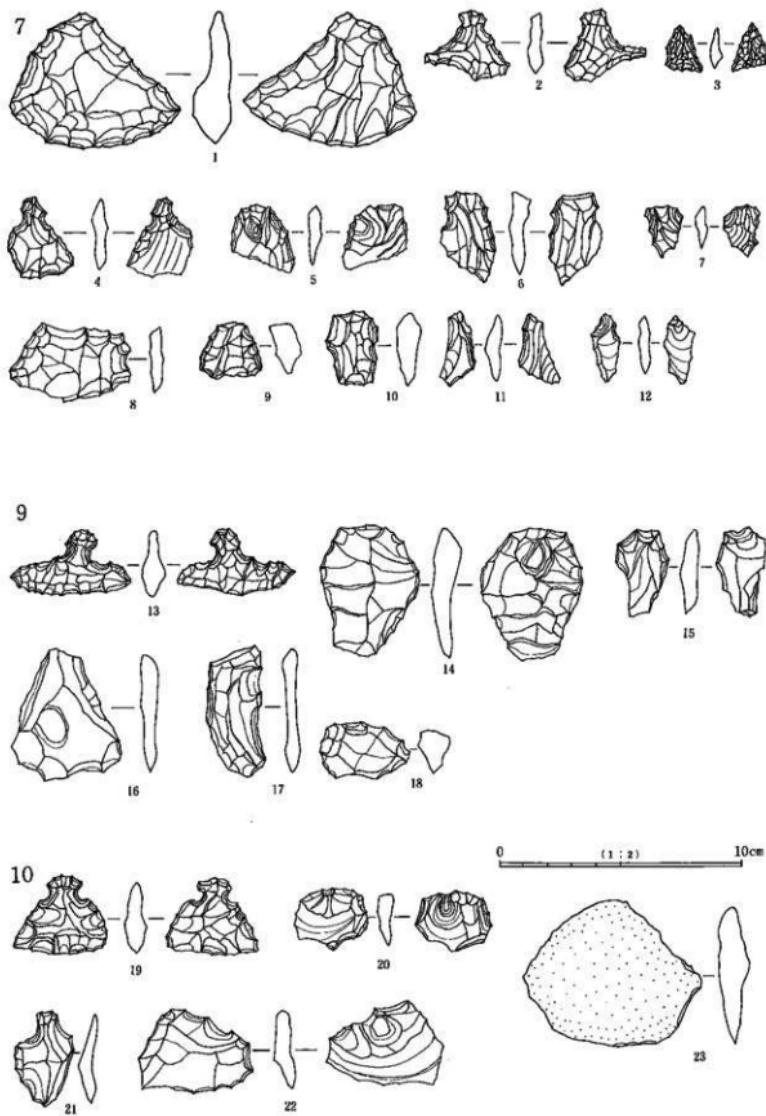
第5図 7・8・9号住居址



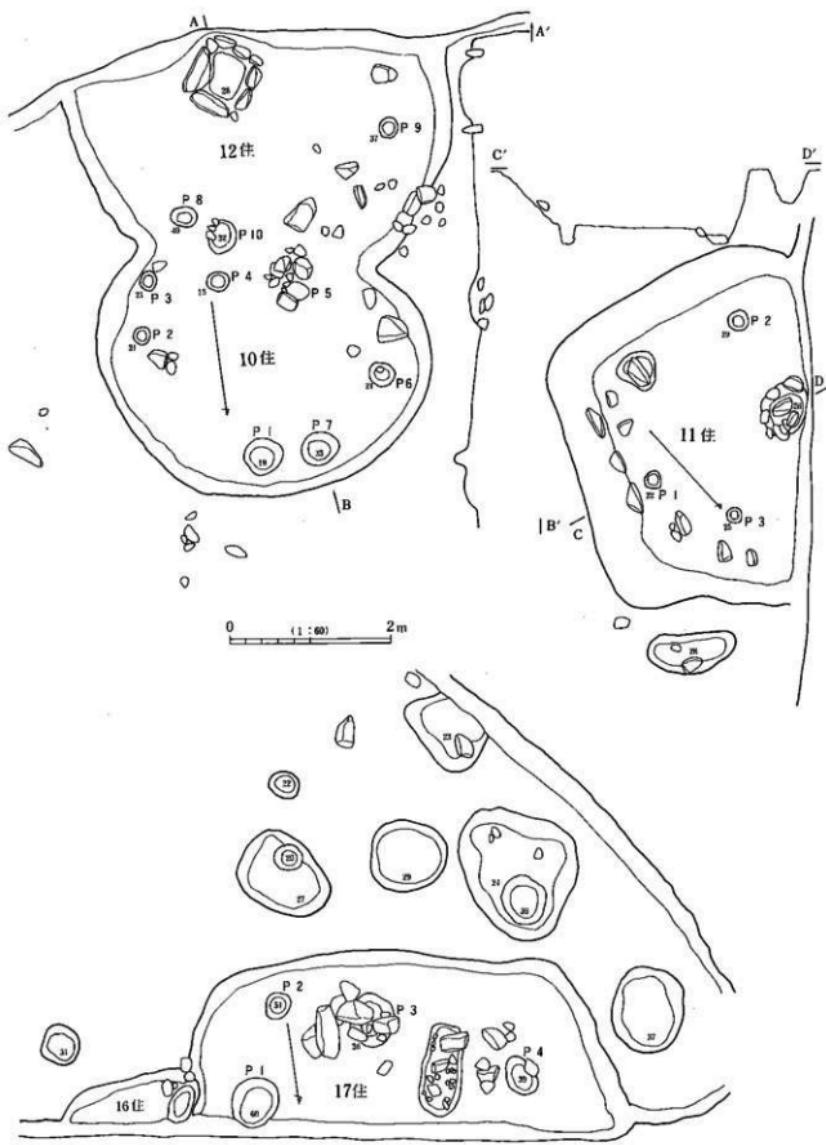
第6図 7号住居址出土土器



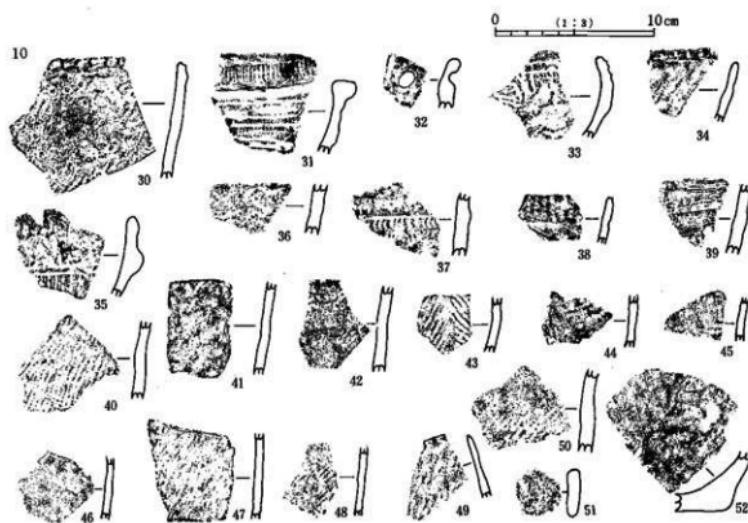
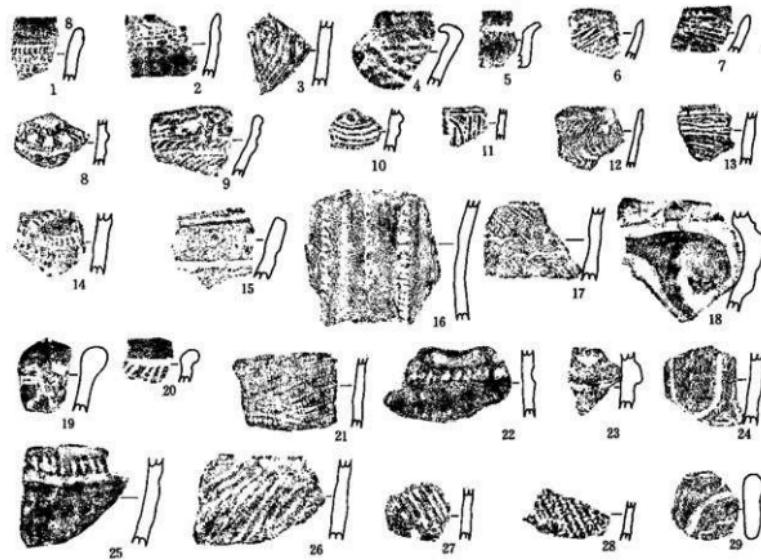
第7図 9号住居址出土土器



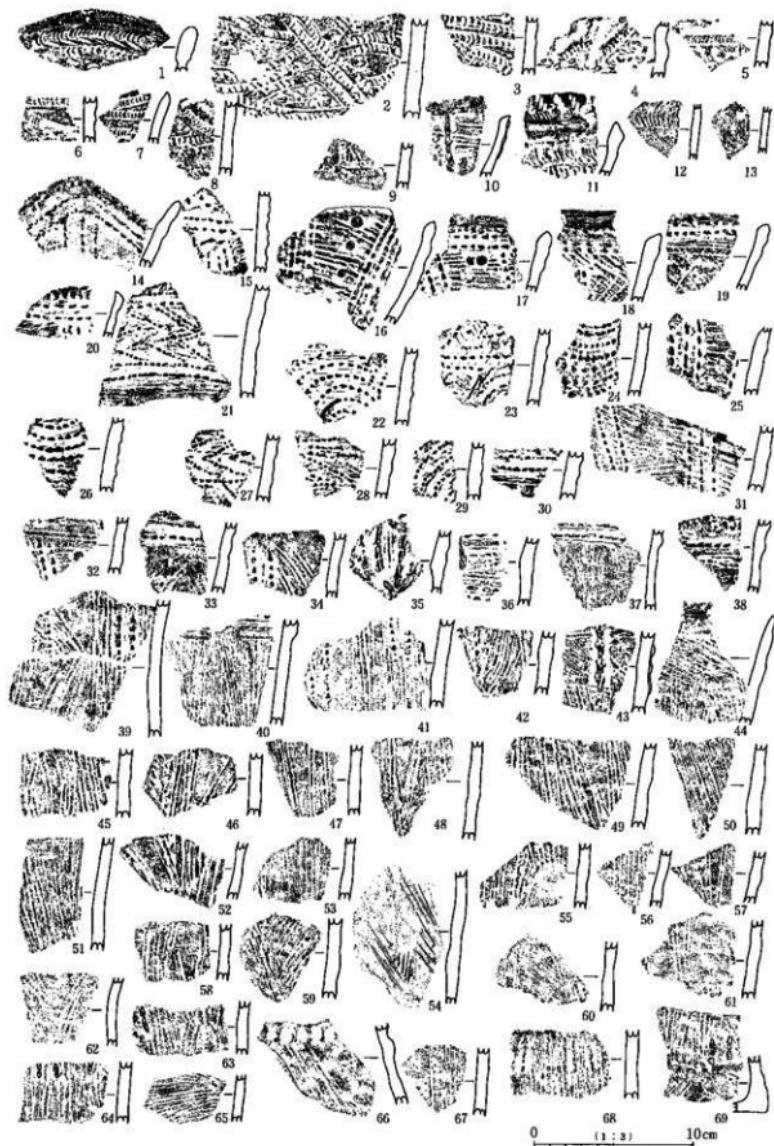
第8図 7・9・10号住居址出土石器



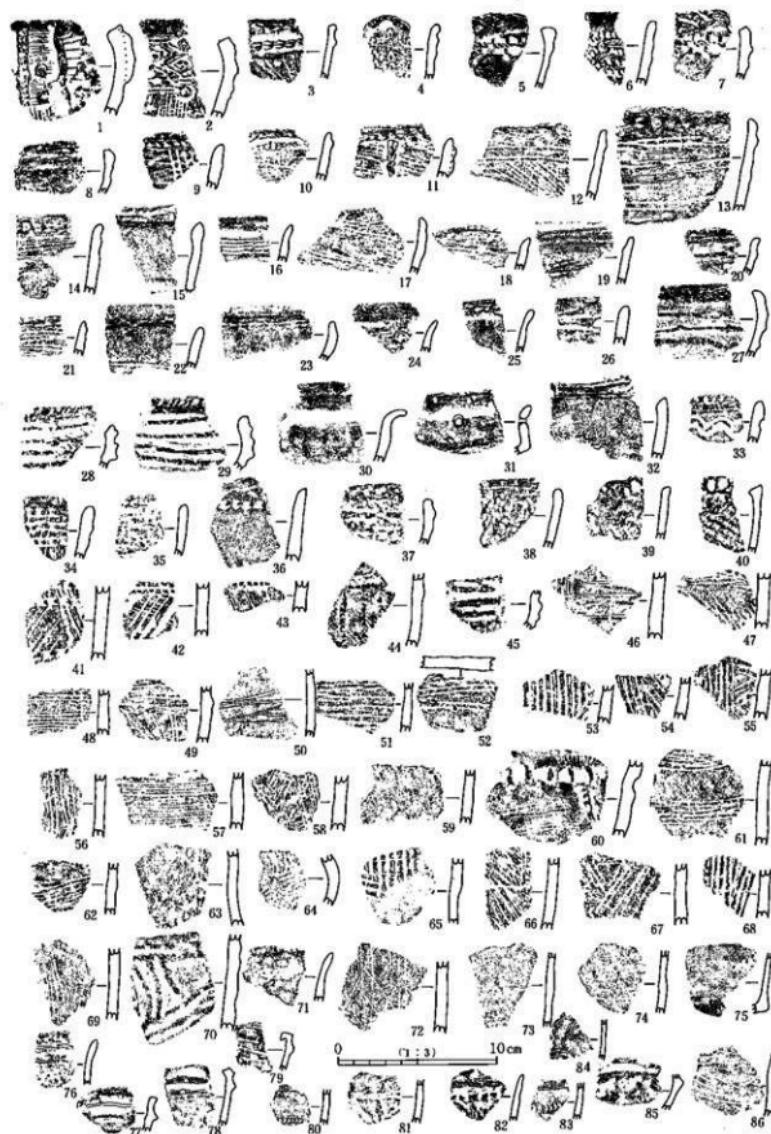
第9図 10・11・12・17号住居址



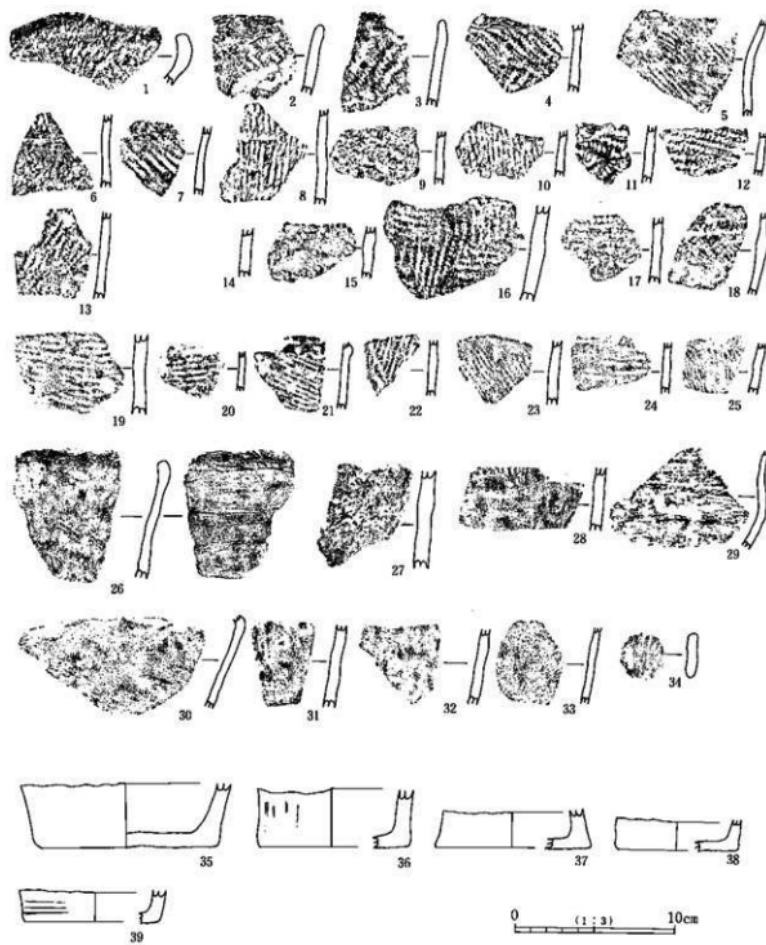
第10圖 8・10号住居址出土土器



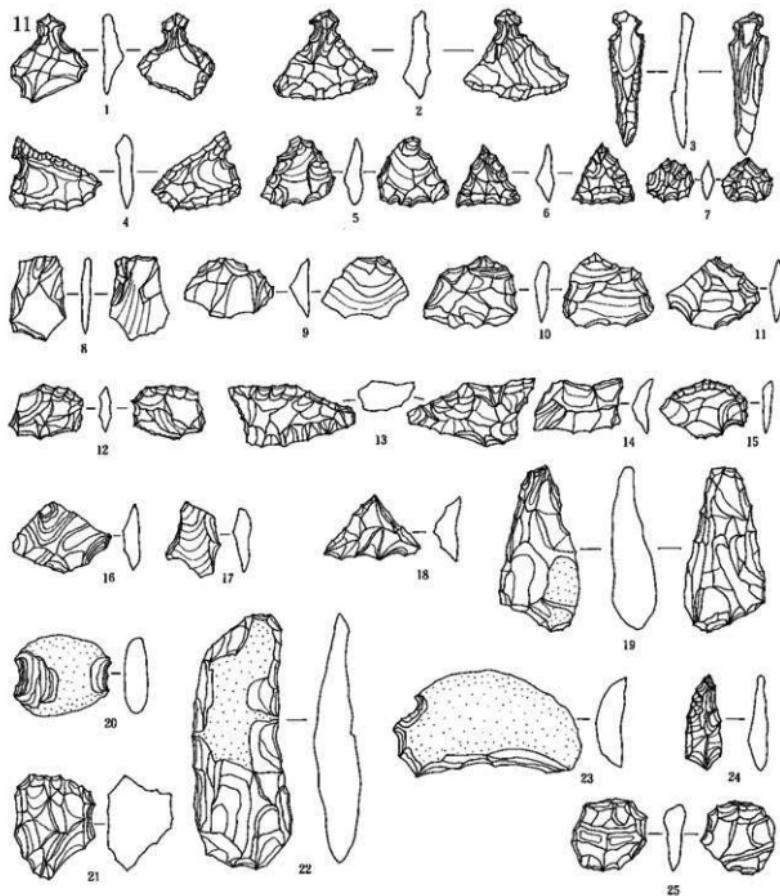
第11图 11号住居址出土土器(1)



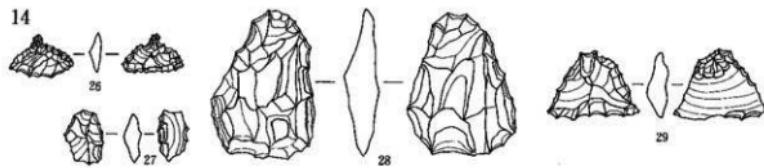
第12图 11号住居址出土土器(2)



第13図 11号住居址出土土器(3)

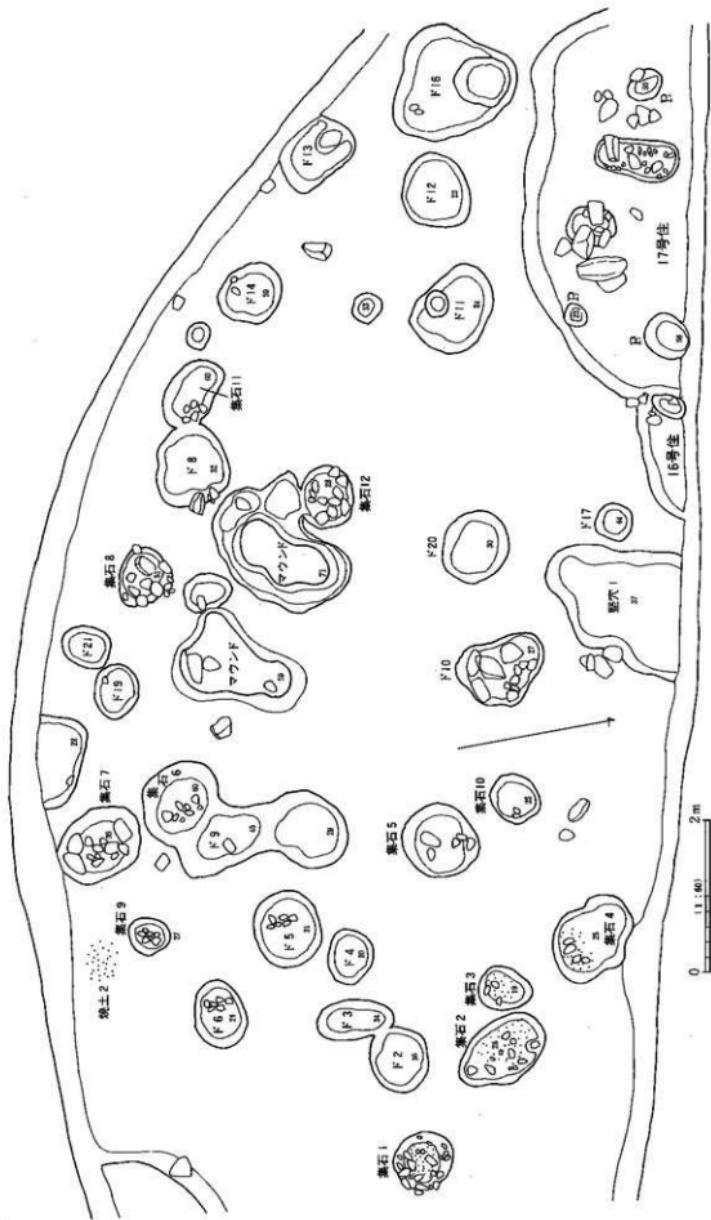


0 (1 : 2) 10cm



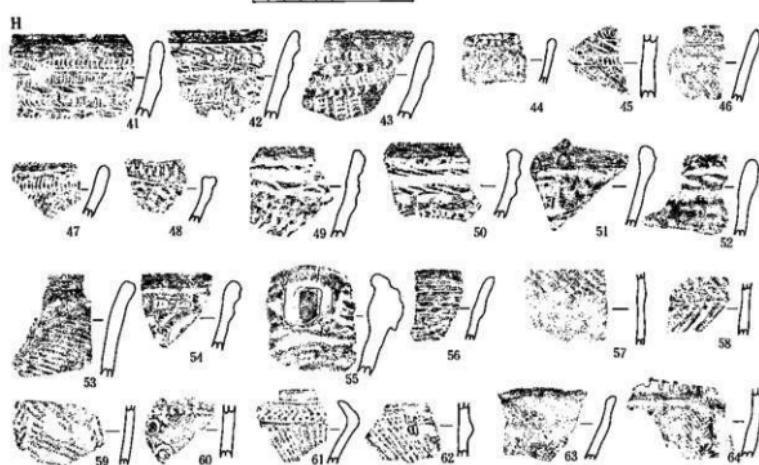
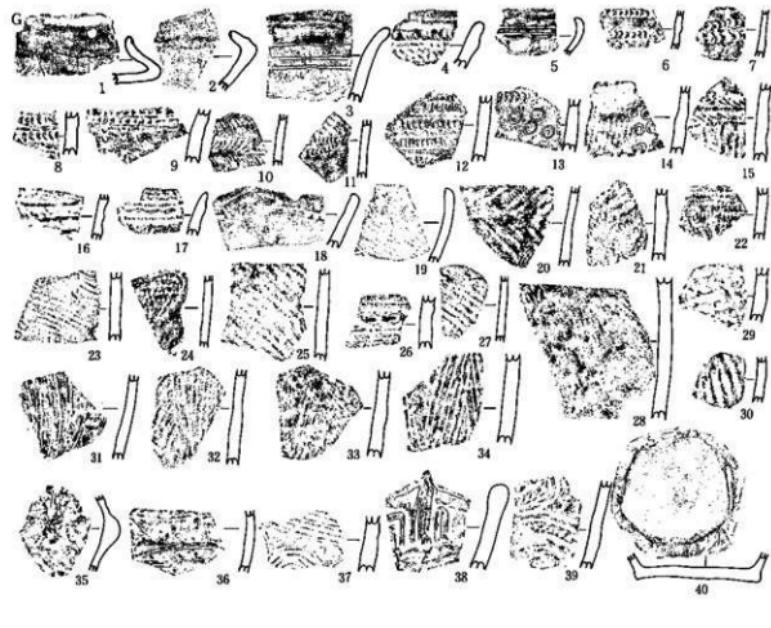
第14図 11・14号住居址出土石器

第15图 H地区遗骸全体图

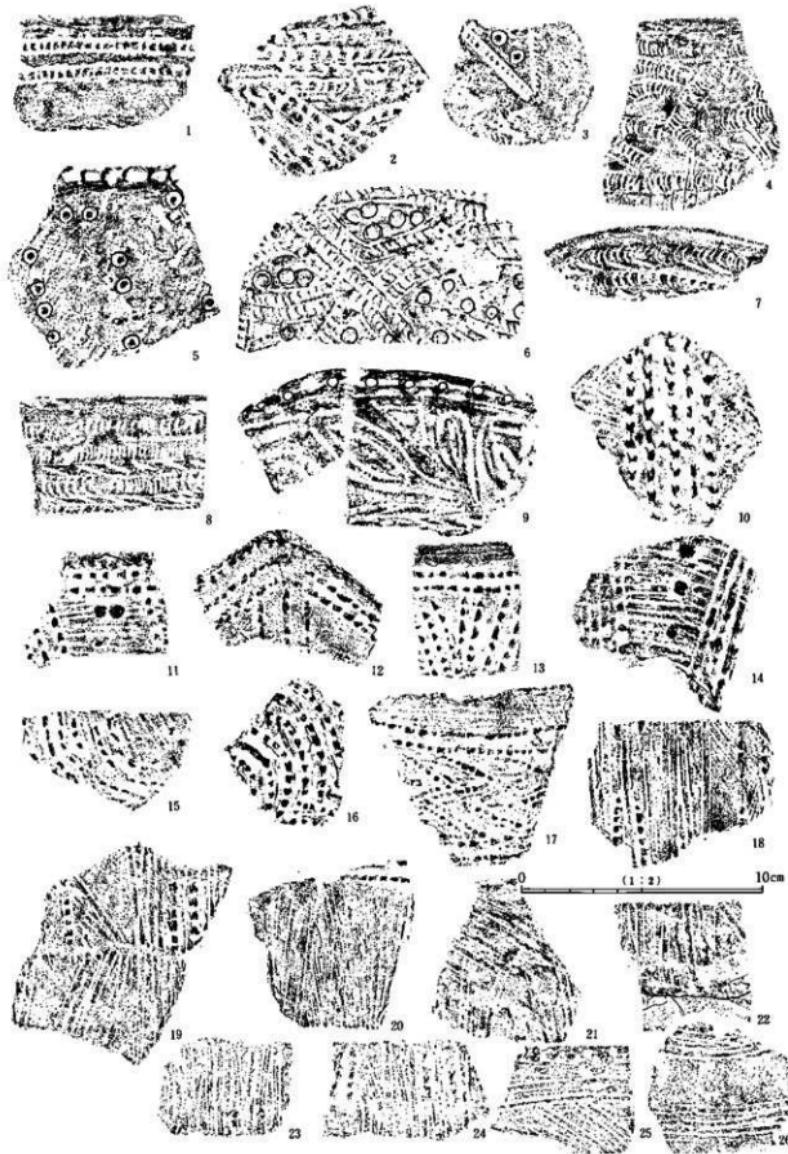




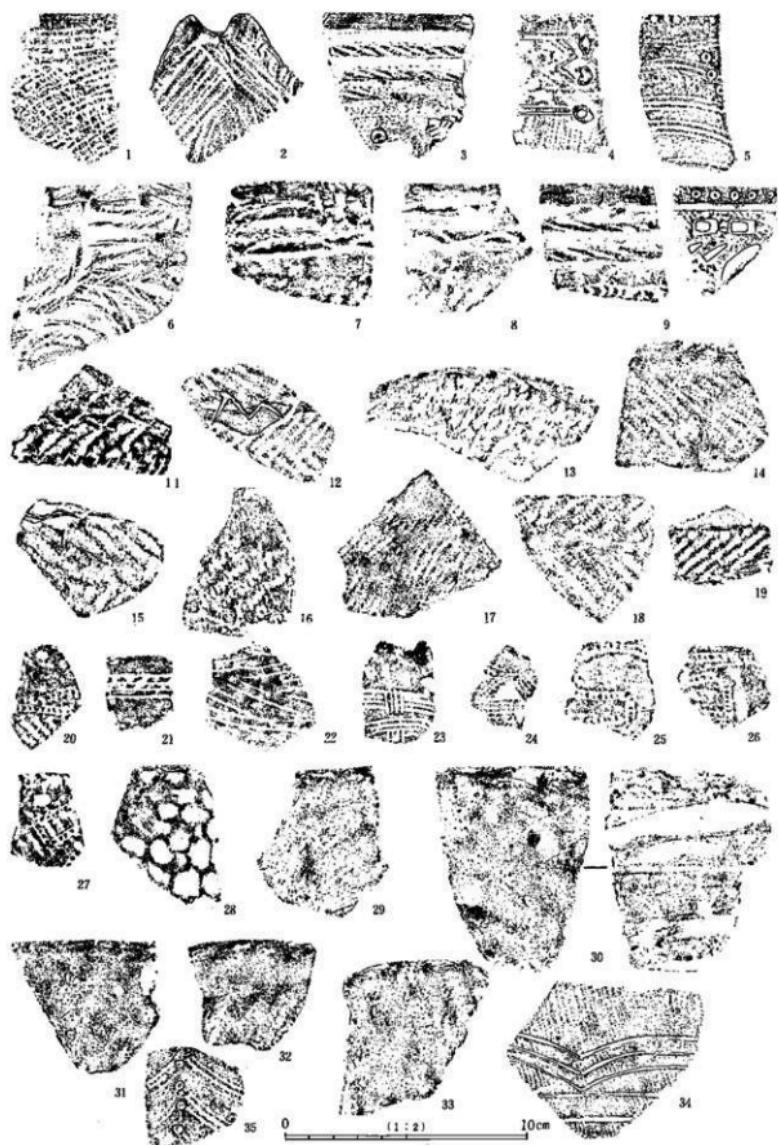
第16図 G・H地区土器・集石出土土器



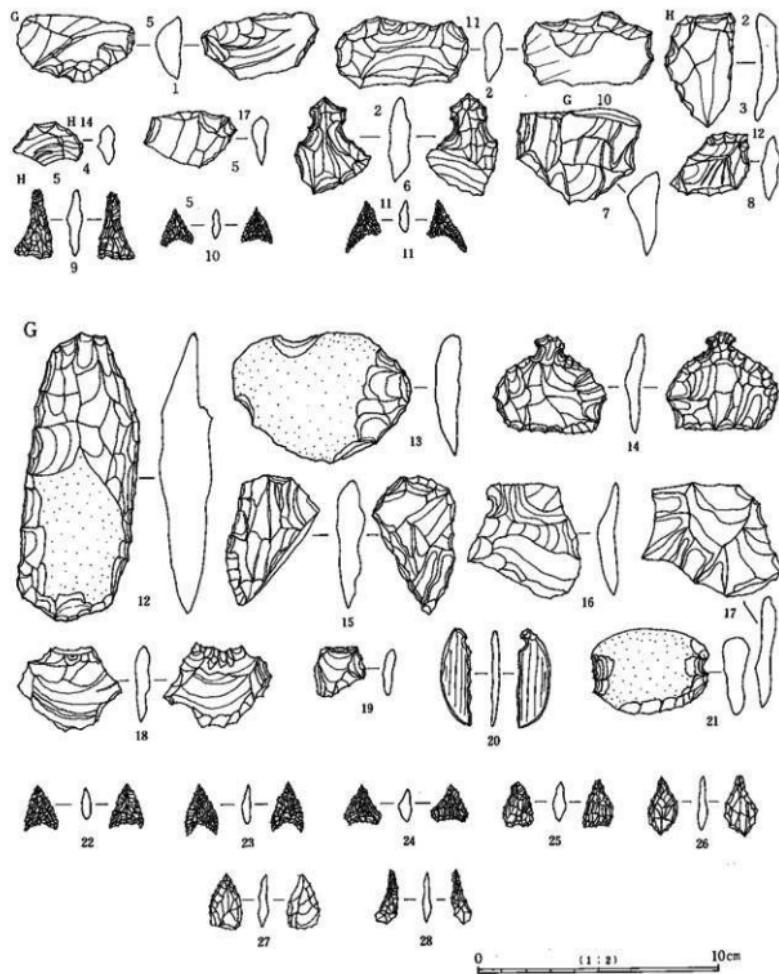
第17図 G・H地区グリット出土土器



第18図 G・H地区出土の縄文時代前期土器(1)



第19図 G・H地区出土の縄文時代前期土器(2)



第20図 G・H地区土壤・集石・グリット出土石器

交差する集合沈線で切り、口縁上部を押圧して凹ました文様の付く把手状の土器である。24は細かい繩文の付いた面を三角に印刻したもので、小片であるので文様構成は不詳であるが、この遺跡では珍しいもののひとつである。25～27は連続爪形文により区画構成されたタイプのもので、厚手のもの・薄手のものがある。28は押圧された丸い窪みが器面全体に並ぶ、29は無文に近い土器であるが、薄めの斜条線がかすかに見える。裏側には籠状器具で削られた平行沈線状の調整痕が残る口縁である。30は無文の土器口縁で、器面は凹凸が多い。裏側には籠状器具で削られた太い調整痕が残る。31～33は無文系の口縁であるが、32には磨消繩文が薄く残っている。34は集合条線を地文にして平行沈線・弧線を配したものであり、35は弧線の交点に竹管円文が付けられている。以上の特徴から、これらの土器片は繩文時代前期後葉のものが多く、関東系の諸職式に類似するものが多い。

7. 繩文時代中期の住居址

(1) 1号住居址 (第21・22・23・24・25・26図、写図9・10・11)

C地区下方東側で検出された竪穴である。長径3.8m・短径3.4mの梢円形で、掘り形は15cmほどである。竪穴全面に拳大から人頭大の石が広がり、その石の間から多くの土器片が出土している。石や土器を取り除くと竪穴状の落ち込みになったが、ピットや炉は検出されていない。

上層を検出している時は、長径5m・短径4mほどの範囲の集石遺構状のものが周辺を取り巻いていた。第36図の集石19・20・21・22・23・26と竪穴の集合のようであったが、検出の結果包含される集石・独立する集石遺構に分れた。

出土した遺物は第22・23・24・25図のように土器・石器の出土が多い。完形品は第22図1・2のみニチュア土器で、1は口径5.4・器高6.0・胴部最大幅12.3cm、2は口径6.6・8.4・底部径5.8cmの小形土器である。3・6・7は器台形土器で、この他にも3個体分が出土している。9～23は土器底部で器形からみて15個体以上出土している。第23・24は土器片で中には復元出来なかったが大形なものも含まれている。32～38は土製円板である。器形・文様からみると繩文時代中期後葉の土器が多く、中には後期のものもある。石器は総体的には少ないが、乳棒石・磨製石斧・鍤石もある。第26図の石器は珪岩・貝岩製の不整形の剥片石器であるが、他の住居址のものと比べると、未製品が多いように思われる。この竪穴は住居址と扱っているが、形態的には住居の様であるが、炉もなく柱穴も検出されていない。結果的には円形状の竪穴になったものの、周辺の状況から集石遺構の集合かもしれない。このことは集石遺構の所でも触れるが、15個体以上の土器集中地がありながら中心的な炉が検出されないのは不自然であり、焼土を伴う集石遺構が集中しているので、焼土と集石遺構で構成される遺構群のひとつとするのが妥当かと思われる。

(2) 3号住居址

B地区下方で石囲い炉だけが検出された。3この石がコの字形に配され、南側の石はずされている。石囲いの幅は50cmほどある。伴出する遺物ははっきりしないが、繩文時代中期のものかと思われるが、周辺から繩文時代晩期の土器片が出土していること、竪穴の掘り込みが検出されないことから

あるいは晚期かもしれない。

(3) 4号住居址(第3・26・27・29図)

A地区東南上方で検出された竪穴式住居址である。長径3.65・短径3.1mの楕円形の竪穴で、掘り形は南側で20cmである。床面は難弱であったが、炭混じりの黒・茶褐色土により床面の識別はできた。竪穴内にP1・P2・P3・P4と土壙7のピットを含めると5個検出され、それぞれ28・21・24・28cmを測り、西側壁外に2個のピットがある。これは10cmほどの浅いものである。住居内南側と北側に4～6個の集石があったが、北側集石内に焼土が検出されているので、炉の名残りかと思われる。これが炉であるならば主軸はN10°Wと思われる。

第29図1～14が出土土器で、縄文時代中期後葉のもので、1号住居址の土器とよく似ている。石器の出土は少なく、第25図7は珪岩製の不整形なものである。

(4) 5号住居址(第26・28・29図、写図13・14)

A地区西側で検出された竪穴式住居址で、長径4.3m・短径4.2mのほぼ円形の住居址で、掘り形は南側上方で55cmを測るが、北側では集石遺構が重複していることと、地形傾斜もあって20cmほどである。壁の傾斜は緩やかで、竪穴内の長さは3.4mに縮まっている。南側斜面はとくに緩やかで、中段に石列状に10個ほどの大石が並ぶ。用途は不詳であるが、土留めのためかあるいは祭壇状のものかもしれない。床面は比較的平坦で、小石混じりの良好な床面が検出されている。ピットはP1・P2・P3と3個が検出され、深さはそれぞれ28・30・35cmあり、P1・P2は口径・深さ・覆土とも標準的な穴が検出されている。もう1個あるかと思い検出を試みたが、発見することはできなかった。炉は中央や西北に偏って構築された石囲い炉で、西側には一枚石、他の三方は2～3個の角石で囲まれ、縦に埋め込まれている。南北80・東西75cmを測る整った炉で、やく10cmほどの焼土が検出されている。北側壁沿いに10数個の石による集石遺構が検出されているが、住居の床面から20cmほど高い位置にあり、時期差が考えられる。確認を得る遺物は発見されないが、數片の土器片の中に後期と思われるものが発見され、B・C地区の集石遺構群の時期比定にひとつの示唆が与えられる。これに似た状態のものは、4号住居址の東側と北側で検出された土壙1・7にも似たような集石があり、土壙17にも集石があった。

出土した土器の中には完形・半完形のものは発見されないが、第29図15～53は殆どが縄文中期後葉の土器片で、中には後期的な土器もみられる。石器は第25図8～15、第26図1～11である。第25図8～14は硬砂岩製打製石器・横刃型石器で、15は珪岩製の石器である。第26図1～9は珪岩・貝岩製のスクレーパー～・剥離石器で、10は赤色珪岩製のスクレーパー、11は黒曜石製の石鎌である。

(5) 6号住居址(第28・30・31図、写図15)

C地区下方西側で検出された竪穴状遺構である。南北5.75・東西5.95mの変形した円形状のプランで、掘り形は南側で45cmあるが、北側では地形傾斜のために15cm程度である。床面は小石混じりで凹凸が多く、柱穴らしいものは発見されない。いくらか炭や焼土はあったが、炉らしいところも確認されていない。石の多い覆土であることと、竪穴状の形態であることは1号住居址とよく似ている。集石遺構の石はなかったが、周辺には集石遺構4・5・32や焼土21・22・24が取り巻くことも1号住居址に似ている。また、北側に登録はしていないが、集石遺構の石群が検出され、土器片の出土が多かったので、1号住居址と同じように焼土群・集石遺構群の構成に入るものかとも思われる。

出土土器は完形・半完形品は発見されないが、土器片は相当量出土している。第30・31図の土器は縄文時代中期後葉のものが大部分で、中には後期的なものも含まれている。石器は第25図16~30と、第26図12~20のものである。第26図の12~17は珪岩・貝岩製の整形の整った石器で、18は黒曜石製の磨製石鎌、20は硬砂岩製の錐石である。

(6) 8号住居址(第5・10・46図、写図16・18)

G地区上方7号住居址の西北側に重複して検出された竪穴式住居址である。東側の一部が道路下にかかるためにプランが全部検出されていないが、南北やく4.3mほどの大きさである。壁の掘り形は南東側では傾斜がきつく、7号住居址の床面までの壁高25cmほどあるが、西側では5cmくらいしか残されていない。床面は比較的堅く平坦に構築されているが、地形傾斜に沿って東壁際と西壁際では20cmほどの高低差がある。ピットはP1・P2・P3・P4・P5が検出され、深さはそれぞれ57・26・55・48・28cmを測り、位置・形態・深さからP3・P4が主柱穴のように思われる。炉は中央やや東南側に偏って構築された方形の石囲い炉で、南側に副炉が付いている。主炉は長径80・短径60cmほどの大きさで、3個の角石によるコの字形の炉石が残されているが、西側に2個の炉石らしい石が転がっていたので、北西側にも2個の石が並べられていたと思われる。南東側奥の石は長さ60cm・幅12cm・深さ50cmの大きな1枚石である。炉の深さも28cmほどあり、炉底までしっかり焼けている。副炉は南側角に構築され、長さ14cm・幅10cmで3つの石で方形に囲まれている。主軸方向はN30°Wである。

縄文時代中期でありながら、出土した遺物は少ない。第10図1~29は出土した土器片で1~14は縄文時代前期の土器片、15~29は中期の土器片で、中期後葉のものである。27・29は土製円板である。第46図1~18は石器である。1は珪岩製・2は蛋白石製のもの、3は磨製石斧の頭部、5は黒曜石製の石鎌、6は蛋白石製の石錐状石器、7~11は黒曜石製のスクレーパー状のものである。12・13・19は硬砂岩製の打石斧・錐石で、14~17は蛋白石製・珪岩製のスクレーパーで土器片に比べていろいろな石器が出土している。

(7) 12号住居址 (第4・9・32・46図、写図20)

G地区ほぼ中央南側で10号住居址と重複して検出された竪穴式住居址である。時期的には10号住居址を切る形のものであるが、検出結果は床面・壁等で区別することは困難であった。しかも住居址の南側半分が用地外にあるために検出されていない。壁の掘り形は傾斜が強い住居址で、西側用地境では壁高は25cmを測る。床面は比較的堅く、炭混じりの覆土があったので検出がしやすく平坦な床が検出されている。柱穴らしいピットはP8・P9・P10の3個が検出され、32・40・37cmを測るが、1個を除いて10号住居址か12号住居址のものはっきりしない。南側壁際に四方を石で固む石囲い炉が検出されている。長径95cm・短径80cm、深さ28cmの整った石囲い炉である。中には炭・焼土が充満し、炉底もしっかりと焼けている。

出土した遺物は少なく第32図1～11は出土土器片で、3～11は縄文時代中期後葉のものである。第46図20～23は石器で、20は緑色片岩製の半磨製石斧、22は硬砂岩製の鎌石、21は貝石製のものである。

(8) 13・15号住居址 (第5・32・46図)

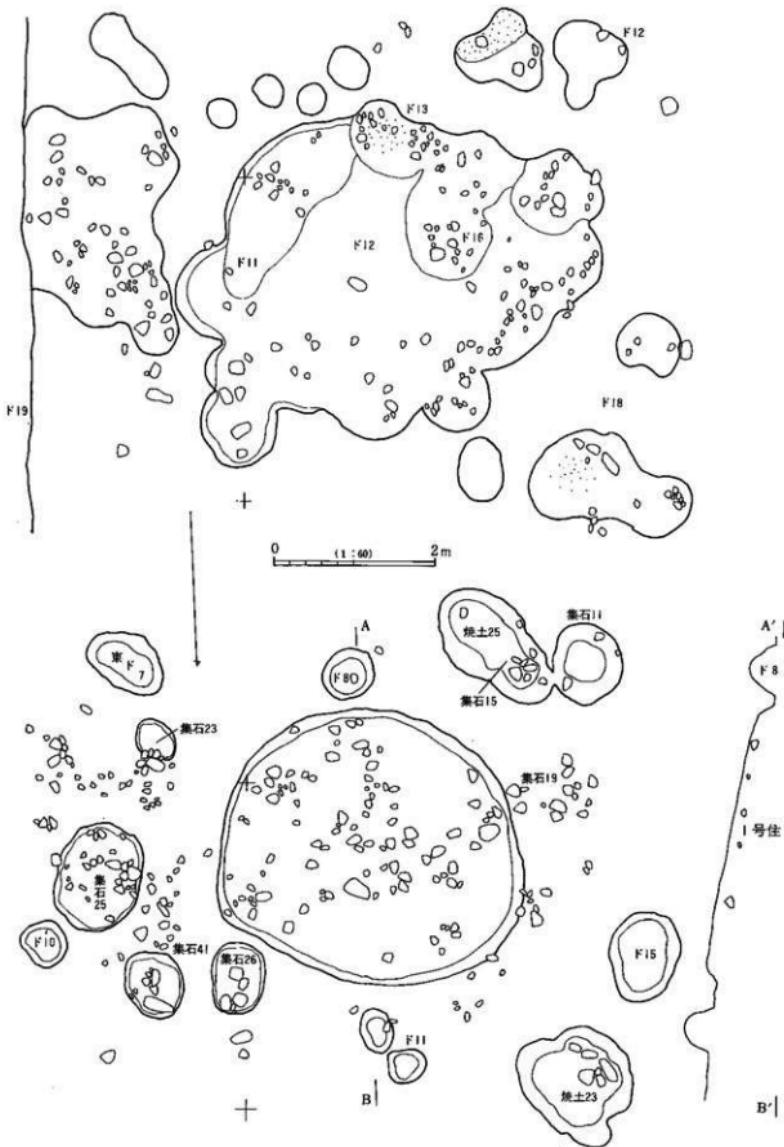
G地区東側道路脇に一部ずつ検出された住居址で、13号住居址は8号住居址と重複し、15号住居址は7・14号住居址と重複している。13号住居址の土器は第32図13・14で、石器は46図23は硬砂岩製の打石斧である。

(9) 16・17号住居址 (第9・33・34図、写図21・23)

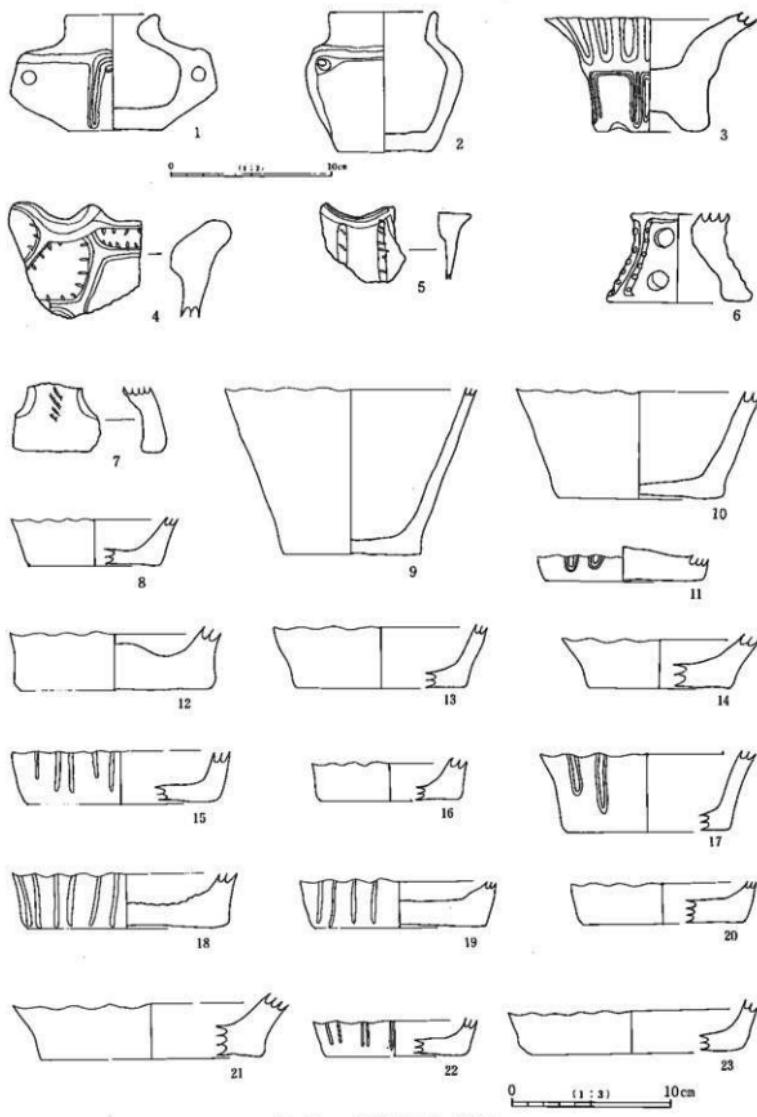
H地区北側用地境で一部検出された住居址で、16号住居址を17号住居が切っている。17号住居址は3分の2ほどが用地外にあるためにプランははっきりしないが、東西5.5mほどの不整形な方形状の竪穴住居で、掘り形は緩やかで、壁高は40cmほどある。床面は平坦で堅く締まっている。長棒状・平石が多く検出され、この石の下に土器が漬れ込んでいた所もある。この中に第33図1の香炉形土器も含まれていた。ピットはP1・P2・P3・P4が検出され、60・51・36・39cmあって、主柱穴と思われる。P3の上面には長棒状の石が集石状に固まっていた。

第33図1はやや小振りの香炉形土器で、器部口径27cm・高さ10cm・底径20.5cm・幅7cmほどの釣り手が付く。釣り手の半分が欠損しているので、定かではないが頂部に何らかの付物があったと思われる。器部は梢円形を呈し口辺を二条の沈線で巻き、正面だけは沈線が継ぎ下ろされる。釣り手は上部両側を隆帯状に盛り上げて、三条の窪みが作り出されている。隆帯と窪みには刺突文と沈線の区画文で施文されている。

第33図3～20は一個体の土器で、香炉形土器と共に土器集中地からの出土である。粘土紐貼り付け・磨消繩文を地文にして太目の平行沈線・弧文で構成されている。口辺はキャリバー形で薄手の土器である。縄文時代中期末葉か後期の土器群と思われる。第34図1～36は、縄文時代前期の土器片も含まれるが、磨消繩文と沈線で構成される縄文時代後期の土器も含まれている。36は土製円板である。石器の出土は少なく、第34図37・38は貝岩製のもの、39は黒曜石製の石鎌である。



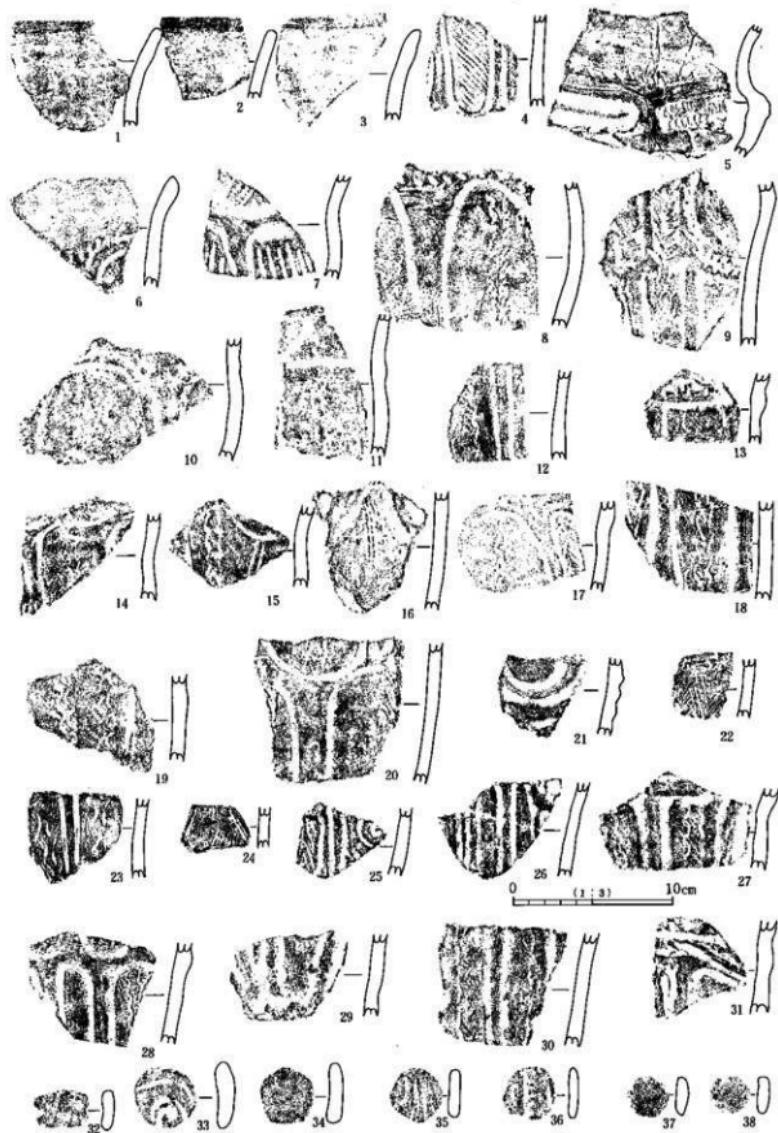
第21図 1号住居址



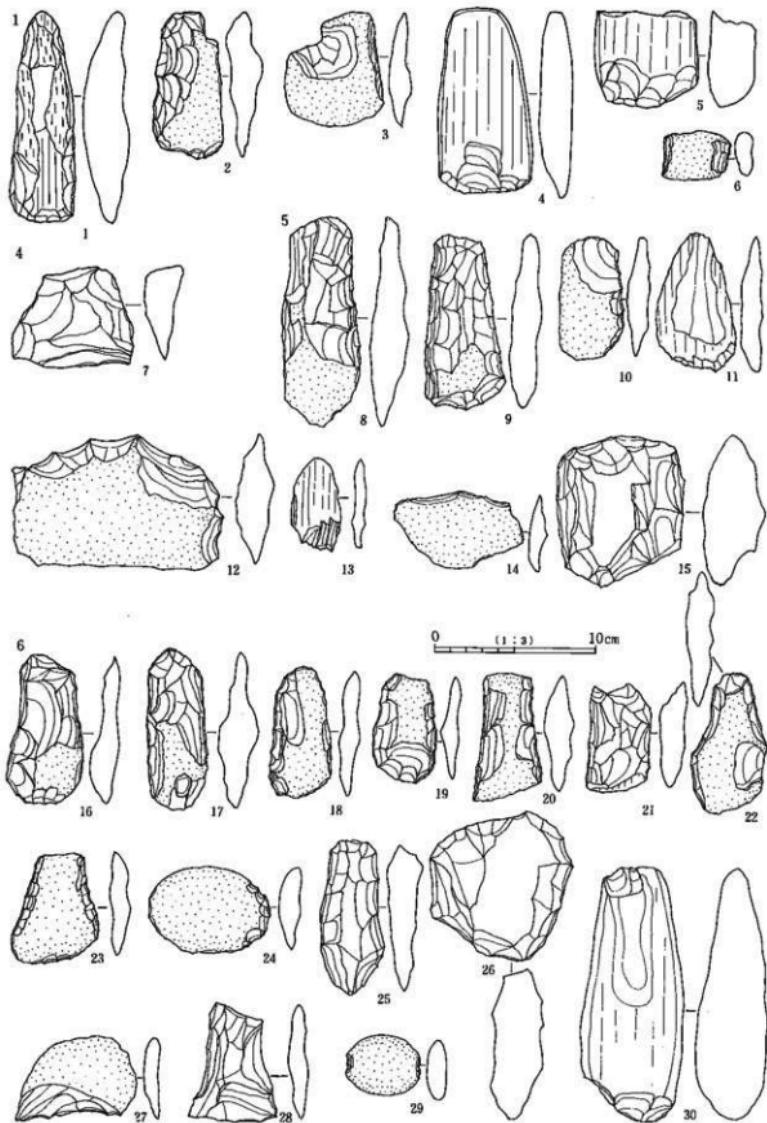
第22図 1号住居址出土土器(1)



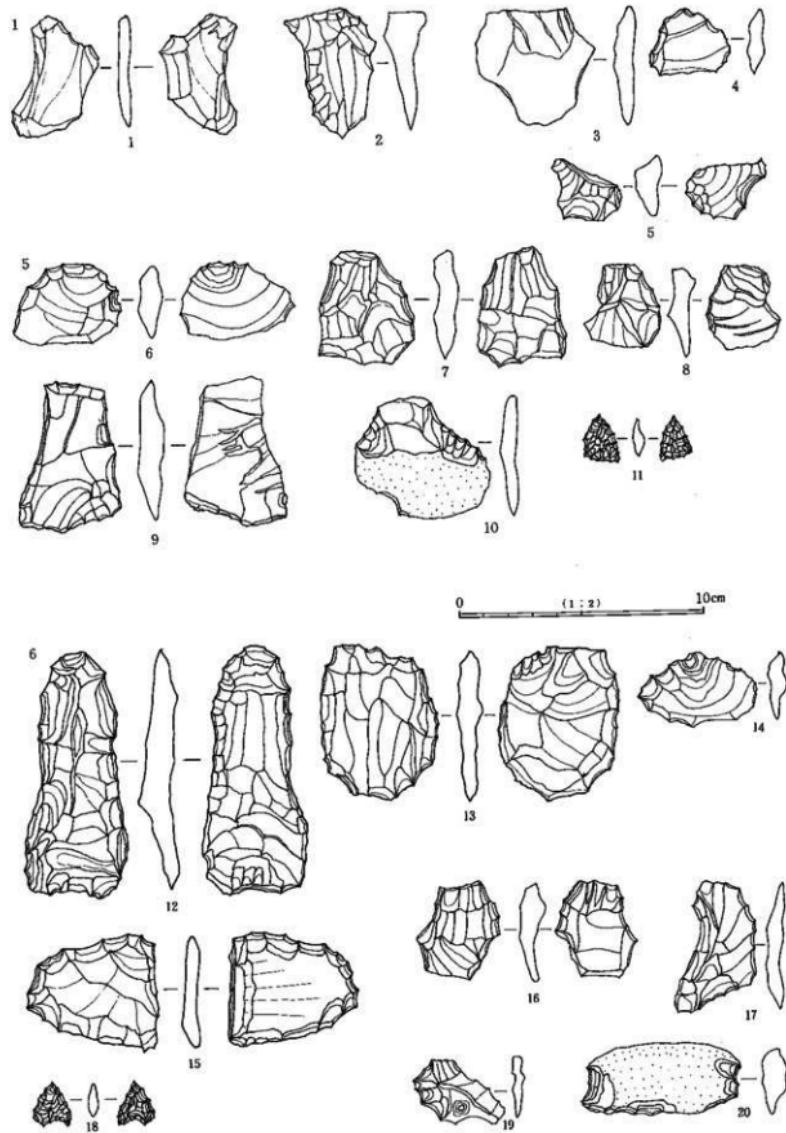
第23図 1号住居址出土土器(2)



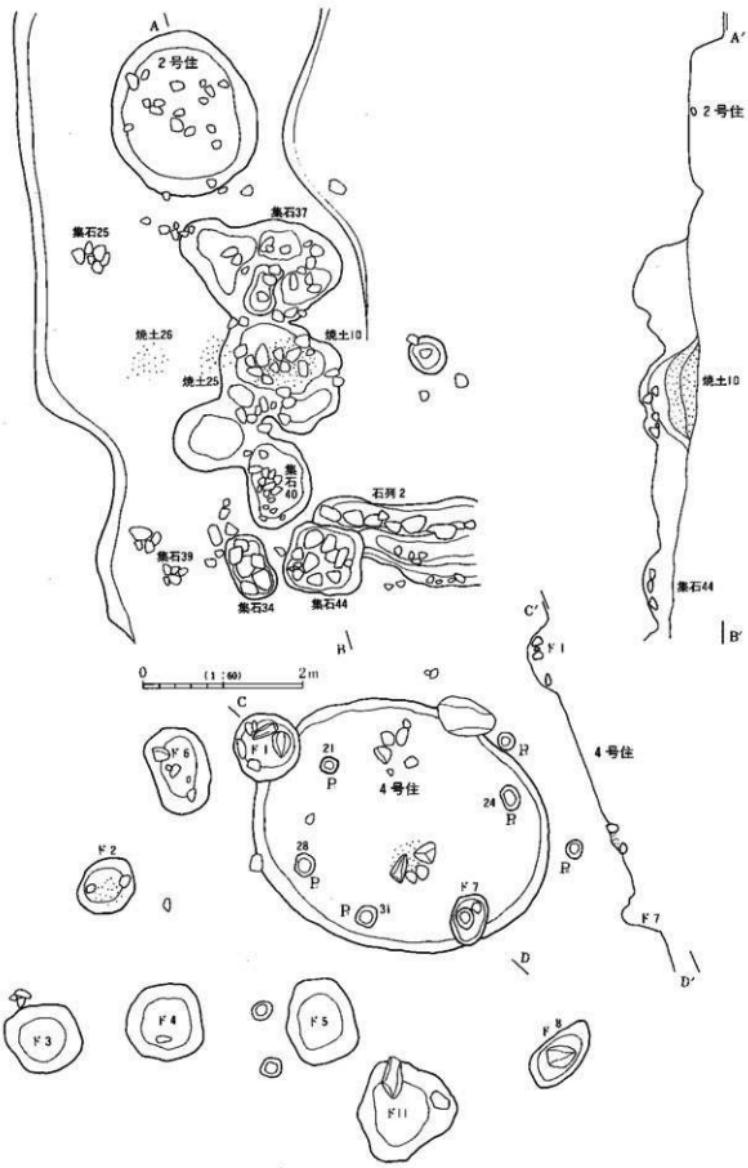
第24図 1号住居址出土土器(3)



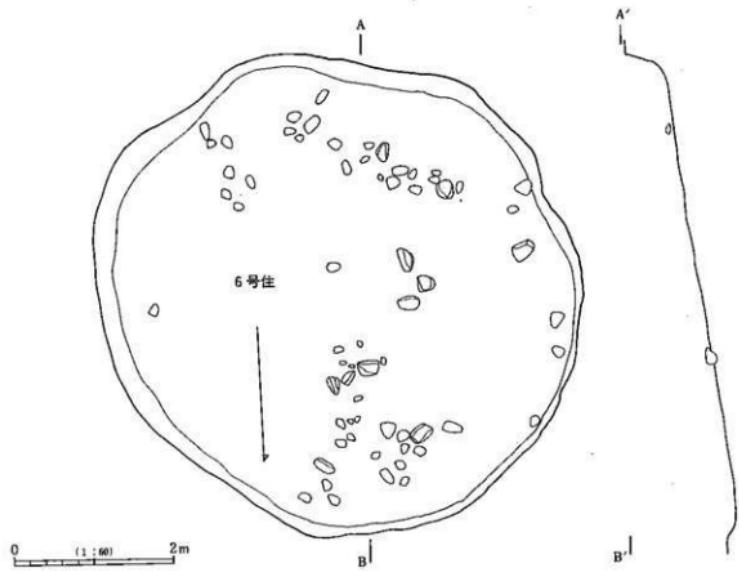
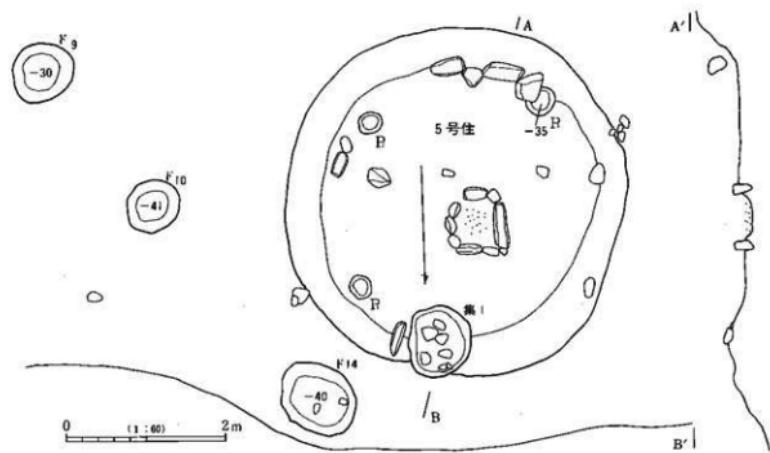
第25図 1・3・4・5・6号居址出土石器(1)



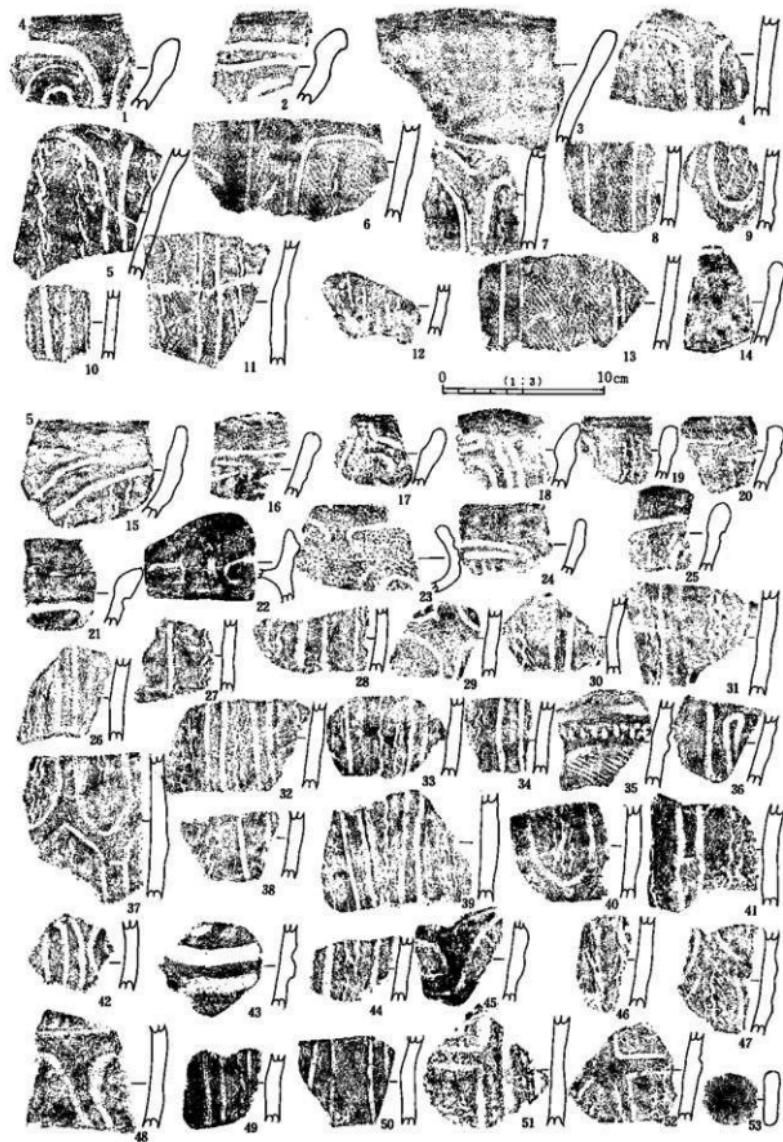
第26図 1・4・5・6号住居址出土石器(2)



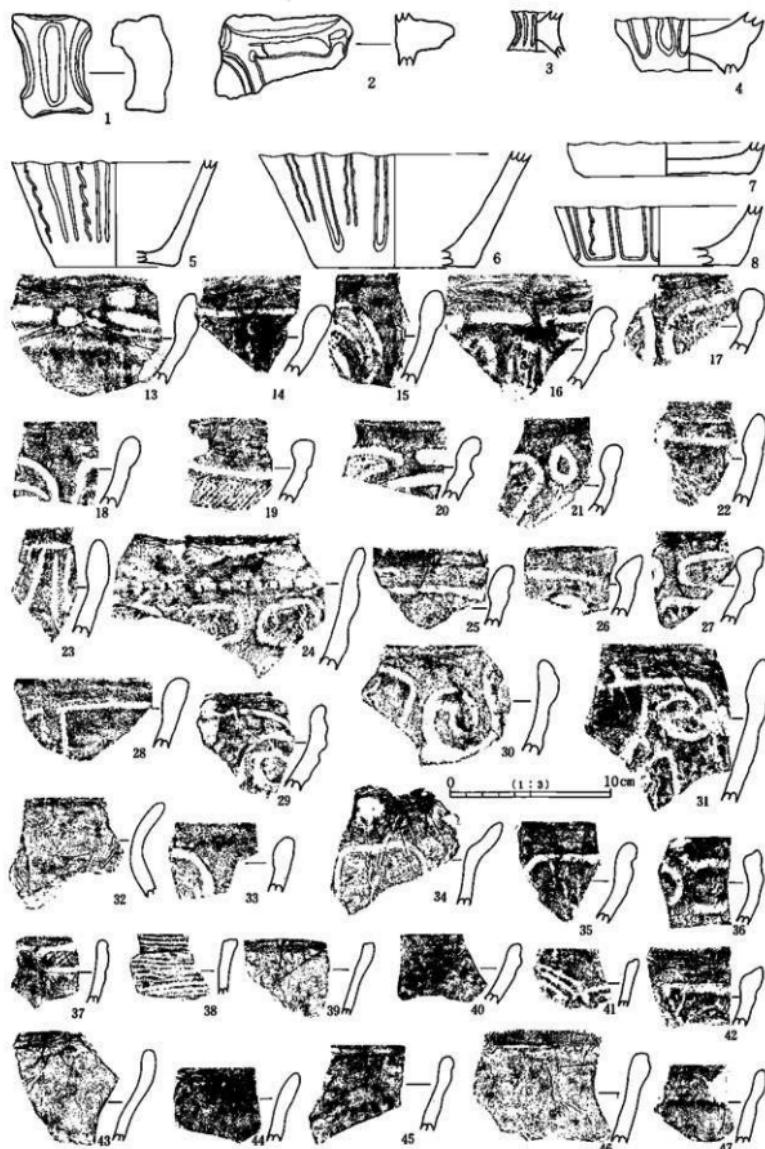
第27図 2・4号住居址



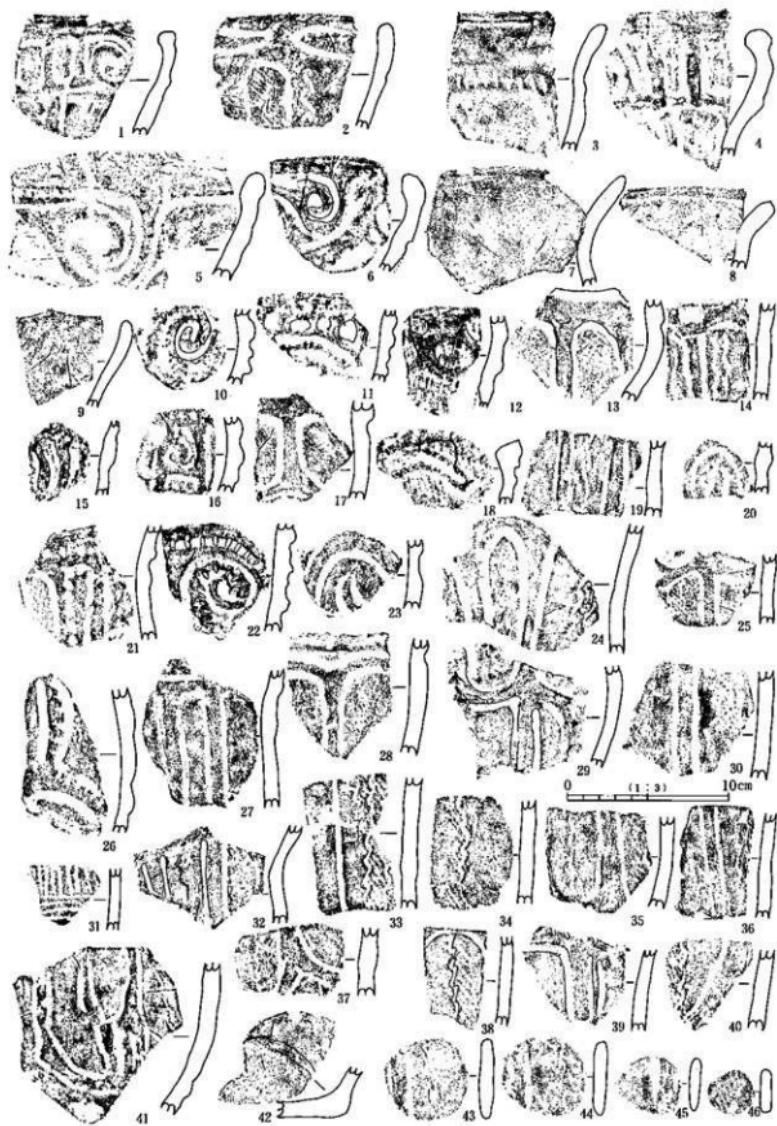
第28図 5・6号住居址



第29図 4・5号住居址出土土器



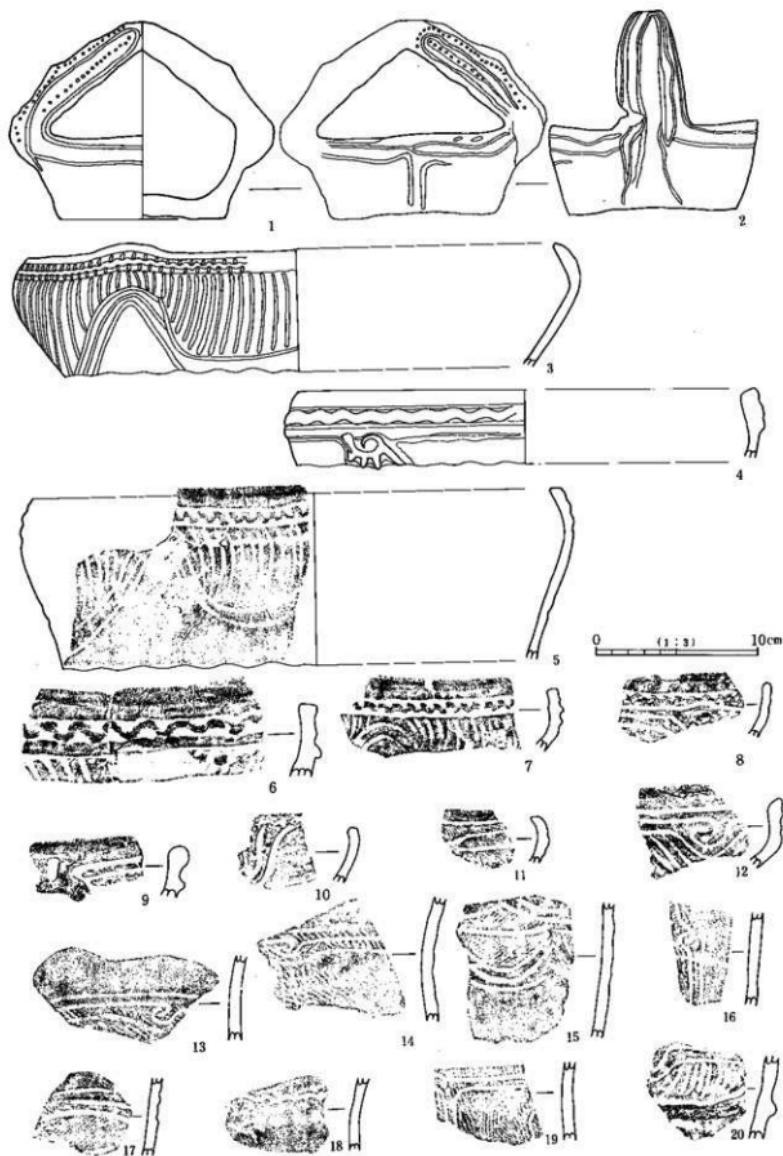
第30图 6号住居址出土土器(1)



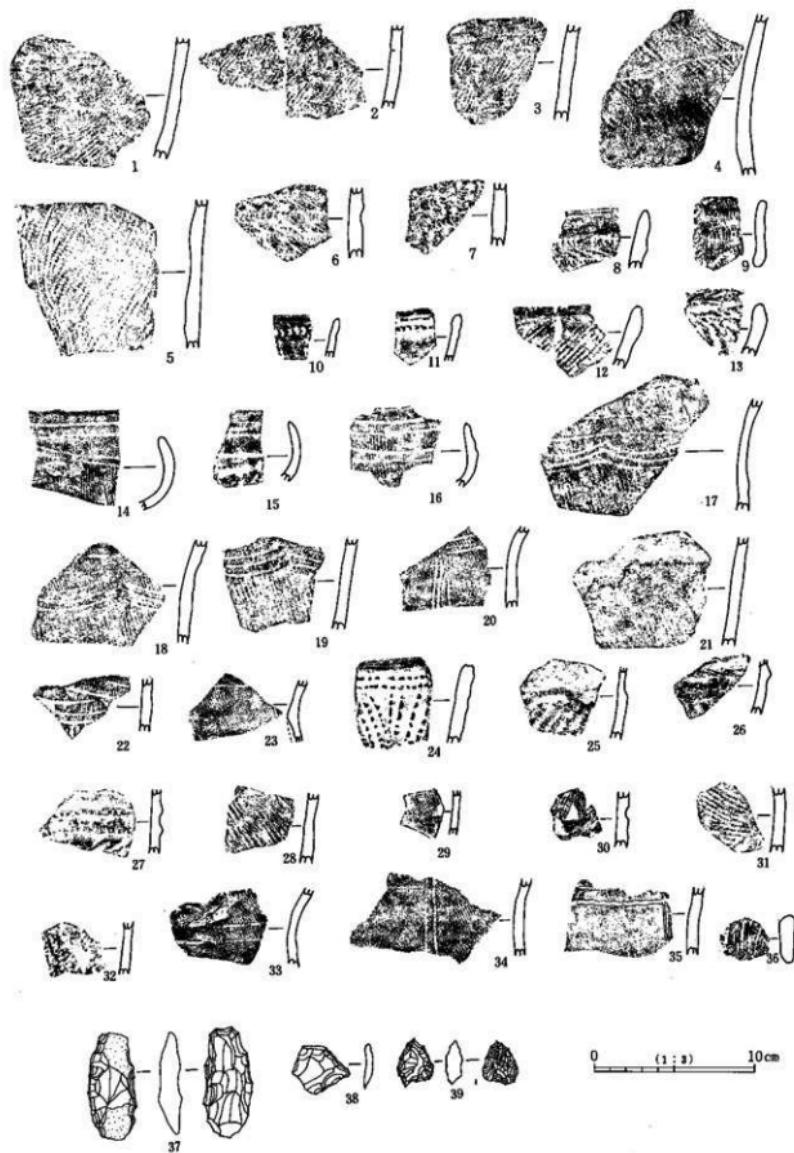
第31図 6号住居址出土土器(2)



第32図 12・13・14号住居址出土土器



第33図 17号住居址出土土器(1)



第34図 17号住居址出土土器(2)・石器

表3 横吹遺跡土墳・集石・焼土等出土遺物一覧

土墳 No 1

地区 NO	前期	中期	後期	晚期	器台	ほか	円板	石鏡	石匙	打石	鞋石	剥石	横刃	鍬石	丸石	黒石	備 考
A F 1		3								1					1		焼土・炭
2		5													1		焼土・炭
3		3															
4		1												1			
5		4								1							
6		3											1				
7		9									1						
8		2															
9		3										1					
10		1															
11		4															
12		3															
13		2															
14		6															
B F	15	11															
16		6															
C 西 1		10	3								1						
2	2	13									1						
3	1		1														
4		6	5	1									1				
5		2															
6		1	1														
7		1	2														
8	2	1									1						
9	1	2															
10		3															
11		2	1														
12		5															
13		4															
14		10						1個体									
C 東 1		11	2														
2		6	12			2	甕	1個体			1					焼土 7 の下 北に集石12	
3		6												1			
4		5	8														
5		6														集石14隣接	
6		大26										1				東側土壤群	
7		8														"	
8		18	1													1住南	
9		13	7								1					焼土 7 下・炭	
10		8	7														
11		6															
12		8															

根吹遺跡土壙・集石・焼土等出土遺物一覧

土壙 №2

地区 NO	前期	中期	後期	晩期	臺	ほか	円板		石礫	石逃	打石	鍛石	剝石	横刃	鍔石	丸石	黒石	備 考
	C 東	13			2													
	14		3	10														
	15			8														
	16			6														土器棺墓の下
D F	1				6						1					3		堅穴状
	2		4	3						1								
	3		5	4														焼土あり
	4		2	2														
	5			3														
	6		2	4														
	7			5														
	8		6	3														
	9		2	10														
G	1	20	5												1	1		
	2	15													1	1		
	3	7																
	4	2	3															
	5	14	15					1個体	1	1	1	2			3			
	6		16															
	7	2	5															
	8	8									1							
	9		4															
	10	13	4								1				2			
	11	20							1	1	1				2			
	12	6									1							
	13	2	4															
	14	6								1					1			
	15		5															
	16	3	3												1			
H F	1	3																
	2	5																
	3	6																
	4	14																
	5	35																
	6	4	1															
	7	2	2															
	8	4																
	9	6	2															
	10	8	4															
	11	3	1															
	12	3	2															

横吹遺跡土壙・集石・焼土等出土遺物一覧

土壙 No.3 焼土 1

地区 NO	前期	中期	後期	晩期	器台	ほか 円版		石旗	石匙	打石	簇石	鍛石	横刃	錐石	丸石	黒石	備考
H F 13	7													1		1	
14	3																
15	5	4															
16	10	5							1								
17	13	4								1	1				4		
18	8	3									1						
19	6	2															
20	20	5															
焼土構造																	
C 1	1																焼土だけ
● 2	2	6															石列上層
● 3	2	11															石列上層
● 4 下層	大43 5	18													2		下層に集石18
5	7										2						磨石
● 6 下層	22 3	11 5												1	2		集石 6 に隣接 下層に集石45
● 7 下層	14 7	4 8									1			1			東 F 2 • 集石 12と重複
8	6	8															
9	5	2															
● 10 下層	59 10	57 10									2		1	4			石組重複・後 期が主体
11	21																
12	3	7															
● 13	20	6												1			集石 4 に重複
14	13	3													1		
15	16																集石15に隣接
● 17-1	34	1													2		下層に集石17
17-2	15	1	1						1								17-1の北下層
18	10	10									1						
19	3	2															
20	30																
21	5																6号住の西
22	13										1						
● 23	8	1									1						集石27と重複
24	古9	2	1								1						
25	7	2															集石15に隣接
26	25																
27	3																
D 焼土																	
G 1	4	2												1			
H 1	3	1															
2	13										1						

根吹遺跡土壤・集石・焼土等出土遺物一覧

集石 №4

地区 NO	前期	中期	後期	後周	器台	ほか	円板		石礫	石塊	打石	硅石	剝石	横刃	鍔石	丸石	黒石	備考
A 1		10									2							
C 石列 1	16	5								1			3	4			磨石	石棒2・擦石 1・配石
2	8	6										2		1				
C 集石 1	1	2	3								1							
2	4	8																石列中央上層
3	2	6																石列上層
4	3											1						大石の並び
5	10	3					1									磨石		
6	2	1																焼土25と隣接
7	7	11																
8	4																	焼土15と隣接
9	13	17																
10	8	2												1				
11	21	多	把手															集石15と隣接
● 12	3						1個体											焼土7と下層
13	14																	
14	14								1	1								
15	8					1												集石11・焼土 25と隣接
16	4																	小石の集合
● 17-1	23					1			1	1					1			焼土17-1 下
17-2	16	3																
● 18	30	10								1					2			焼土4の下層
△ 19	19							1										1号住の中
△ 20	30																	〃
△ 21	大45					1個体												〃
△ 22	11								2	2								〃
△ 23	大25																	1号住隣接
△ 24	30		1															〃
△ 25	4									1			1					〃
△ 26	5																	1号住北東
● 27	6																	焼土23と重複
28	5																	
29	3																	
30	7	4																焼土17の西
31	2	1																
32	3	1				1												
33	7												1		磨石			
34	19	13						後1個体										石列2の東
35	2	4																
36	1	6																集石37に隣接
37	2	27																集石36に隣接

根吹遺跡土壙・集石・焼土等出土遺物一覧

集石 №5

地区 NO	前期	中期	後期	晚期	器台	はか	円板		石錐	石匙	打石	磨石	剥石	横刃	鍛石	丸石	墨石	備 考
C集石38		6			1													門石 東側、器台
39		2																東南はずれ
40		8	4															焼土10に隣接
41		2	4															東北はずれ
42		4																西はずれ
43		3	2															焼土14と隣接 東下2南1個体
44		10	6															
● 45		3	4													2		焼土 6 の下層
G集石1	55									1			1				2	11号住に近い
	2	42															9	11号住に隣接
H集石炉	4																1	炭・集石50以上
● 1																		
● 2	10																1	炭・石20
● 3	6																	炭・石7
● 4	10																	炭・石15
● 5	40	5																炭・石10
6	8																	石15下層
● 7	5																	炭・焼土・石20
8	15																	炭・石大10
9	11																	炭・焼土・石20 南に焼土塊
10	55															3		炭・石10 深い
11	42															5		炭・石20 深い
12	30																	石40
Gピット群	10	15																ピット11・方形
H竪穴1	17																	
Hロームマウンド2基	20								手びねり の土塊									深い土壤

8. 縄文時代中期・後期の土壌

G・H 地区には縄文時代前期の土壌群があるが、A・B・C・D 地区には 1・2 基あるかどうかで、大部分が縄文時代中期・後期かと思われる。地区別にみると A 地区 14 基、B 地区 2 基、C 地区では数が多く 30 基ほど、D 地区で 8 基、G・H 地区でははっきりしないが、20 基ほどとみられ、全体では 74 基ほどと思われる。土壌の数が多いので特徴的なものだけ取り上げ、表 3 によって概観する。

(1) A 地区の土壌 (第 3 図)

A 地区の東側、4 号住居址の周辺から 5 号住居址の東側にかけて、14~15 基の土壌・竪穴状の遺構が検出され、集石遺構状のもの・集石を持たない素掘り状のものがあり、中には深さが 40cm ほどの筒状のものもあるが、多くは 30cm 程度で、摺鉢状の掘り形が多い。炭や焼土を伴う土壌は、土壌 1・2・7 である。とくに土壌 7 は 4 号住居址の中にあり、住居址に付随するものかもしれない。出土する遺物は、表 3 にあるように全部が縄文時代中期のもので、石器も 1~2 点ほど出土している。

(2) B 地区の土壌 (第 3 図)

B 地区では遺構検出が少なく、3 号住居址の炉、集石遺構 3、土壌 2 が検出されている。土壌は 15・16 の 2 基で、縄文時代中期の土器片が 11・6 点出土している。

(3) C 地区の土壌群 (第 3・35・36・37・47・56 図、写図 50・51)

C 地区では広範囲に土壌が検出され、焼土や集石遺構と重複状態で検出されたものも多いので、西地区と東地区に分けて登録している。西地区で 14、東地区で 17 基の 31 基で、やく 30 基ほどが縄文時代中期・後期のものと思われる。焼土・集石遺構等との重複は多いために、中期と後期を識別することは困難であった。

① 西 土 壌 1~14

南側上方に単独で検出された土壌 1~11 の中には、縄文時代前期の土器片が出土したものは土壌 2・8・9 であるが、中期の遺物も出土しているので判別は難しい。他の遺構とは重複していないので、覆土が黒色土系・掘り形が筒状で深いものが目立っている。焼土・集石遺構群に隣接したり、重複しているものは土壌 12~15 で、15 を除いては縄文時代中期後葉の土器片が出土し、とくに土壌 14 は一個体の土器が出土している。

C地区の東側中央付近に重複して検出された土壌が多く、焼土7・25や多くの集石遺構と重複するものが多く、単独のものか・付隨するものか・上下に重複するものか判別するのが難しいほど接近して検出されたものが多い。とくに東土壌1・2・3・4は土壌自身が接近状態にあり、土壌2・4は上層に焼土7が広がり、それに接近した炭の混入した落ち込みがあり、その下から縄文時代後期の壺形土器（第56図1～5・写図24）が出土し、さらに下層から接近した位置に、縄文時代中期の土器片を伴う集石遺構が検出されたところでもある。

さらにその東側一帯には、東土壌5・6・7・8・10があり、集石遺構19・20・21・22・23・25・26等が接近したり重複して検出され、出土した土器片の多い土壌は1・6・8・9で、後期の土器片が多く出土した土壌は2・9・10・14である。それらの中で代表的な土器を図示したものが第37図で、26～29（第56図1～6）の土器は、土壌2の上層で横倒しに出土した一個体の土器であるが、薄くてもろいために復元されなかったものである。この他にも縄文時代後期の土器片が多く含まれている。

(4) D地区の土壌（第3・37図、写図52・53）

調査地最下段のD地区では、竪穴状の大きな土壌2基を含めて9基が検出されている。この辺りから地形傾斜が強まる所で、北に向かって傾斜しているので、黒色土・茶褐色の耕作土は深い。西側に竪穴状の大きな土壌1・2・3・4が検出されている。土壌1は長径2.6m・短径1.55m、深さ81cmあって、摺鉢状のもので、人頭大の石が多く入っていた。土壌2は2.4mほどの円形状の土壌で、深さは44cmほどの竪穴状の土壌で、壙底に近い所に人頭大の集石があり焼土も検出されている。土壌3は長径3.1m・短径1.2mほどの梢円状のもので、掘り形は摺鉢状で深さは77cmある。壙底に焼土が15cmほど堆積している。土壌4は長径2.2m・短径1.9mほどの梢円状のもので、深さは95cmあり、下層に焼土が検出されている。土壌5は1.2mほどの円形状の土壌で、深さは45cmほどある。他の土壌はこれと殆ど同じ形態のものである。

土器片の出土は比較的多かった。表3でみられるように縄文時代中期・後期の土器片が出土している。これによって時期を決めるることは困難ではあるが、後期のものも多いと思われる。

(5) G地区的土壌（第4・16・20図）

G地区では中央から東側にかけて土壌が検出されている。出土した土器片の数を表3にまとめてあるが、縄文時代前期・中期の遺物が多く出土する土壌がある。縄文時代中期の土器片だけ出土した土壌は9・15だけで、中期の土器片が多く出土した土壌は5・6である。これだけでみた限りでは時期を決めるることは困難ではあるが、中期的な要素が多いかと思われる。第16図8・9の口縁は土壌5・6から出土したもので、一個体の土器が出土しており、土壌15はピットの集団で中期の土器片出土だけで、中期とする条件は揃っている。

(6) H 地区の土壙 (第4・15・16・20図)

H 地区では狭い範囲に縄文時代の集石炉・集石遺構・焼土・土壙・ロームマウンド等の遺構がひしめいていて、特殊な遺構のほかは時期を決めるることは困難である。表3の土器片出土数によると、中ほどから西側に縄文時代中期の土壙が多いように思われる。

9. 縄文時代後期の焼土をともなう遺構 (焼土1~27) (第3・35・36図)

C 地区には検出当初、上層から小さいものでは径50cm、大きいものでは180cmほどの焼土塊が各所で発見された。後に報告する石列に平行する焼土群が並んでいる。この石列に重複したりその延長線に並ぶものは、東側から焼土25・10・2・3・8・12であり、その北東側に平行して直線的に並ぶ焼土は7・4・17・14と18・13と5・22と24である。その周辺にいくつかの焼土塊がある。その下層に集石遺構が検出されたものは、2・3・4・6・7・10・17・23と8基に上る。焼土の厚さはまちまちではあるが、薄いもので15cm、厚いものでは40cmに及ぶものもある。完形の土器が出土したものは焼土7だけであるが、土器片が10点以上出土したものは、焼土3・4・6・7・8・10・11・12・13・14・15・17・18・20・22・24・26と17基ある。縄文時代中期の土器片が10点以上出土したものは、焼土4・6・10・11・13・14・15・17・18・20・22・26で、縄文時代後期土器片が10点以上出土したものは焼土3・4・5・6・7・10・18である。第47図5・6・7は焼土5・6から出土した後期の土器で、中期の土器片は下層から出土する例が多いことから、焼土そのものは縄文時代後期の遺構とするのが妥当かと思われる。焼土塊の多くは上層で検出されているが、掘り下げていくうちに下層から発見された例は、C 地区では焼土15と17の2つであるが、D 地区の土壙2・3・4やH 地区の土壙等にある。C 地区では集石遺構を下層まで検出してないので、まだ下層から焼土が検出されるかもしれない。第41図1~35はC 地区の焼土から出土した土器片で、多くは縄文時代後期のものである。石列や集石遺構と重複する焼土については後の項で触ることにする。

10. C 地区の集石遺構 (第4・35・36図)

C 地区には焼土に隣接する集石遺構、下層に重複する集石遺構等が、この地区の北東全域に広がっている。これらの配列状況はしかとはいい難いが、焼土の配列に沿うものが多いように思われる。登録した集石遺構は47基の多きに及んでるので、① 石列遺構 ② 焼土と重複する集石遺構 ③ 特長を持つ集石遺構について報告する。

(1) 石列遺構 1・2 (第35・36・42・43・44・45・47図、写図42~49)

C 地区のほぼ中央に、南南東から北北西の方向に長さやく8.5m、幅1.3~2.2mほどの窪みの中に石列遺構が並ぶ。東側に並ぶ石は棒状のもの・平状のもの等があり、大きなものは長さ50~60cm・幅35cmほどあり、棒状の石と平状の石が組み合わされた所が各所にある。中間に1.2mほど離れて2本の石棒状の長石が据えられている。(写図42) 西南側には拳大以下の小石が窪みの傾斜面の沿って並べられ、

その上に焼土2・3がある。焼土の下には人頭大以上の集石遺構が検出されている。石列中からの出土品は、石斧2本のほかに縄文時代中期・後期の土器片20点（第44図1～3）ほどと鍵石が6点ある。（第44図35～40・第52図6～11）この中には緑色片岩製で決入りのもの、砂岩製で全面磨製のものがある。第45図1～5、7は半磨製石斧・丸石・打石斧・横刃型石器で、7の石器は2と集石5出土の8の石器と接合されている。

この石列に重複する焼土2・3のほかに、東側には焼土1・10・26が並ぶ。この北側に石列状の名残りがある。ここは耕地造成により切り取られ、石垣が構築されていて攢乱しているが、その下層から検出された石列なので、石列2と登録している。

西側には、石列を取り巻くように焼土8・9・15が並び、さらに西北側に大石7～8個を主体にした集石遺構4が並んでいる。石列2・石列1・集石遺構4を一連のものとすると、20mほど広がることになり、その周囲に広がる焼土群・集石遺構群・土壤群を含めると、台地全体に広がる遺構群で、その中心に石列遺構があると思われる。

（2）集石遺構4と周辺の遺構（第35・36図）

集石4は前述のように石列1につながる遺構と思われる。この周辺には焼土12・13・14・18・5・22、集石遺構3・5・6・7・32が取り巻いている。その西北には6号住居址と焼土21があり、北側にも集石遺構が続いている。6号住居址は、上面に土器片と集石状の石群を持つ特殊な竪穴であったから、関連する遺構かとも思われる。この周辺で出土した土器片・石器は多く、縄文時代中期後葉・後期のものが集中的に出土している。

（3）その他の集石遺構（第35・36・42～45・47図）

C地区には45基以上の集石遺構が検出されている。この範囲はC地区全域に広がり、焼土の下層に重複するもの（集石12・17・18・27・45）、焼土に隣接するもの（6・8・13・15・30・34・40・43）、1号住居址に重複・隣接するもの（19・20・21・22・23・24・25・26）、単独のもの等がある。これらの中で、焼土の下層に重複するもの・集団で検出されたもの・遺物出土が多かったものについて取り上げる。

① 集石遺構17・18・45（第39図、写図36・37・40）

C地区石列北東側で集団で検出された焼土4・6・17の下層で検出された集石遺構17・18・45で、第39図の上側は、上層焼土4・6・17の検出状況である。石列東北に浅い溝状遺構があり、その縁に沿うように焼土や石群が検出されている。焼土と並ぶように東西方向の石列（集石遺構9）が検出されている。この石列の下から集石18が検出されている。石列3の西側（焼土4と17の間）に東北方向の石群（集石17）が並び、その下層から重複する石群・焼土（17-2）が検出された。（第39図の○は上層の石を示している）

下層には集石遺構17・18・45が殆ど接触するように現れ、焼土16や平石を配するところも何箇所か

検出されている。集石遺構18・45は深さ20cmほどの円形状の掘り込みの中に石が詰められている。穴の大きさは、集石18は1.7x1.6m、集石45は1.45mほどある。石の大きさは35x25cmくらいから人頭以下の中のものまで30~50個以上あって、2重に詰められ、上面に丸石が1~2個置かれている。(写図36・37) 断面図でみると上面焼土の厚さは20cm、その下に炭混じりの層があり、その下層に集石がある。集石の間からは炭等は検出されないが、土器片はいくらくか出土している。第44図21~23は集石遺構17・18出土の縄文時代後期の土器片で、第54図4・8は集石17・45出土の丸石である。

② 集石遺構27・40 (第27・35・42図、写図39・49)

C地区上方東側で検出された焼土10は、第41図18~27にあるように縄文時代後期の土器片が上層で57点、下層で10点ほど出土している。掘り下げると焼土が重複するように検出され、幾重にも重なる集石が検出された。その北側に集石遺構40、南側に集石遺構27が接觸し、縄文時代後期の土器片が出土している。焼土10の東側には焼土26があり、集石35・29・34・47が集中して、石列2へつながっている。この一帯は検出当初から焼土が各所でみられ、土器片が多く検出された所で、さらに東側に遺構群が続くと思われるが、農道があるために調査不能の所であった。

③ 集石遺構11・12・13・14・15・44 (第36図)

C地区中央部1号住居址の南側に、焼土7・25、東土壤1・2・3・4・9と重複するように集石遺構11・13・14・15・44が検出されている。焼土の項で説明したように焼土7の範囲が広く、それに重なるように炭まじりの落ち込みが各所にあった。集石遺構11・13・14は上層で検出されたが、集石遺構15は焼土25の検出中に確認され、12・44は東土壤2の下層から検出されている。出土する土器も縄文時代後期・中期のものが混在して発見されていて、時期判定の困難なところでもあった。

④ 1号住居址周辺の集石遺構 (第36図)

1号住居址周辺では、検出当初は集石遺構群として扱られ、集石遺構19・20・21・22・23・25・26と扱っていた。縄文時代中期後葉の土器片と共に集石群が検出され、掘り下げていくうちに範囲がだんだん狭まり、円形状の落ち込みになったので、1号住居址と名づけたものである。その結果、集石遺構20・21・22は1号住居址に包括され、集石遺構19・23・26は単独の集石遺構と扱っている。1号住居址は、炉もなく、ピットも検出されないので、普通の住居址の形態とは異なった竪穴で、当初のように集石遺構の集合体とみた方が妥当かと考えられる。そうなると、東側に続く集石遺構23・25・41や土壤17・10、北北東の焼土17・20や土壤12、北北西の焼土23・集石遺構8と27・土壤15を包括した遺構群かと思われる。この一帯からの出土遺物は、縄文時代中期後葉のものが大部分で、縄文時代後期のものは少ない。



第35図 C地区土壤・焼土・集石群(下層)



第36图 C地区土壤·烧土·集石群(上层)

⑤ 石列1以西の集石遺構1・2・42（第35図）

C地区石列1・集石遺構4の西南部には集石遺構1・2・3・32・42が散在している。大きめな石による集石は1・42で、とくに集石遺構42は壇内いっぱいに集石が詰り、縄文時代中期の土器片だけが出土している。他の集石遺構は人頭大の石は僅かで、拳大以下の石によるものが多い。出土する遺物は多くないが、縄文時代中期・後期のものが混在している。

11. A・B地区の集石遺構（第3図）

A・B地区には4基の集石遺構が検出されている。A地区には5号住居址の北側に1基、B地区ではほぼ中央上方に土壙15を挟んで、3基並んでいる。楕円状の穴の中にまばらな集石が上面に置かれたもので、土壙の深さはともに30cmほどのものである。細かい検出が出来ていないので、伴出した遺物がはっきりしないが、縄文時代中期のものがいくらか出土している。

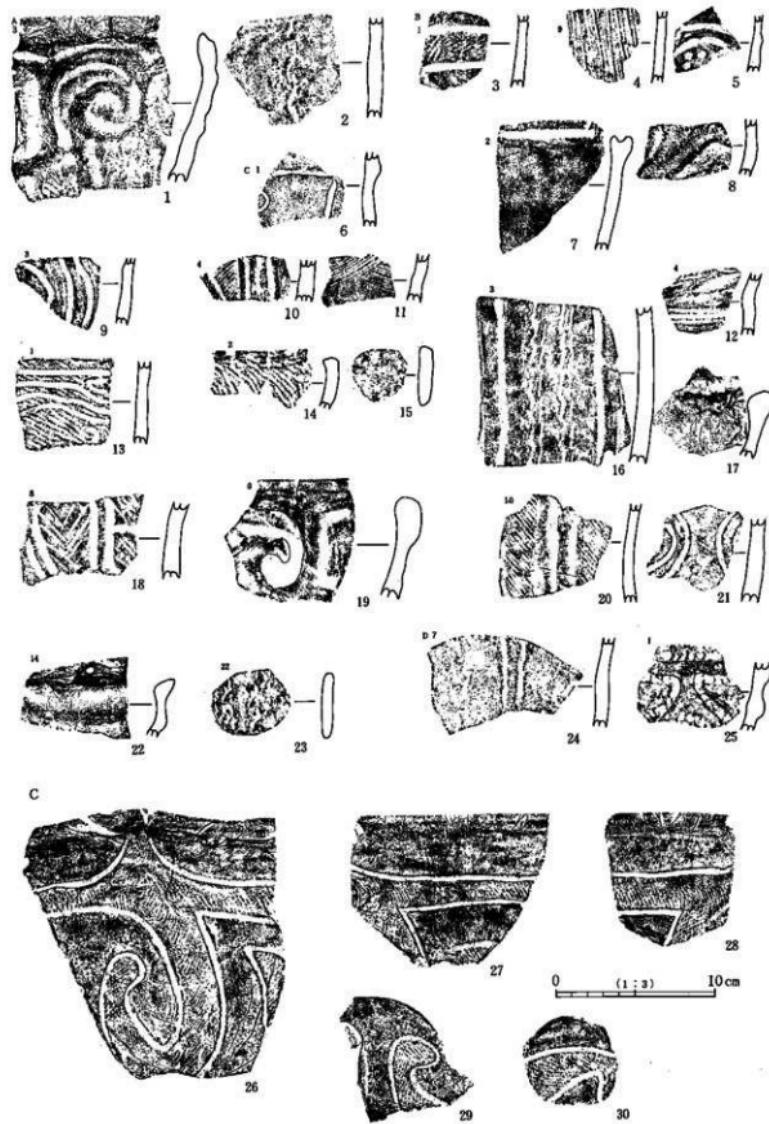
12. G地区の集石遺構（第4図）

G地区では集石遺構として捕らえたものは2基で、西側下方で検出されている。この辺りは過去に屋敷があったと伝えられていて、屋敷の区画を示す石垣の一部が残され、転石が多い所であったから古い遺構であるかどうかははっきりしないが、縄文時代前期の土器片が多く出土し、黒曜石片も多く出土している。

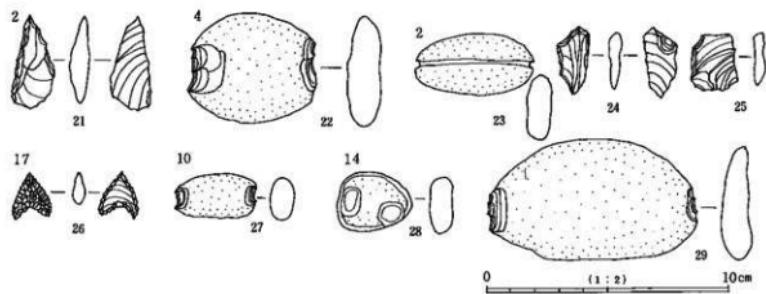
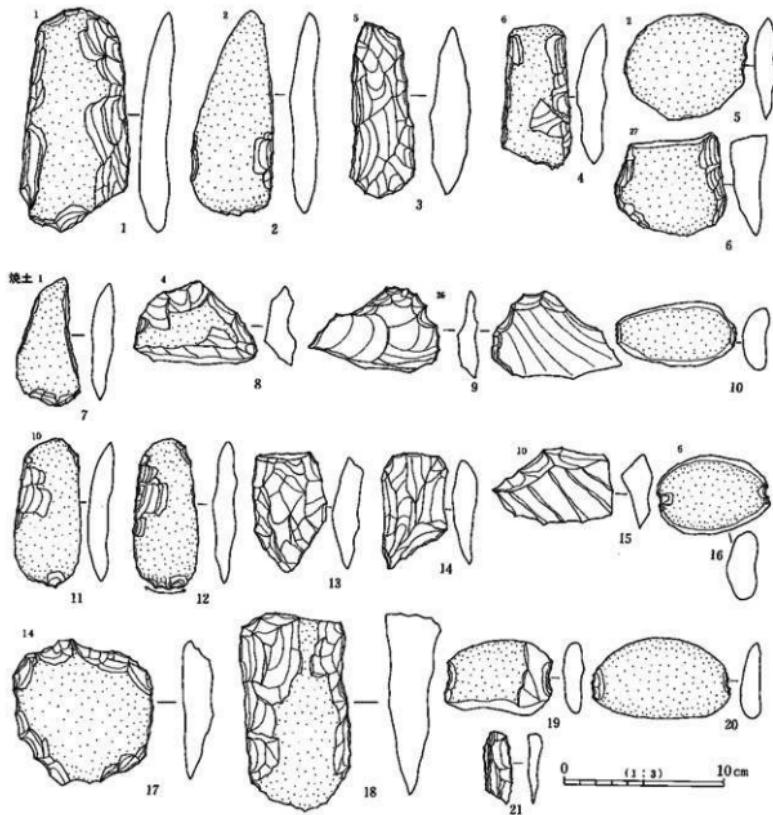
13. H地区の集石遺構（第4・15図）

縄文時代前期の項で説明したように集石炉を含めて12基の集石遺構が検出され、集石遺構として登録されていないが、集石を持つ土壙（土壙9・10・14）やロームマウンドに付随する土壙の下層から集石が検出されている。調査期間の終了間際の検出であったので、詳細記録がなされていないが、表3でみられるように出土した土器片は縄文時代前期のものが多く、中期のものは少ない。縄文時代中期の住居址（16・17号住居址）も近くにあるので、中期の集石遺構もあろうかと思われるが、確かめられていない。

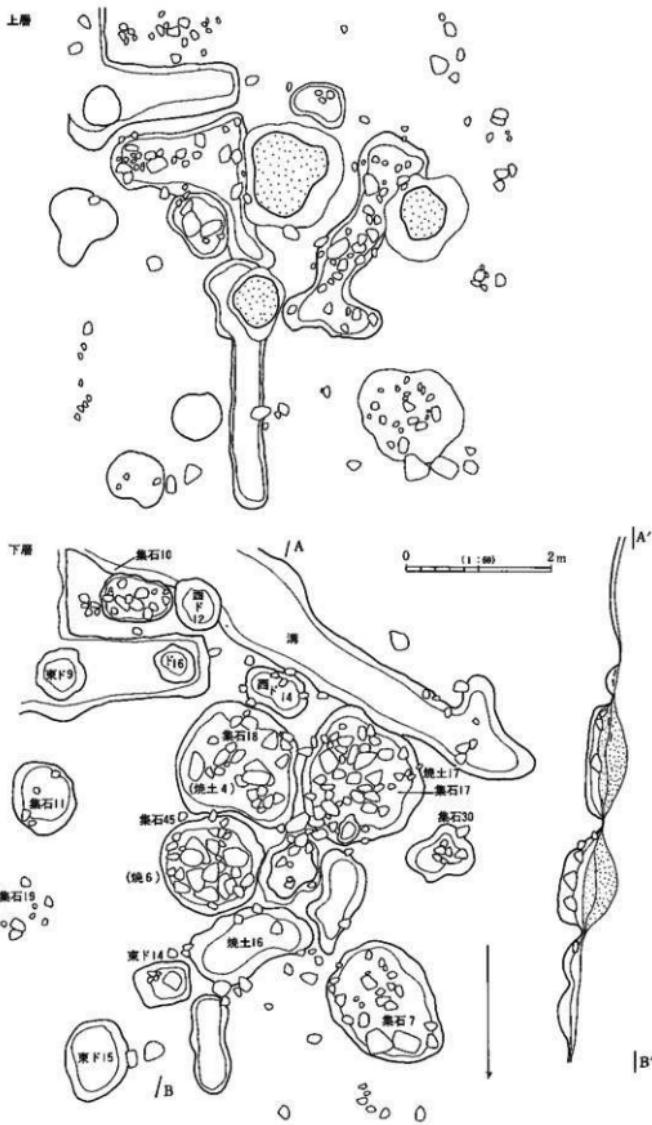
集石遺構から出土した遺物の中で、特徴的なものは石列遺構の石棒・鍤石である。土器では器台形土器が多い。1号住居址の3点（第22図3・6・7）のほかに、集石遺構19（第47図9）・集石24（12）・集石38（13）からも出土していて、集石遺構の機能が推測される。



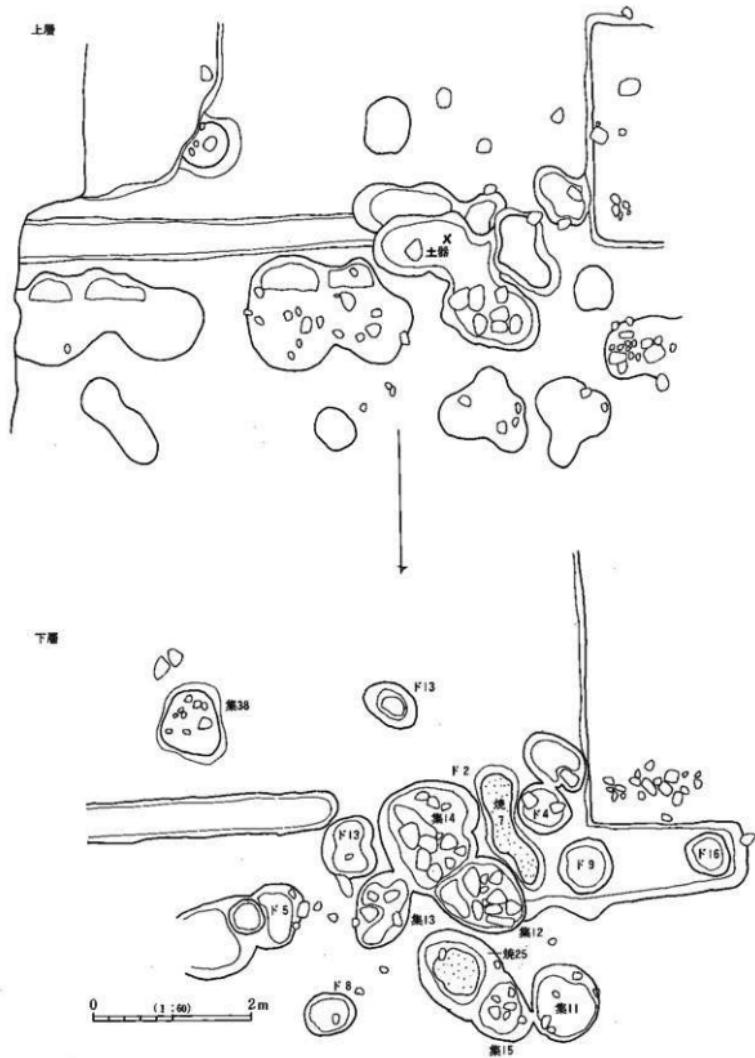
第37图 C·D地区土壤出土土器



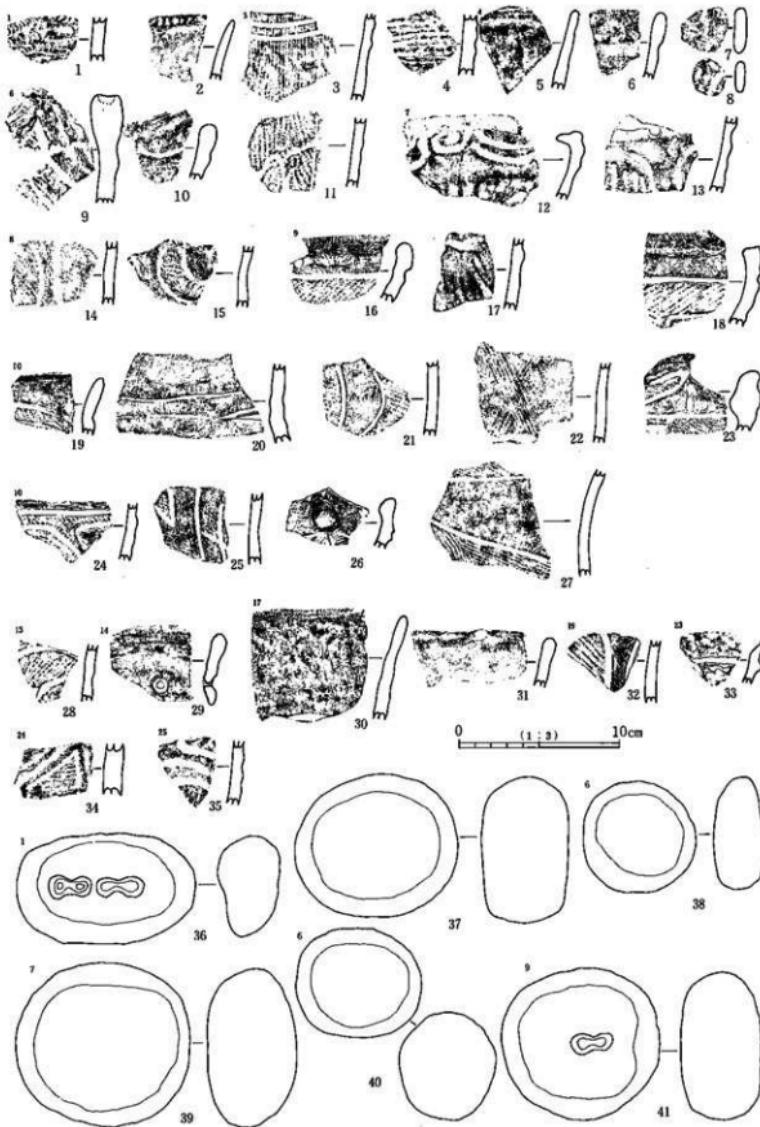
第38図 G地区土壤・焼土出土石器



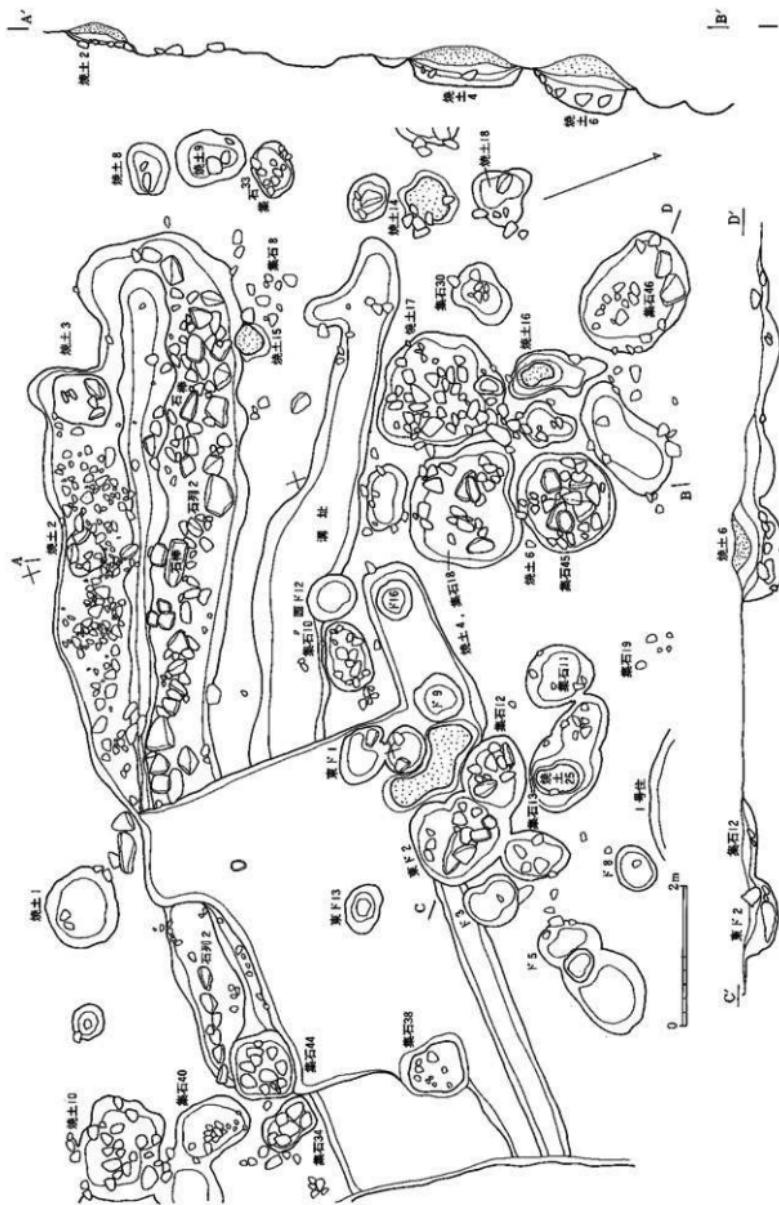
第39図 C地区焼土4・6・17と集石群



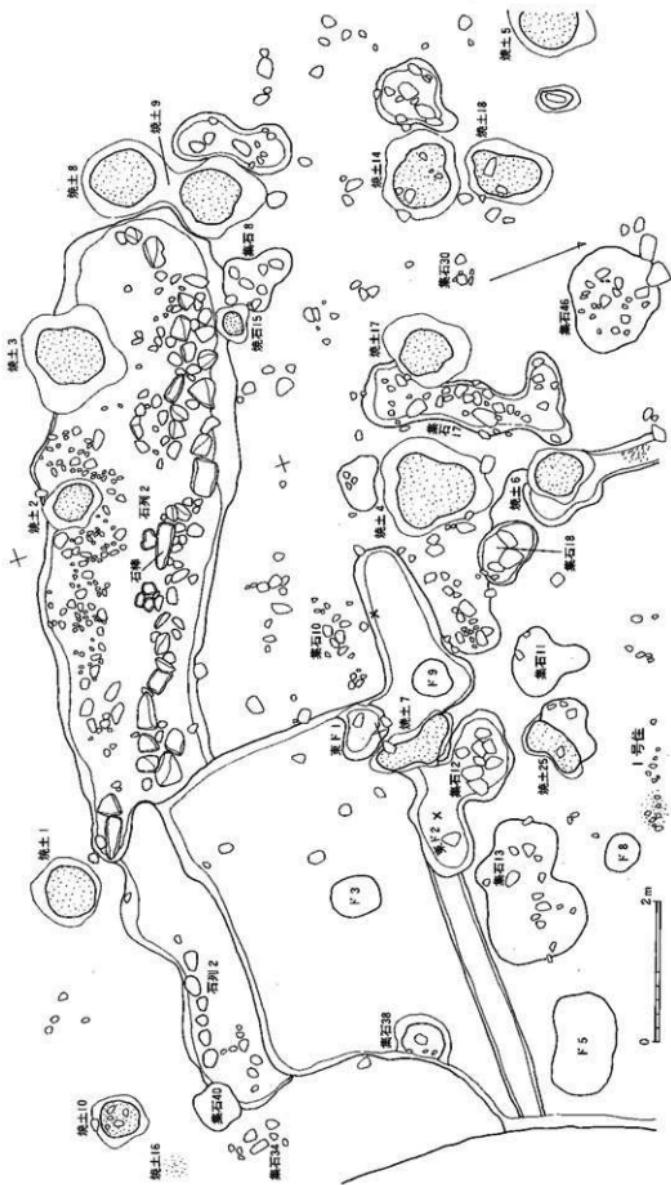
第40図 C地区焼土7・25と周辺の土壤・集石



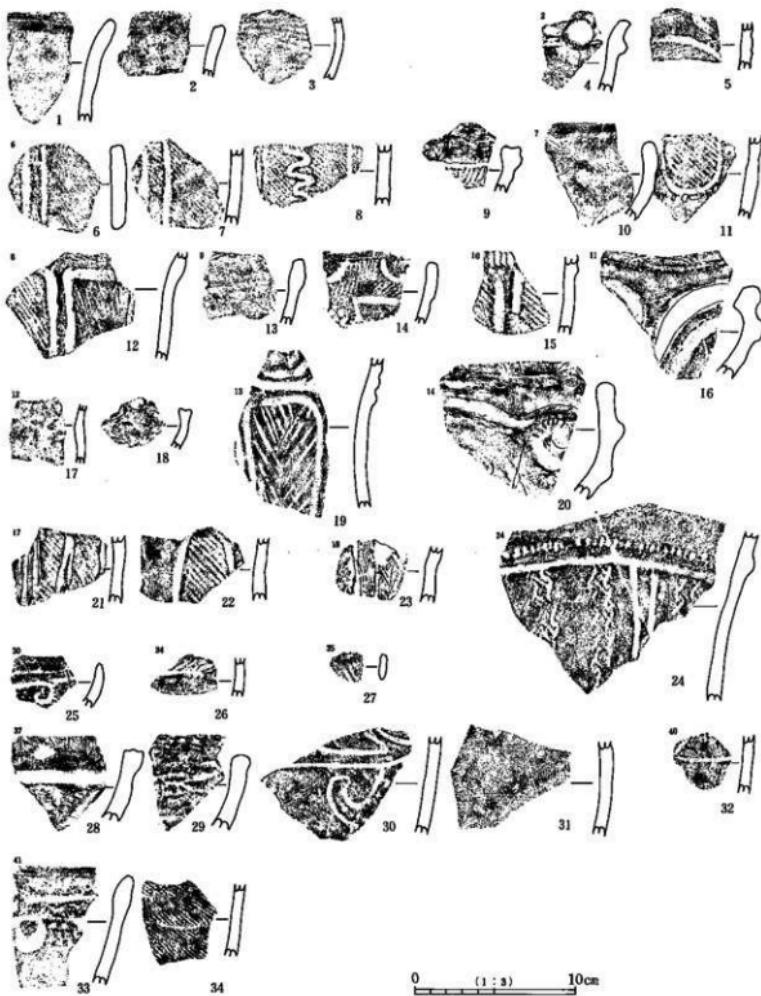
第41図 C地区焼土1~25出土土器・丸石



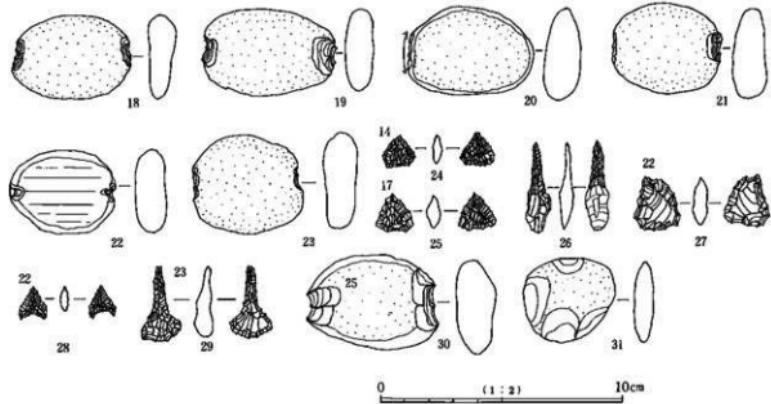
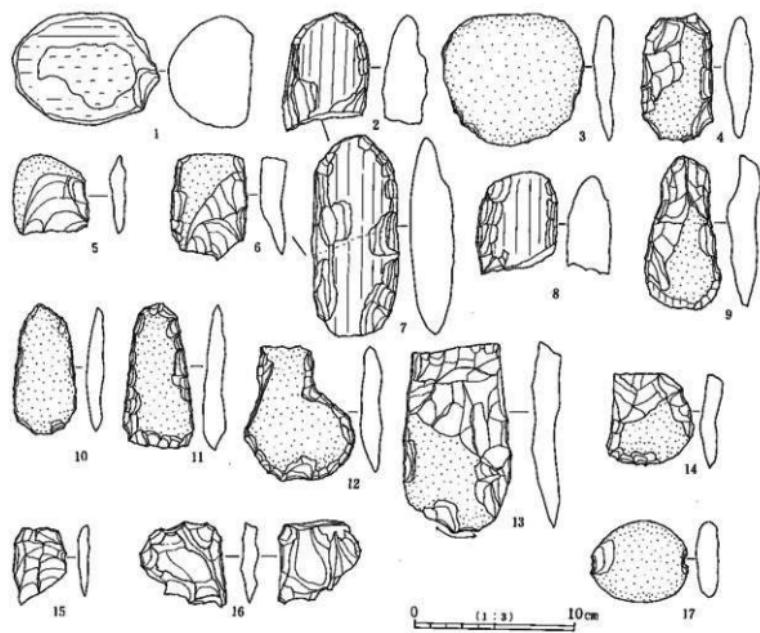
第42図 石列1・2と周辺の焼土・集石群（下層）



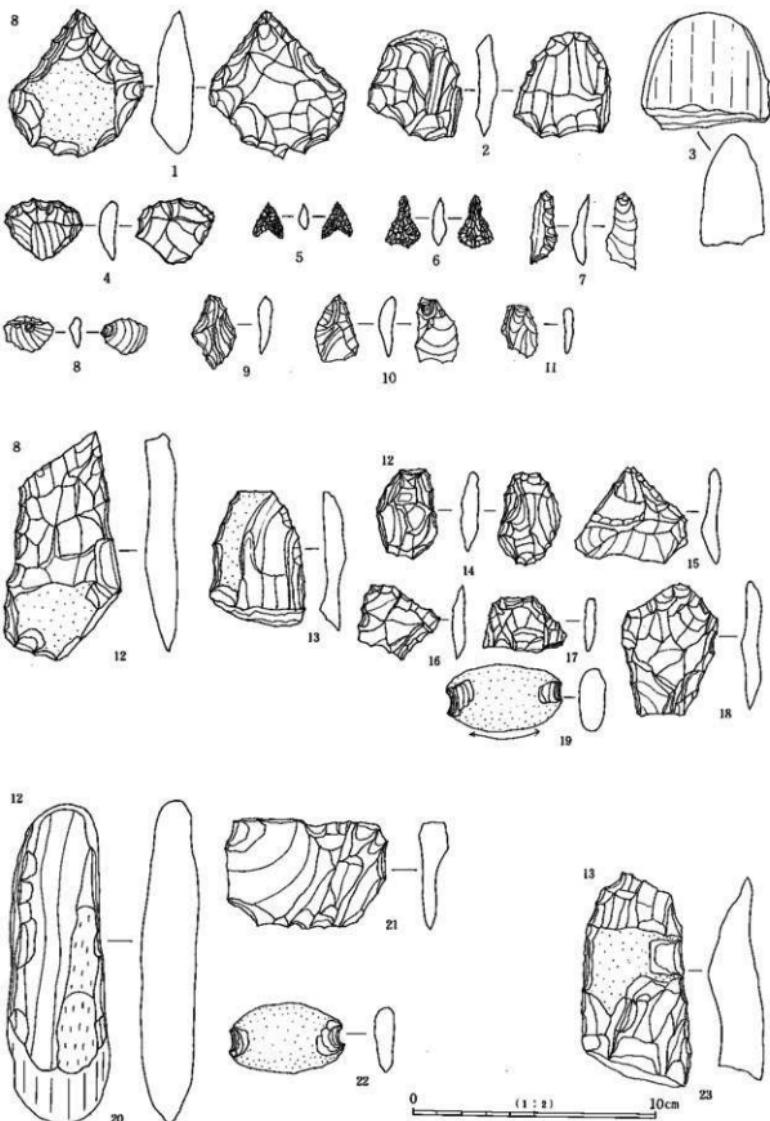
第43図 石列1・2と周辺の焼土・集石群（上層）



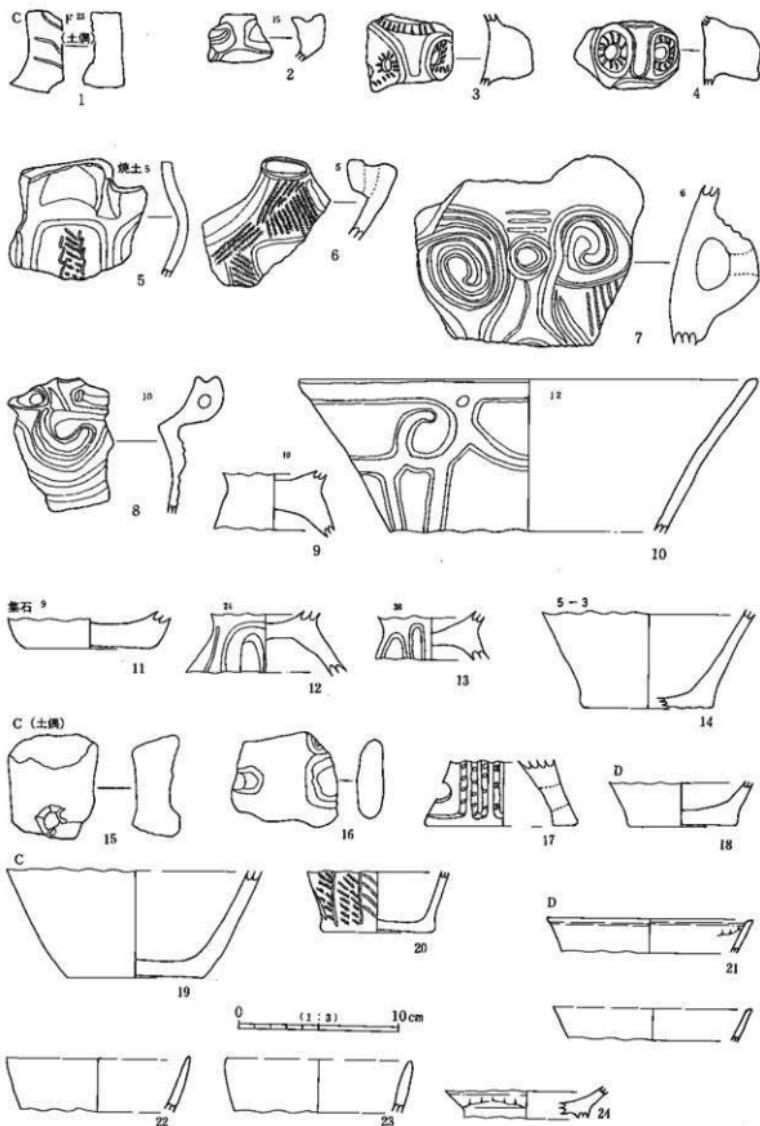
第44図 C地区石列・集石2~41出土土器・鍤石



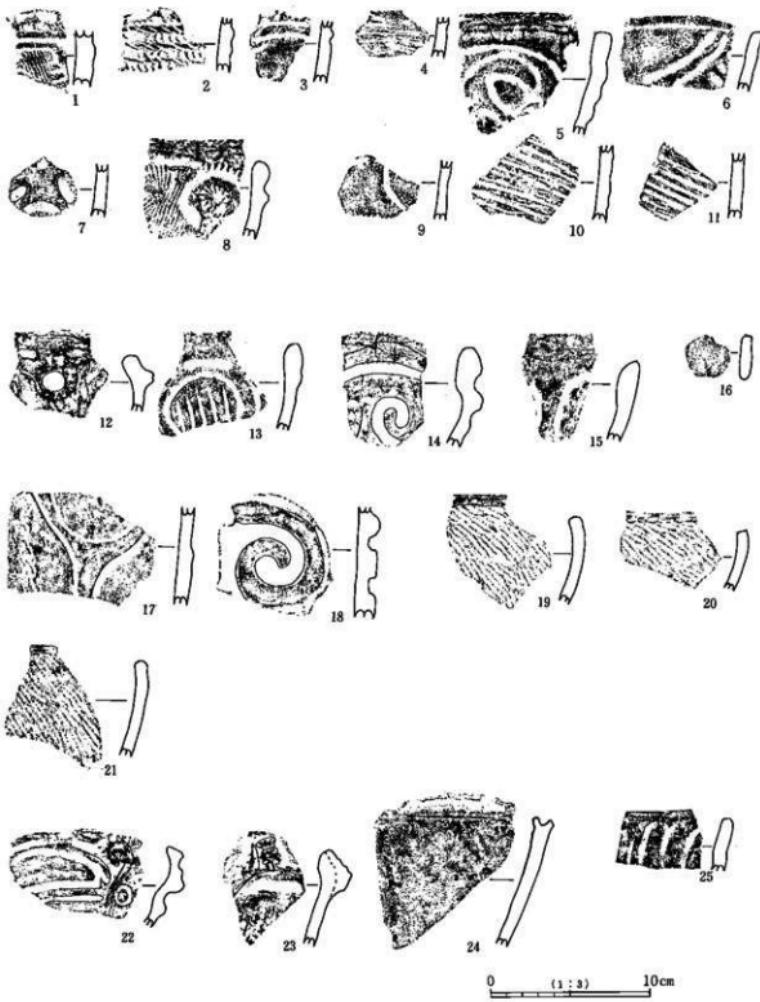
第45图 C地区石列・集石出土石器



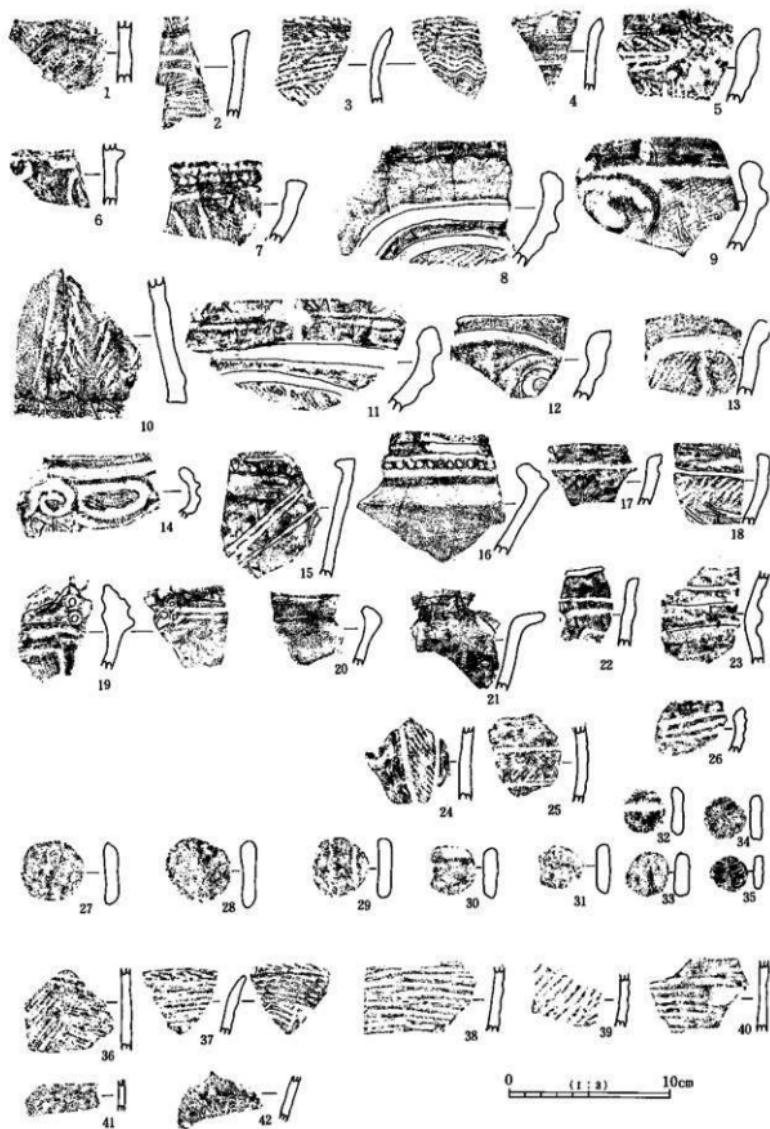
第46图 8·12·13号住居址出土石器



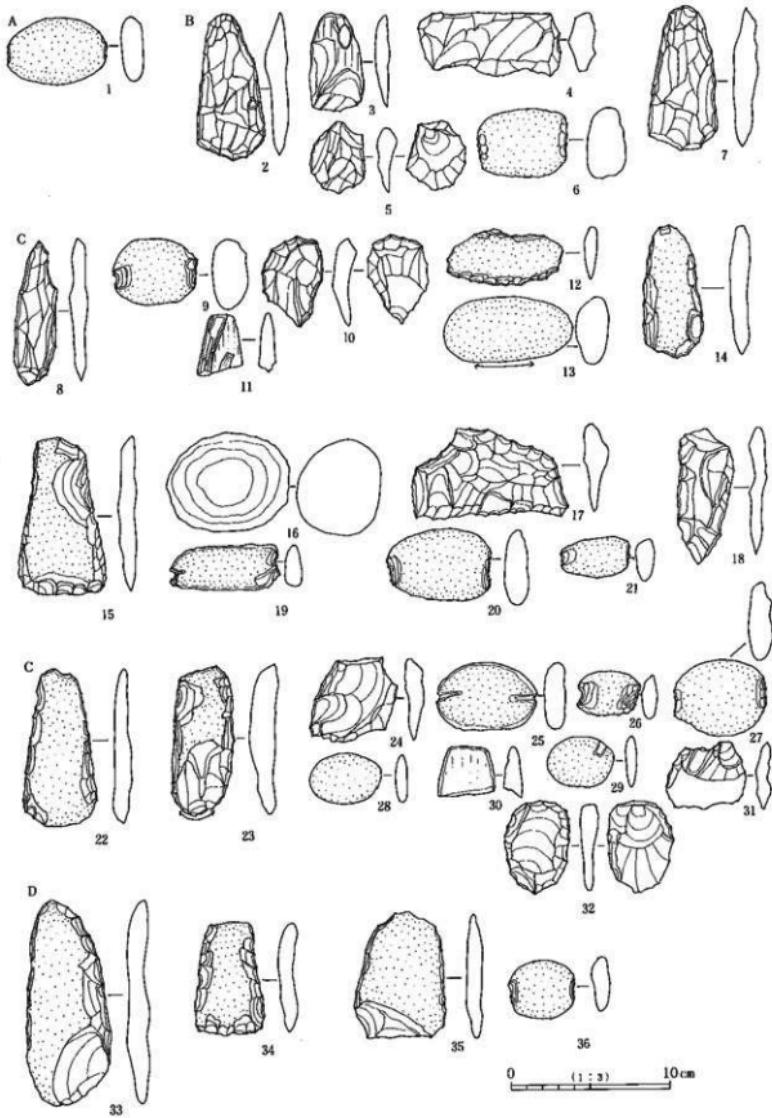
第47図 C地区土壙・焼土・集石、D地区出土土器



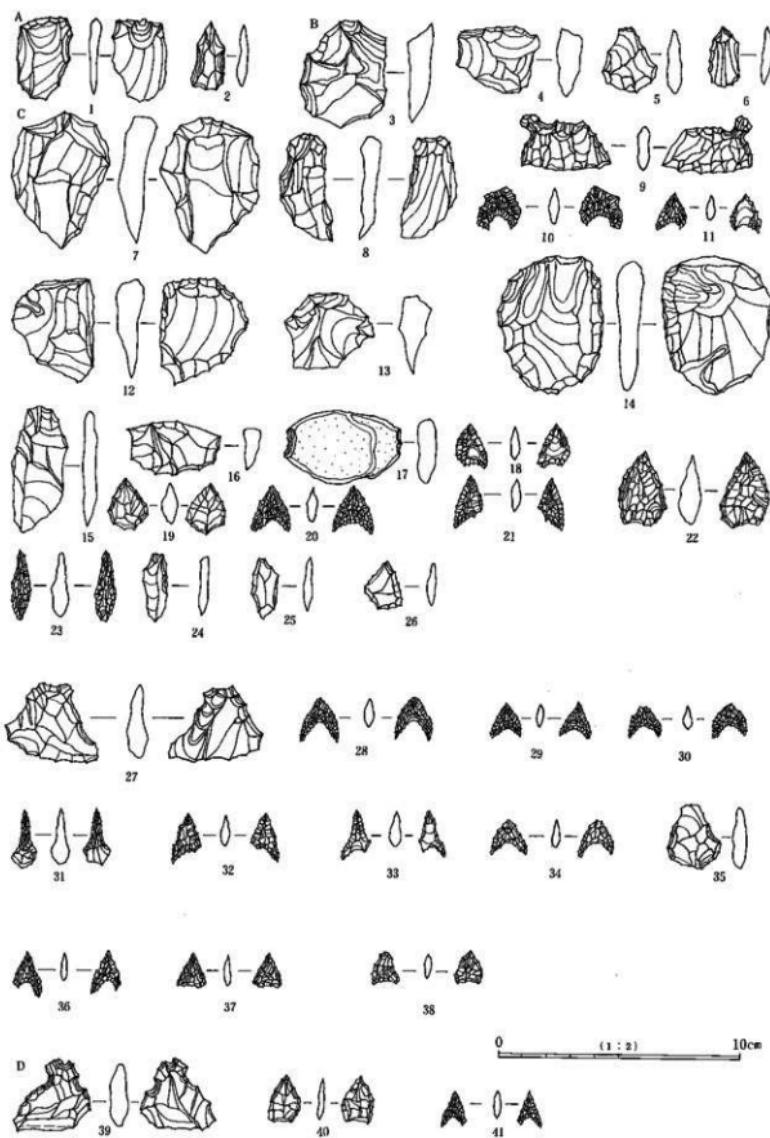
第48図 A・B・D地区遺構外出土土器



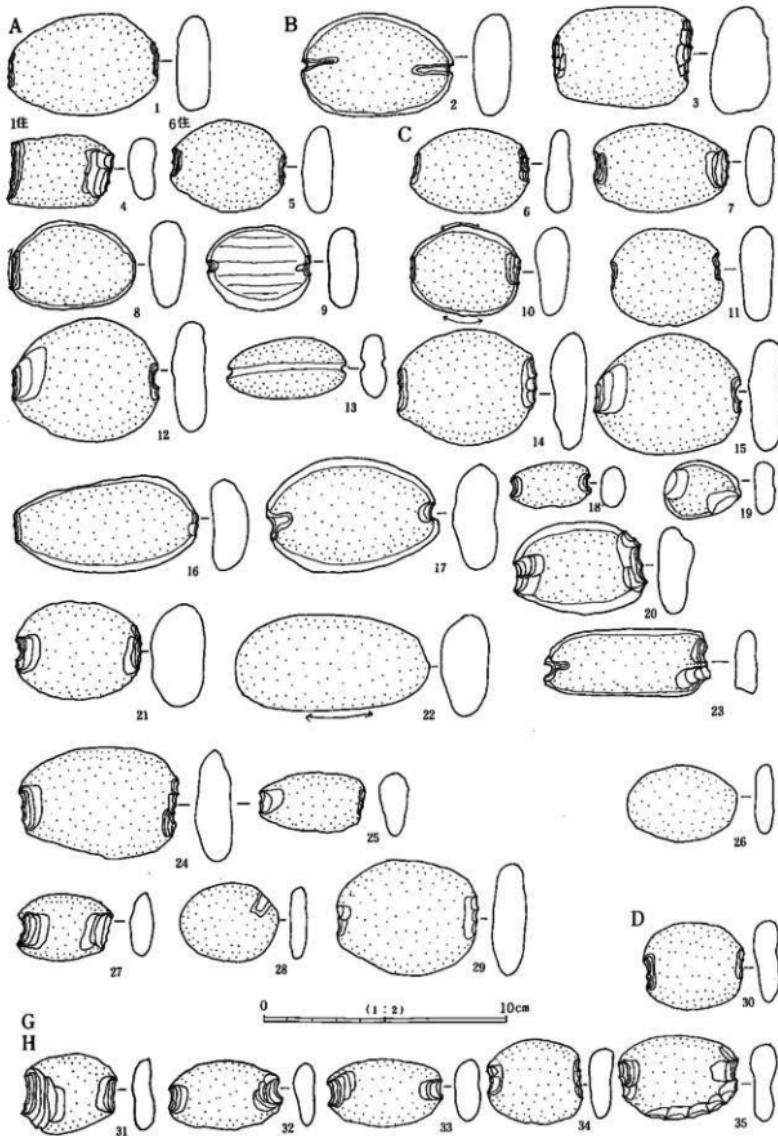
第49図 C地区造構外出土土器



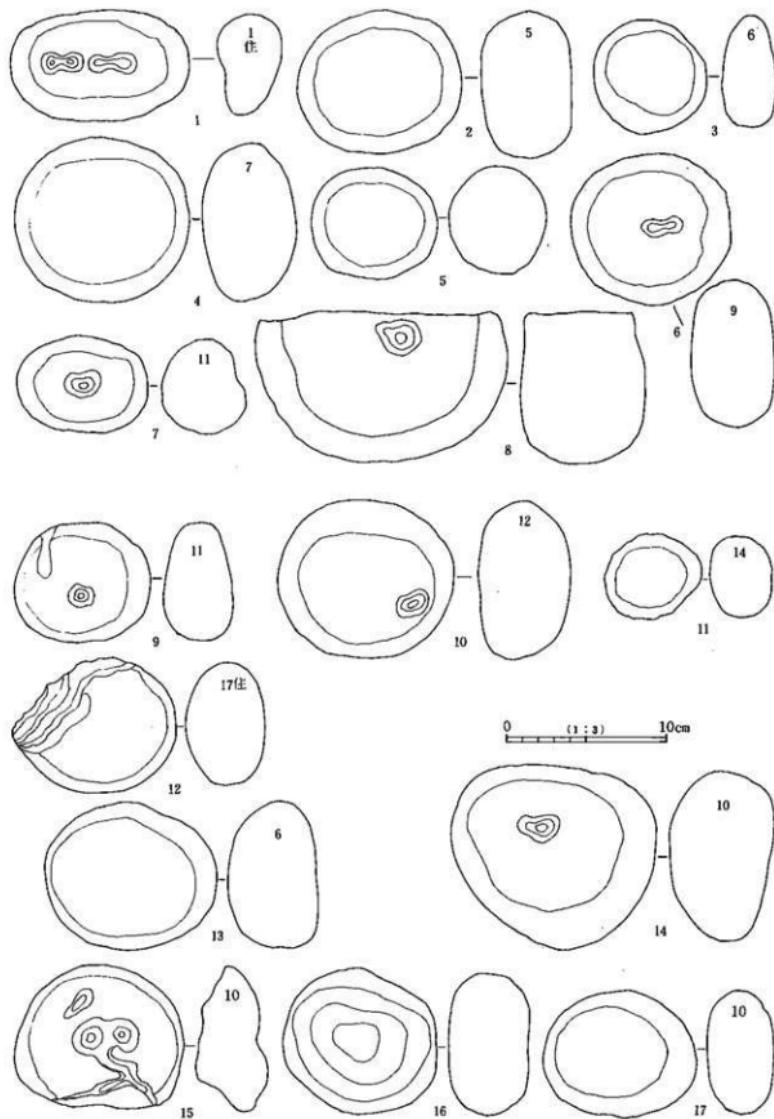
第50図 A～D地区グリット出土石器(1)



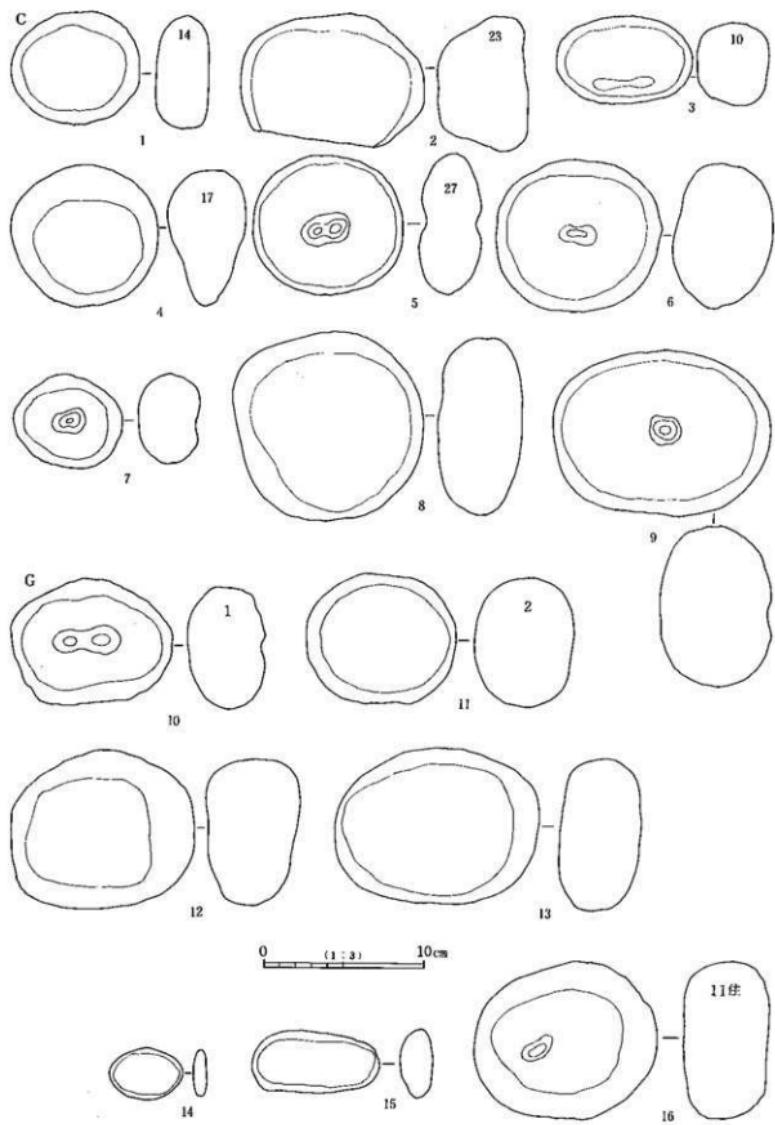
第51図 A～D地区グリット出土石器(2)



第52図 各地区出土鍛石



第53図 住居址・焼土出土丸石（陶石）(1)



第54図 焼土・集石・グリット出土丸石(回石)(2)

14. 縄文時代晚期の住居址・土器棺墓

(1) 2号住居址(竪穴)(第27・56図、写図12)

C地区上方東側で検出された竪穴で、プランは長径2.0m・短径1.8mあり、深さは南側で40cmほどある。覆土は炭混じりの黒色土が堆積し、上面から薄手の無文土器片が出土したので平安時代の竪穴かと思われたが、検出の結果縄文時代晚期の土器片が主であった。床面は平垣であるが生活面の堅さはなく、拳大ほどの石群が検出されている。覆土に炭と焼土塊が含まれているが、床面からの焼土は発見されていない。ピットも検出されないので住居址としての条件は崩っていないが、一応住居址として登録した。

第56図14・15、17~21、24・25・28が出土した土器片で、14は口辺に薄い条痕文が付き、口縁が大きく外反するもの、15は口唇部を2条の沈線で調整し、口辺から頸部にかけて左下がりの条痕文の付く口縁部である。17から21は平行・斜走の条痕文土器片である。28は木の葉文の付く底部で、底径18cmほどある大形なものである。

今回の調査地の中で、縄文時代晚期の土器片は50点ほど出土している。後述する土器棺墓から南側上方とB地区にかけて出土している。第56図11・12・13・16はB地区から出土し、23・26・27はC地区上方から出土している。

(2) 土器棺墓(第3図、写図26・27)

C地区中央のやや東側、集石遺構9と10の間(第3図の●印)で検出されている。C地区を重機によって排土する作業中に土器片集中が発見された。この土器片が調査員によって取り上げられてしまったので、上面の様子が不詳であることが惜しまれる。掘り下げてみると写図25でみられるように、第55図1の条痕文の壺形土器が口縁を東側にむけて斜めに埋められ、その中に細い羽状条線を付けた水式類似の壺形土器が、口縁を上にむけて落ち込んでいた。合わせ壺形土器である。土器を埋めた掘り込みははっきりはしないが、土器の底下に2cmほどの黒色土がみられ、横は土器いっぱいくらいの穴のように思われるが、最初から斜めに埋められたように思われる。土器・土器片のほかには副葬品と思われるものは発見されず、炭等も発見されていない。土器棺墓の上面は、後に検出された集石遺構9・10よりは5cmほど高い位置にあり、焼土4・6と同じ位かやや高い位置にある。何れにしても形態からみて縄文時代晚期の土器棺墓である。

第55図1の土器は、口径38・高さ43・底部径11cmで、胸部最大幅は口辺に近い位置にあり32cmほどある。器形全体では細長い形で、口縁が大きく外反する壺形土器である。口唇部には刺突文状の押引文が付けられ、口辺からは左下がりの条痕文、胸部から底部に右下がりの太くて深い条痕文が付けられている。底部は揚げ底になっている。口辺やや下に径6.5cmほどの穴が空けられている。器内にも斜または横走の浅めの条線が口辺から胸部にかけて付けられている。土器形式は東海系の水神平形式の土器かと思われる。

2の土器は、口径36cmであるが、底部を欠損しているので、器高は不詳で35cm以上である。胸部最大幅は36cmで器形はやや縦長の土器と思われる。口辺には浅くて小さめの押圧突帯が付けられ、口辺

は横走・肩部から下部にかけて羽状の条線が施されている。内部には施文はないが、へら状器具による調整痕がみられ、器面が精製されている。

土器の重なり形態から「合わせ口壺棺」ではないが、形態的に縄文時代晩期最終末の「土器棺墓」である。飯田市下伊那地方では何か所かで土器棺墓が発見されてはいるが、その数は多くない。阿南地方では初めての確認で貴重な資料である。

15. G・H 地区のその他の遺構

(1) G 地区のピット群 (第4図)

G 地区の中央南側用地境に、12の小ピットが固まる遺構があった。土壙15として登録してあるが、変形した方形状に並ぶ特異な遺構のひとつである。ここから出土している土器片は縄文時代前期・中期の土器片が20点ほど出土している。

(2) H 地区のロームマウンド 1・2 (第4・15図)

H 地区の中央付近で検出された黄土の盛り上がりで、並んで 2 か所発見されている。黄土の盛り上がりは長径90cm・短径60cmほどあり、周囲には黒土の掘り込みが何か所かあって、それらの掘り込みの深さは60~80cm以上ある。中には集石を持つものもあって、土壙となるものが取り巻いている。この土壙を掘った時の黄土が盛り上がったものと思われる。縄文時代前期・中期の土器片20点ほど出土している。特殊なものは手捺り跡の付いた土塊が出土している。

(3) H 地区の豊穴状遺構 (第4・15図)

H 地区の中央北側用地境に、長径1.8m・短径1.5mほどの落ち込みがある。東側壁際に集石があり、壁の高さは東側で30cmを測る。ピットは検出されていない。落ち込みの範囲が広いので、豊穴と扱ったが、土壙のひとつかもしれない。場合によっては住居址かもしれない。縄文時代前期の土器片が17点出土している。

(4) G 地区の石垣遺構 (第4図)

G 地区西側に12mほど続く石垣遺構がある。二段積みのもので西に向かって段差のある石垣で、崩れ掛けた状態である。この周辺からは縄文時代前期の土器片が出土はしているが、掘り込まれた穴も各所にあり、近世陶器片も散乱している。以前にこの位置に屋敷があったと伝えられるのでその石垣かと思われる。

16. 各地区の遺構外出土遺物

(1) G・H 地区の遺物 (第17・20図)

第17図1～40はG地区出土の土器片で、大部分が縄文時代前期のもので、そのうち代表的なものを載せてある。土器様式は第18・19図に掲げたものと同様のものが出土している。中期のものも出土しているが、38・39のほかは省いたものが多い。41～64はH地区出土の土器片で、G地区出土のものと大差のない縄文時代前期のものが多い。H地区では、G地区より前期の土器片が出土しているので、口縁を中心にして載せてある。第18・19図の代表的な土器片に採用されているものも含まれている。61～64は中期的な土器片である。

第20図12～28はG地区出土の石器で、硬砂岩製・硅岩製・蛋白石製のものが多い。20は有孔の磨製の珠である。黒曜石製の石鏃・石錐が多い。29～32はH地区出土の石器である。

(2) A・B 地区の遺物 (第48・50・51図)

第48図1～8はA地区出土の土器片で、縄文時代中期のものが多い。9～11はB地区出土の土器片で、9は後期、10・11は縄文時代晩期の条痕文土器片である。第50図1はA地区出土の鍤石、2～7は打石器・鍤石である。第51図1・2はA地区、3～6はB地区出土の石器である。

(3) C 地区出土の遺物 (第47・49・50・51図)

第47図15は土偶の足、16は土製円板、17は器台形土器である。第49図の土器片はC地区出土のもので、1～16は縄文時代中期後葉、17から26は縄文時代後期、36～40は縄文時代晩期、41・42は弥生時代後期の土器片である。縄文時代晩期と弥生時代後期の土器片は、中央より南側上方から出土している。27～35は土製円板で出土の数が多い。多くは縄文時代後期の土器片を使用したものである。

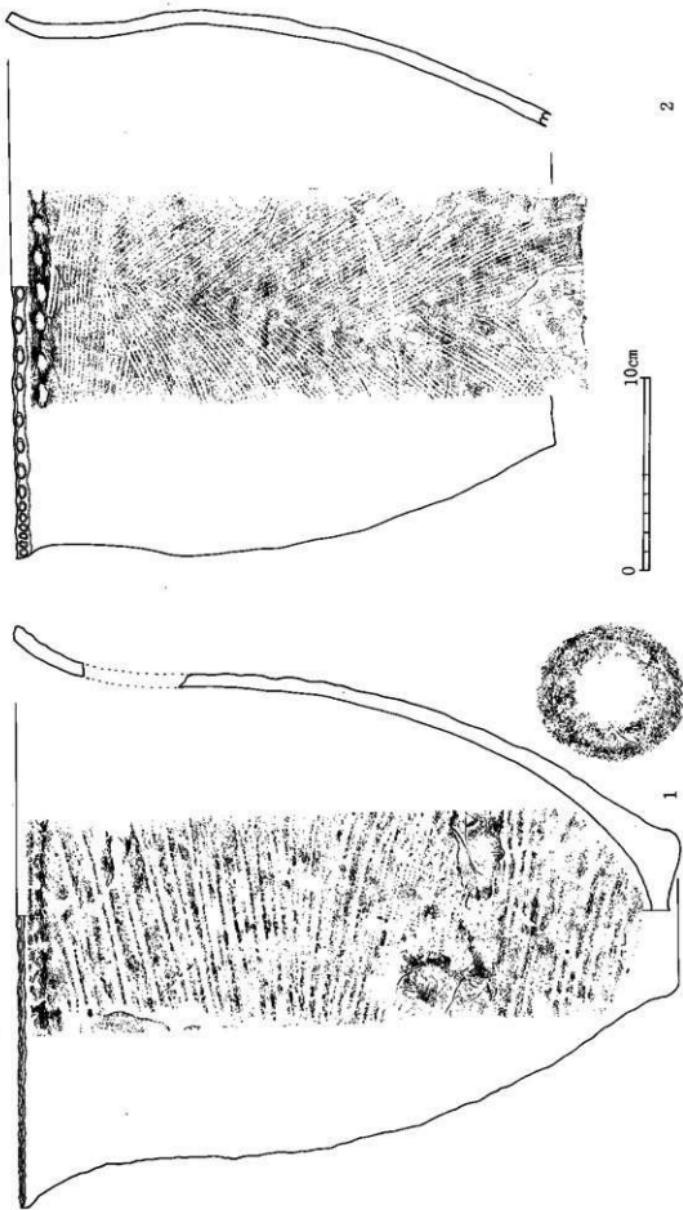
第50図8～32はC地区出土の石器で、硬砂岩製の打石斧、硅岩・貝岩製のスクレーパー状の石器のほかに、鍤石・丸石が多いのが特徴と思われる。第51図7～26はC地区中央部から北側一帯から出土したもので、石匙が含まれている。27～38は上方南側一帯から出土したもので、C地区全体から石鏃の出土が多い。

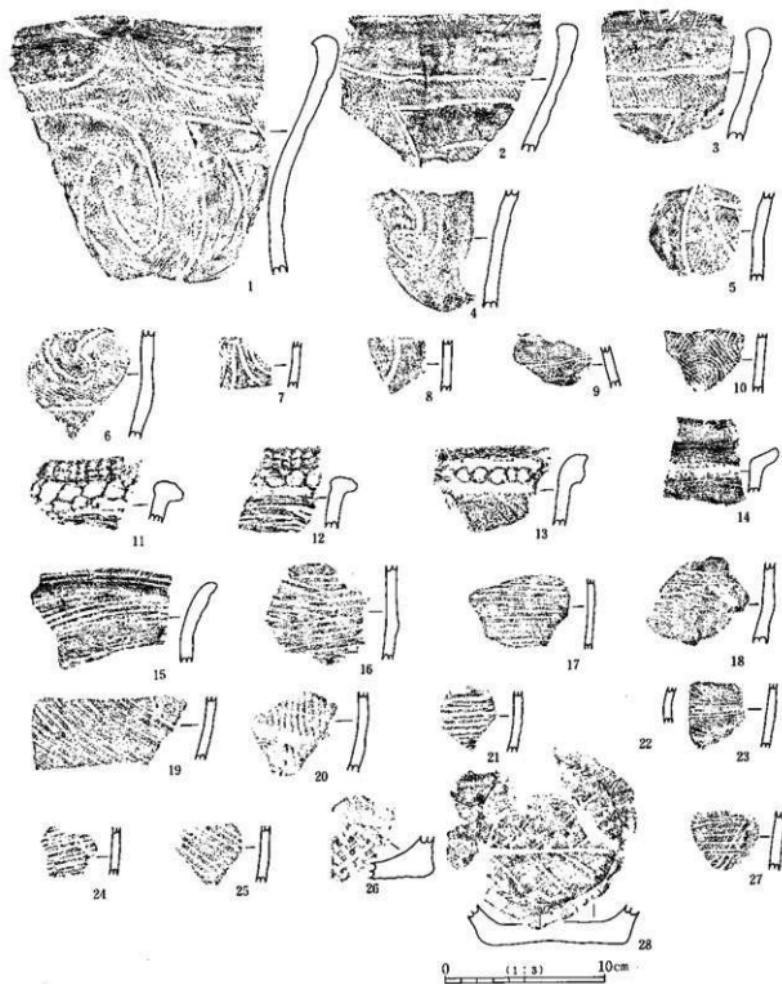
(4) D 地区出土の遺物 (第47・48・50・51図)

第48図12～21はD地区出土の土器片で大形な土器片の出土が多い。12～21は縄文時代中期の土器片で、22～25は後期の土器片である。第50図33～35は硬砂岩製の打石斧・鍤石で、第51図39は蛋白石製の石匙、40・41は硅岩製・黒曜石製の石鏃である。

第47図21は平安時代の灰釉陶器片、22・23は中世末の天目茶碗片、24は瀬戸灰釉の陶器片である。

第55圖 土器和出土土器





第56図 A～D地区出土縄文時代後・晩期土器

IV. 調査のまとめ

1. 阿南町内屈指の遺跡

阿南町では昭和22年から宮坂英式先生による発掘調査以来、各所で発掘調査が行われている。それらの中で主な遺構が検出された遺跡を北からあげると、富草地区では宮の原・中約根・白須遺跡で、大下条地区では早稻田遺跡（宮下・ハネ・久保畠地籍）・和知野遺跡で、和合地区では西峯・境の沢・巣山・根吹遺跡である。新野地区では境の沢・千治林・網張遺跡で、検出された住居址は縄文時代33、弥生時代3、古墳時代1、平安時代3、中世1軒の41軒で、縄文時代でいえば半分以上が根吹遺跡で占めていて、土壙数・集石遺構数を含めれば断然多いことが分る。

根吹遺跡では、縄文時代の住居址が多いことだけでなく、縄文時代前期の住居址5軒・縄文時代晚期の竪穴（住居址）が検出されたことに大きな特長がある。縄文時代前期・晚期の住居址が検出されて、縄文時代後期の焼土・集石遺構も発見されたことも、飯田・下伊那地方でも例の少ない検出例になっている。阿南町では、縄文時代中期の住居址の検出例は、富草地区的門原白須遺跡の6軒が最も多かったが、今回の根吹遺跡では、住居址でなく別の機能を持ちそうなもの（1・6号住居址）や一部しか検出されないものも含まれてはいるが、11軒確認されたことは特筆される調査結果ということができる。

集石遺構というのはいろいろな種類がある。早稻田遺跡で検出されたものは、中世期の集石遺構であったが、根吹遺跡の場合は縄文時代前期の集石炉・集石遺構が14基以上も含まれ、縄文時代中期・後期のものが50基以上検出されている。とくに、縄文時代後期かと思われる集石遺構は、焼土や土壙と結びつきそうな遺構群で、祭祀的または墓域的な目的を持つ遺構群が、台地全体に広がりそうに思える珍しい遺構群かと思われる。

焼土塊だけでも30か所も発見されたことは特異かと思われるのに、焼土の下に集石遺構が重なることは珍しく、それが集団で検出されていることに特長がある。集石遺構の項で詳しく触れるが、石列を中心にして焼土群が直線的または弧を描くように配列された焼土群・集石遺構群・土壙群が、台地全体に広がり大きな遺構群が形成されている。

縄文時代晚期の土器は全体的にみればそう多くないが、縄文時代晚期の土器片出土例の多い阿南町にとっては重要な発見のひとつになる。甕形土器を二つ用いて、それを重ねたり・双方の口を合わせて棺にする例は、縄文時代から弥生時代の初め頃に行われた葬制のひとつであって、縄文時代晚期の土器出土の多い阿南地方では、この発見は遅いくらいの状況で、この土器棺墓は今回が初めての発見で、今後の発見に大きな示唆を与える重要な遺跡になったといえる。

遺構は発見されていないが、弥生時代後期・平安時代の灰陶陶器片・中世の天目茶碗片も発見されている。以前から独鉛石が出土し、平安時代・中世の陶器片出土が記録されている遺跡であるから、どこかに中心があるかと思われる。縄文時代前期（やく7000年前）から中世期（やく600年前）まで長い間にわたって使われたところである。何れにしても国道が通過する範囲はこの台地の一部であるか

ら、台地全体の広さを考えると阿南町内屈指の大遺跡ということになる。

2. 縄文時代前期の集落確認

縄文時代前期というのはやく7000～6000年ほど前の時代で、現在の所飯田・下伊那地方では住居址や土器等の発見は少ない。とくに住居址が複数で発見された遺跡はごく少なく、飯田インター敷地内の小垣外遺跡の4軒が最高である。G地区では7・9・10・11・14号住居址の5軒が検出されている。7・14号住居址は重複しているので、それぞれ離れた位置にある4軒は住居址の位置関係・出土する土器形式からみると、そう大きな時期差はないのでひとつの集落の可能性が高い。しかも、道を挟んだ北側H地区には、同じ時期かと思われる集石炉・集石遺構・土壙群が検出され、土器片が多く出土している。出土する土器片は住居址のものと殆ど同じ時期のものと思われる所以、ここに集落が形成されていることは間違いない。中央の道路下は掘れなかったが、北側用地境から縄文時代前期の土器片の出土の多い竪穴の一部が検出されている。もしこれが住居址だとすると、南側と北側にそれぞれ住居址が並び、その中に集石炉・集石遺構・土壙群を持つ集落の形態が想定できる。このような例はほかの地方の遺跡にもあるので、可能性は高いと思われる。一般的には縄文時代前期の集落は多くても5～6軒といわれている。近年ところによっては10軒以上の集落が確認された例はあるが、特例かと思われる。この場合も同時期でなくて時期差があると考えてみても、住居址と集石炉等の位置関係は変わらないので、もし北側に住居址があるとするならば、帶川のような山間地にあるものとしては極めて大きな集落であって、飯田盆地に形成される集落に勝るとも劣らない集落の検出であったと思われる。出土する土器形式からみると、縄文時代前期後葉のもので、関東地方の諸磯式系の土器で、新野網張遺跡出土のものとよく似ている。

飯田盆地では今のところ縄文時代前期の遺跡が割り合ひ少ないので、阿南新野地域は前々から前期の遺跡の多い地方として知られている。昭和25年に発掘調査された網張遺跡では前期の住居址が検出され、多くの土器の中に鉢形土器の完形品があることで有名である。この他に新野地域には前期の土器片が出土する遺跡が10か所登録され、限られた範囲の中でこれだけ前期の遺跡が登録されている所は珍しい。

和合地域でも16か所の埋蔵文化財包蔵地が登録されている中で、ホドノ・巣山A・巣山B・帯川・根吹の5遺跡が登録されている。根吹遺跡は前々から前期の土器片出土が伝えられてはいたが、C地区では少量であったが、G・H地区では相当量の土器片が出土し、用地外でも土器片を拾うことができる所以、広範囲に前期の遺物が出土することが証明されている。阿南町の内、富草地域では26遺跡中3遺跡、大下条地域では21遺跡中4遺跡であるから、新野・和合地域が前期の遺跡がいかに多いかが分る。

3. 焼土群と集石遺構群

C地区では28基以上の焼土塊、47基以上の集石遺構があり、石列遺構・土壙群・竪穴状遺構(1・6号住居址)が集中して検出されている。これらが全部同時期のものではないが、縄文時代中期後葉から後期にかけた遺構群で、この台地全体を利用した墓地群か信仰対象の場所として使用された可能性

が高い。中心になる場所はC地区であるが、南上段のA・B地区にも4基の集石遺構があり、下方のD地区では集石遺構は確認されないが、壇底に焼土を持つ竪穴状の遺構や単独の焼土塊が検出されているので、相当広範囲になると思われる。

本文で報告したようにC地区的台地上方に、台地を横切るように石列1・2、集石遺構4が長く続き、石列1の中には、石棒状の長石と平状の石が組み合わされた場所が2か所検出されている。この石列の上層に焼土2・3がある。この焼土に並ぶように、東側には焼土1・10・26があり、西側には焼土8・9・11・12・21が直線的に配置されている。この焼土列の北側下方にも直線的または弧状に並ぶ焼土群があって、この焼土中とその周辺からは縄文時代後期の土器片が出土している。焼土塊の下層や隣接した位置またはその中間に別の集石や土壤が検出される例が多い。

ここでいう集石遺構というのは、上面に石の集まりが検出されて落ち込みのあるもの、掘り下げてみて下層に集石があるものを登録している。土壤とは上面に石のない落ち込みを登録している。掘り下げてみると集石状のものが検出されたものもあるので、集石遺構と土壤を厳密に分別することの困難なものがあるので、土壤として登録したものの中にも集石遺構がある。

明らかに焼土の下層から集石遺構が検出されたものは、焼土2・3・4・6・7・10・17・23の8基で、隣接して集石遺構が検出されたものは、焼土5・13・15・17・2・25の5基で、合わせると13基でほぼ半分になる。下層まで完全に調査していないものが多いので、この数は増加するかと思われる。とくに焼土と石列・集石遺構が重複しているものは、石列1と焼土2・3であり、焼土4・6・17と集石遺構17・18・45や、焼土7と集石遺構12・14、焼土2・3の重複、焼土10と集石遺構41の重複である。これらの焼土塊や集石遺構からは縄文時代後期の土器片が出土している。

焼土塊の配置・集石遺構の広がりをみると、一連の広がりが観察される。その中でも石列1・2と集石4とのつながりは顕著である。C地区的台地上方に位置して地形傾斜に沿って等高線状に配置され、それに一定の間隔を置いて並んだり、沿うようにして焼土群・集石遺構群・土壤が位置していることから、ある目的を持った一連の遺構群と思っている。さらに、1・6号住居址の上層にあった焼土や集石遺構も含める必要がある。1・6号住居址の下層出土の土器群は縄文時代中期後葉のものであったが、上層出土の土器片の中には縄文時代後期のものがみられる。とくに、1号住居址の上層で登録した集石遺構19・20・21・22・23・24・25・26は集団をなし、その周囲の集石遺構を含めると台地東側に意図的に構築された集石遺構のように思われる。それぞれの集石遺構の下層まで掘り下げていないので確かとはいがたいが、縄文時代中期後葉の集石遺構と縄文時代後期の集石遺構が連続してこの台地に構築された可能性もあると思われる。

石列遺構から出土した石棒・鍤石は形態的には縄文時代後期のものと思われる。他の遺跡で検出された自然石利用の石棒と集石の場合、縄文時代後期の例が多いので、集石遺構を含めて縄文時代後期のものと考えられる。第52図の鍤石集成の35個の内、石列遺構出土の6個を含めて、焼土・集石遺構関連のものが25個ある。集石遺構から発見された丸石または凹石も、この遺跡ではひとつ特徴かと思われる。丸石は必ずしも後期だけのものではないが、1~2個の丸石が出土した焼土・集石遺構が多くなったことに注意したい。これらの遺物が即副葬品とはいがたいが、墓地群か信仰的な遺構集団であると想定する条件のひとつである。

4. 縄文時代晚期の土器棺墓と土器片出土

縄文時代晚期という時代は、水稻耕作が大陸から伝わり、やがてその文化が北九州・瀬戸内・畿内・東海地方を経て伊那谷へも伝わる。次の新しい弥生文化へ橋渡しされる時代である。飯田・下伊那地方へは三河方面から天龍川や峠道を辿りながら、阿南地方や西部地方を経て伝えられている。そのため阿南地方は縄文時代晚期の土器出土地が多いといわれている。現在までに大量出土した所は、天竜村向方上の平遺跡、平岡満島南遺跡、大下条早稻田遺跡が知られている。西南部地方ではこの時期の遺物出土が多いといわれているが、根羽村では2遺跡、壳木村では3遺跡、天竜村では3遺跡である。阿南町は富草3遺跡・大下条4遺跡・和合3遺跡・新野10の20遺跡が登録されている。大下条では旧来は和知野遺跡が比較的多い遺跡として知られていたが、昭和55年からの数次にわたる早稻田遺跡の発掘調査により、宮下・ハネ・久保畠地籍からそれぞれ大量の条痕文土器片が発見され、阿南地方の特質を表し始めている。

今回根吹遺跡で確認された土器棺墓と土器片多出の竪穴状遺構は、阿南地方でも初めての発見であった。とくに、条痕文の壺形土器と水式の壺形土器が組み合わされたものは、「合わせ壺棺」と呼ばれる縄文時代晚期の葬制のひとつであって、まだ発見例の少ない飯田・下伊那地方では貴重な発見となっている。平成4・5年に高森町深山田・大宿遺跡でそれぞれ発見された土器棺墓群は、「合わせ壺棺」「合わせ口壺棺」が集団で検出され、同じ頃、飯田市中村で「合わせ口壺棺」が、根吹遺跡で「合わせ壺棺」が検出されて共に注目されている。

縄文時代晚期の「合わせ口壺棺」は三河・尾張地方が中心となる葬制のひとつであって、現在の所その南限は飯田・下伊那地方といわれている。根吹のものは「合わせ壺棺」ではあるが、中心に近い阿南地方で発見されたことに大きな意義があるわけで、今後、阿南地方でも発見される可能性が大きいといわれている。

5. 平安時代・中世の遺物

根吹遺跡は、以前から平安時代・中世の遺物出土地として知られ、独鉛石という特殊な石器が出土して注目されていた。今回は少量ではあるがD地区で発見されている。その所は黒土が堆積され、焼土を伴うビット群があり、その周辺から平安時代・中世の遺物が発見されている。この辺りから東側またはほかの場所でこの時代の遺構が発見されるであろうと思われる。この他に、弥生時代後期の土器片も発見されているので、7000年ほど前からこの台地が長く使われ、それぞれの時代に大きな集落が形成されていたことが実証されたわけである。

写図1 根吹遺跡の遠望



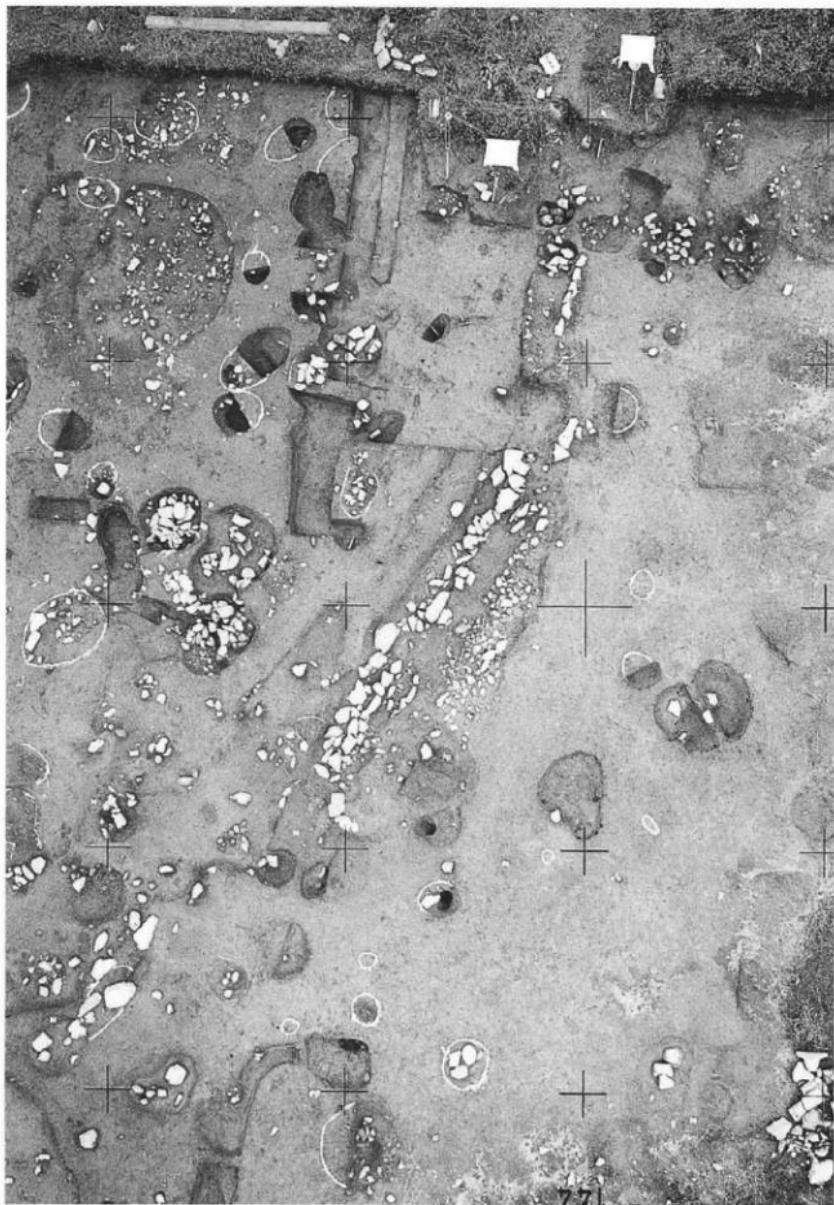
写図2 A・B・C地区の造構



写図3 A・B地区の遺構



写図4
C地区の遺構



写図5 G・H地区の遺構





1. 東から



2. 西から

写図7 C地区下層の石列と集石遺構



1. 東から



2. 北東から

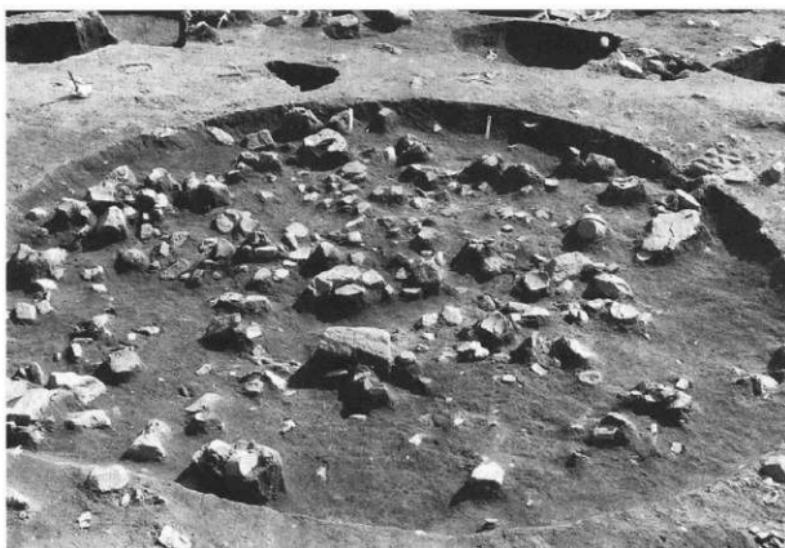
写図8

石列1と石棒





1. 集石造構の集合



2. 石と土器の集合

写図10
1号住居址（下層）

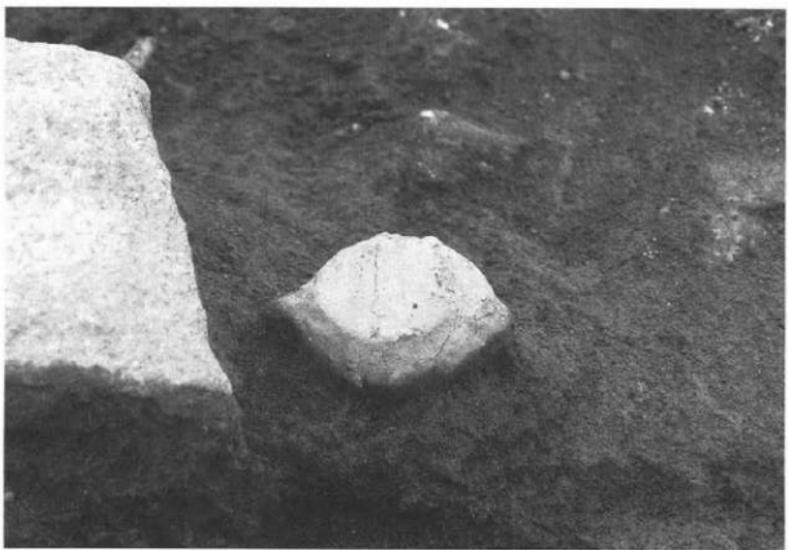


1. 石と土器の集合



2. 石や土器を取り除いたところ

写図11
1号住居址ミニチュア土器の出土状況





1. 黒色覆土の掘り下げ



2. 堅穴状遺溝の掘り込み



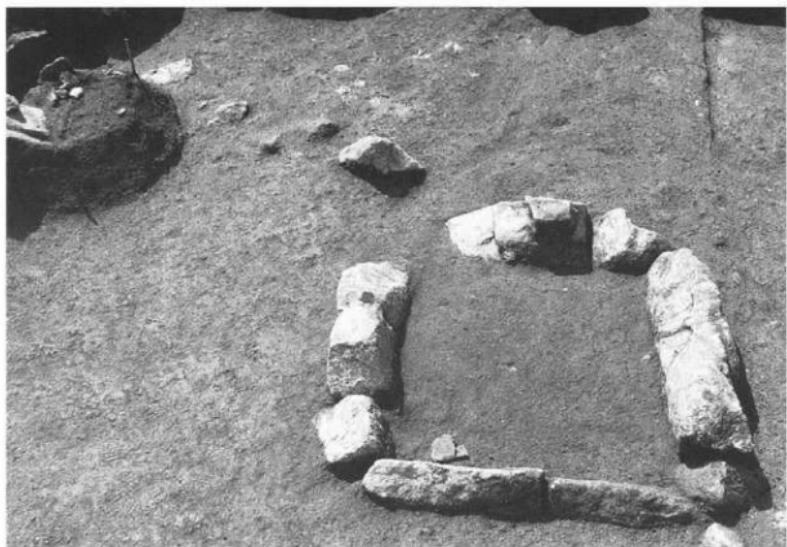
1. 北から



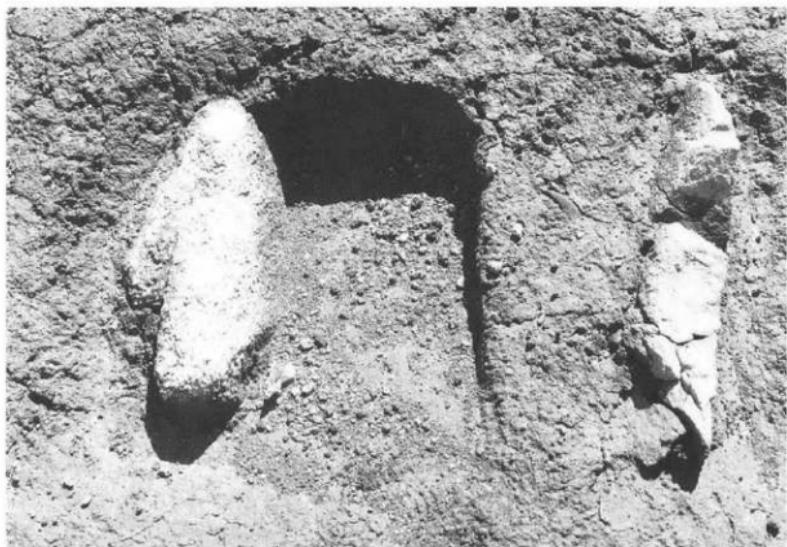
2. 南から

写図
14

3・5号住居址の石囲い炉



1. 5号住



2. 3号住



1. 6号住



2. 似た形態の1号住





1. 住居の重複



2. 無文土器の出土状況



1. 住居の重複



2. 湖炉を備えた石囲い火

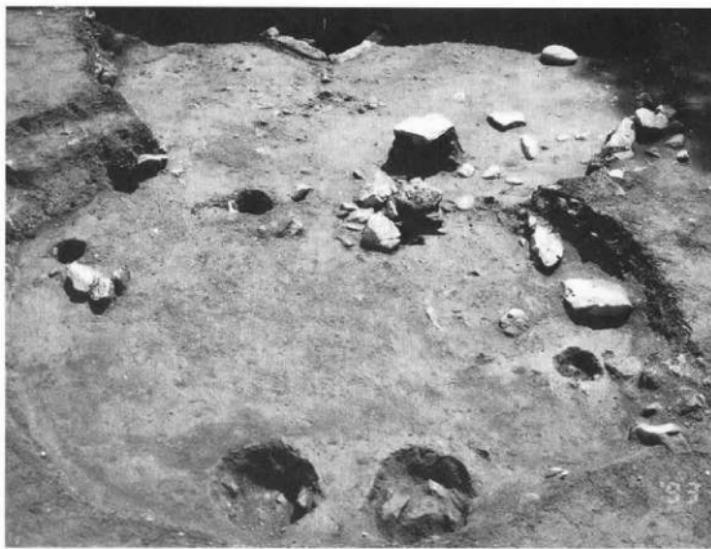


1. 北から

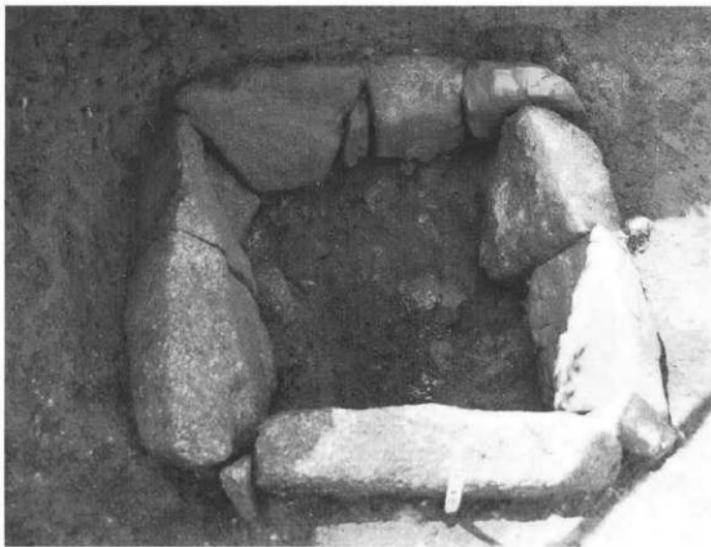


2. 土器片出土状況

写図
20
10・
12号住居址



1. 手前が10号住



2. 12号住石圓い炉

写図 21

11・17号住居址（上11住、下17住）

11
住



17
住

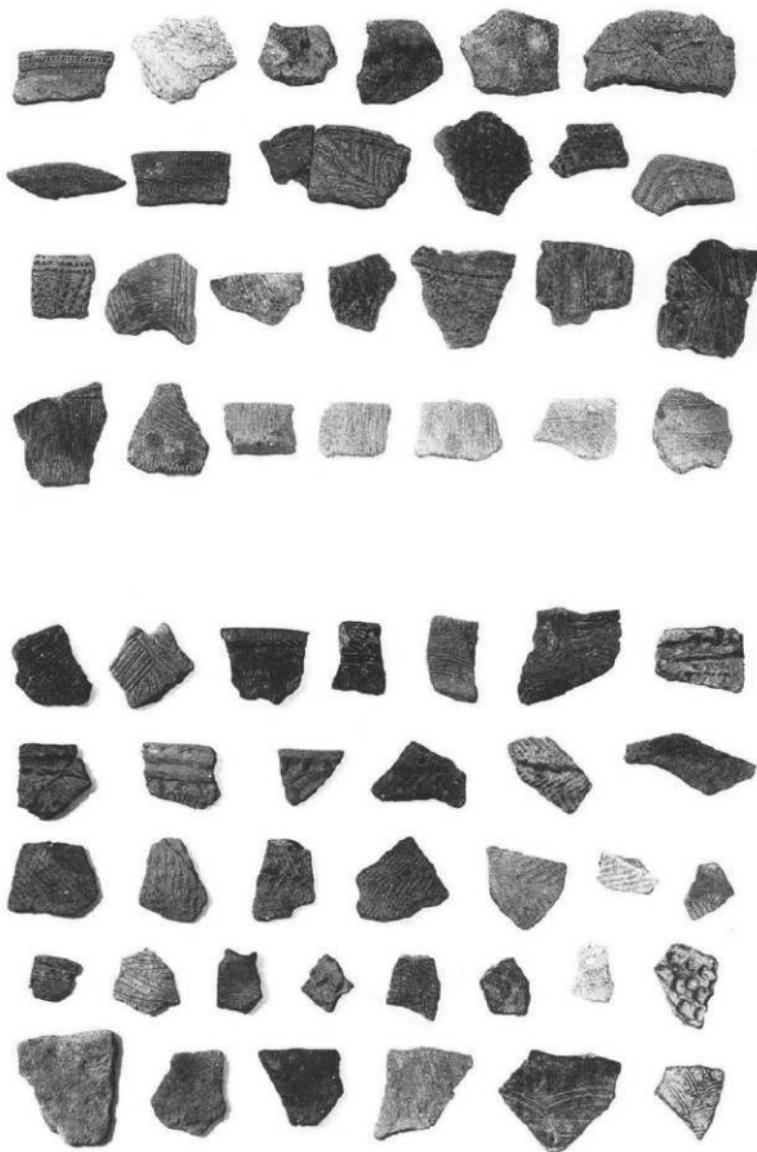


香炉形土器



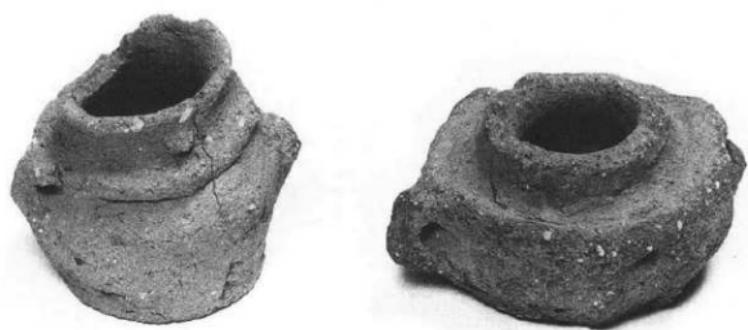
写図22

縄文時代前期の土器片



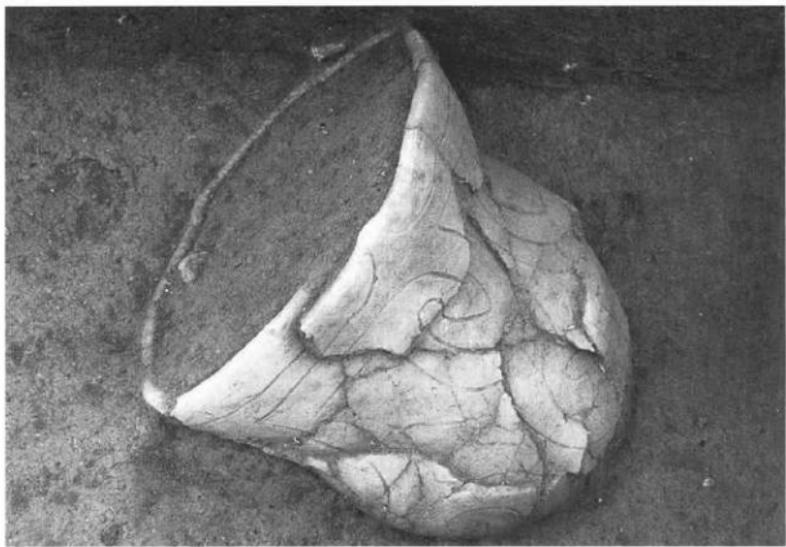
写図23

1号住居址のミニチュア土器、17号住居址の香炉形土器

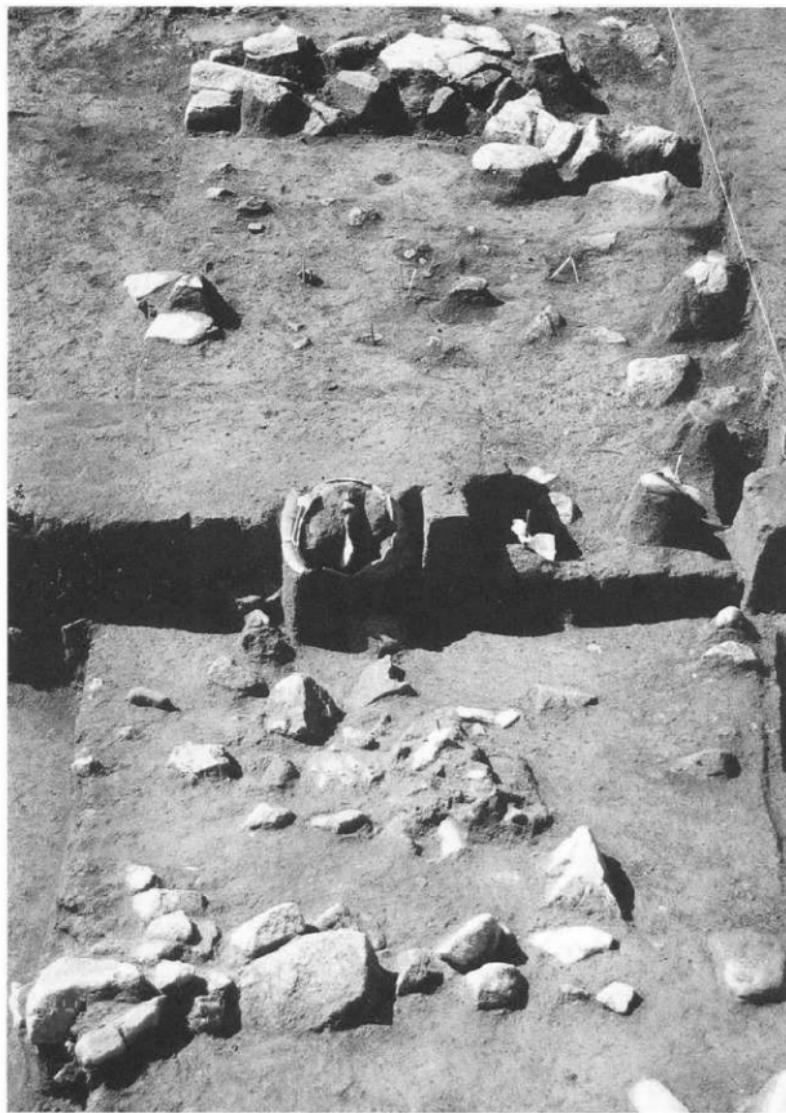


写図
24

縄文時代後期
獣形土器



写図25 繩文時代晩期の合わせ葬棺の出土状況



写図26

合わせ甕棺の出土状況

